大正六年九月十四日第三種郵便物認可　昭和十五年六月廿五日印刷納本・昭和十五年七月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

四天王寺五重塔特輯號



日本建築協會　第23輯第7號
昭和15年7月1日

——營業課目——

（同系各會社製品）

三星印砂付便利瓦及ルーフイング・フエルト　田島應用化工株式會社
特許ギルソイド防水工事責任施工　三星產業株式會社
各種アスファルト應用加工製品　日本岩綿工業株式會社
石綿代用・各種三星岩綿製品　三星セメント工業株式會社
三星サイドリユーム施工（床舖材）　合資會社宮城アスファルト研究所

三星印　登録商標

共通マーク　社各系同

大阪田島應用化工株式會社

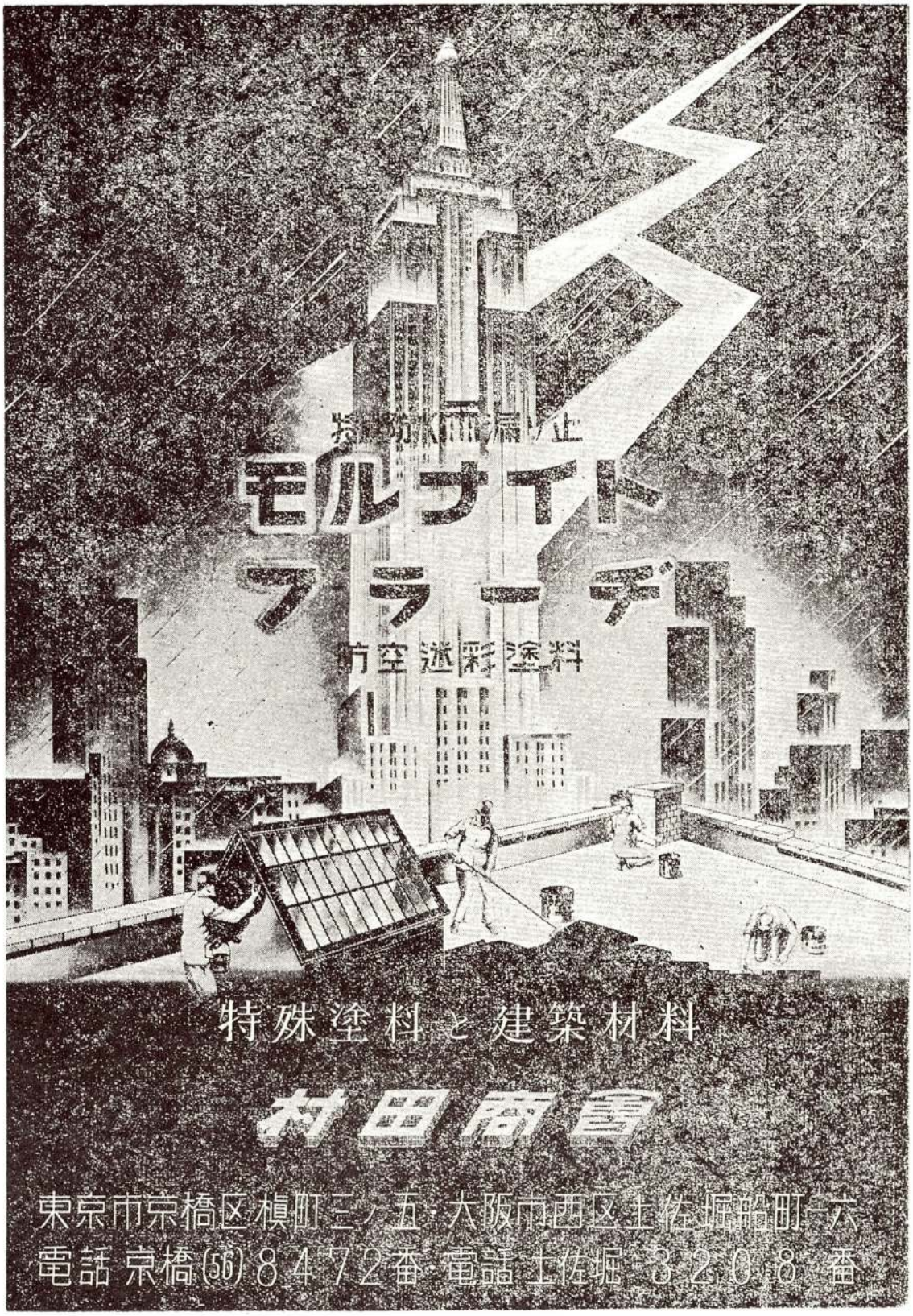
營業所　大阪市北區中之島五丁目三〇

電話十佐堀　一三二番
五六八二番
七六二九四番

倉庫用電話　櫻川一七二五番

受信登錄オウサカタシマオウヨウ

資材の保護に修理にモルナイトを
防空の完全にフラーデを
御使用願ひます



會　　告

七　月　例　會

七月例會として大阪市と共同主催の下に下記次第に依り天守閣に於て開催中の大洞窟院展見學並之が紀念講演會を開催致し候間御來會被下度候

時　　七月六日(土)　午後一時　晴雨不論

集合所　大阪城内　天臨閣　(司令部前　通稱紀州御殿)

講演會　北支と蒙疆の古建築に就て(幻燈使用)

講　師　京都帝國大學教授
工學博士　村　田　治　郎氏

見　學　大　洞　窟　院　展

於　天　守　閣　(入場料は會にて取計ひ申候)

說明　奈良飛鳥園主　小　川　晴　煬氏

申込〆切　往復ハガキにて折返し申込の事

但會場に制限あり定員に達したる時は先着順に依り〆切申候

追而大阪城公園内自動車乘入れの儀は一般は禁ぜられ居候も當日は特に會場迄乘入れの事に内諾を得置き候間自動車使用の向は表門監視所に講演會行の旨御傳への上お越し被下度候

お願ひ　會員章着用と集合時間の勵行は市役所と共同主催につき特に御願申上候、尚城内は寫眞機携行嚴禁に付き御諒承被下度候

(會勢幹事會主催に係る七月見學先は目下交涉中にて本誌發表迄に決定に至らず候間七月に限り近日中別途に通知申上べく候尚八月は暑中につき見學休止致し候)

昭和十五年六月三十日

社團法人　**日本建築協會**

建築と社會

第23輯　第7號　昭和15年7月發行

七　月　號

目　　次

目　　次 …… （1）

口繪（四天王寺五重塔全景）…… （色刷8度）

卷　頭　言 …… （2）

昭和十五年五月落成の四天王寺五重塔に就いて …… 天沼俊一・政岡基次（3）

（附アート・グラビヤ頁）

言葉より見たる≫塔婆≪ …… 瀧澤眞弓（35）

讃　　仰 …… 村田治郎（42）

再建成る四天王寺五重塔 …… 藤原義一（44）

四天王寺再建五重塔について …… 吉村孝義（47）

訪歐の會長より會員諸君へ！ …… (56)

第3回全國都市美協議會に出席して …… 錦田直一（57）

撫養製鹽工場見學概記 …… 倶樂部室主催（60）

☆紫　烟　室☆

地下鐵内に於ける防毒實驗の一感想 …… 增井敏克（62）

建築てふもの …… 尾龜清四郎（63）

過渡期の感想 …… 新名種夫（64）

☆新建築欄☆

日本・新大阪驛

會　　報 …… （66）

巻頭言

獨逸の電撃の様な進攻が新聞紙上に傳へられる毎に、各國は獨逸軍の、進撃の豫想を超越した速度と、その神秘的な勝利との、由つて來る原因に就て、全くいろいろな揣摩臆測に耽つてゐる様である。

或はそれを獨逸の有する最新武器の威力に歸し、或はそれをヒツトラーの作戰の巧妙さに求め、又或はそれが獨逸の整然たる統制政治にありとしてゐる。

恐らくその全てであらう。

だが、我々の獨逸から學び度い所は、今日直接に獨逸戰捷の理由となつてゐる所のそれ等のものが、果して何によつて得られたかといふ點である。

遂に奈翁を凌駕するとさへ評せられつつある、ヒツトラーの勝れたる作戰も、優秀なる武器と國民の整然たる秩序とを背景としてはじめて成立つものであるが、獨逸をここまで持ち來す爲にヒツトラーの採つて來た政策こそ、我々の採つて以て他山の石とすべき所のものであると思ふ。

國家の最高目的に向つての、技術の餘す所なき動員がこれである。英佛をして顏色なからしめた新式の武器もここに生れ、物資を中心とする整然たる經濟統制もここに整へられたのである。

我々は、建築家の仕事が、あらゆる技術を建築といふ1つの目的に統合するにあることを思ひ、ヒツトラーの建築家的な素質が、今日の獨逸を創りあげた一大原因であることを忘れてはならないと思ふ。

偶々四天王寺五重の塔再建記念の特輯號を出すに當り、聖德太子の政治上に於ける御偉業と、その建築に示された御技倆とが、共に同じく太子の御英資に基くものであることに、我々は更めて思ひを致さざるを得ないのである。

建築家の反省奮起を期待する所以である。



四天王寺五重塔全景

昭和十五年五月落成の四天王寺五重塔に就いて

天沼俊一
政岡基次

緒言

此度建築協會から四天王寺の新塔について何か書く様にとの交渉があつたが、實はこれで5度目なので、同じ題目では何度書いても同じな上に、ひまもないから辭退したところ、某君から數十枚の寫眞を渡され、是非此等の解說をかけと嚴談を持込まれ、進退谷まり友人政岡基次君に記事の負擔を乞ひ、小生は單に寫眞の解說を書くだけに止め、漸く切り拔ける事ができた。勿論讀み返すひまもなく推敲はまるで出來なかつた。故に自分が關係したものでありながら、誤まつた所があるかも知れない。それで政岡君に御迷惑がかかると相濟まないから私の書いたのには1つ1つ月日を記入し且つ署名をしておいた。

天沼俊一識

1 舊檫礎上遺構保存と新礎石据付

前に倒潰した塔の舊檫礎とその上の遺構保存の爲め舊檫礎上1坪の面積を限り、上方床版に達する間、鐵筋コンククート造の1室を形成し、昭和13年4月21日を期して舊檫礎上寫經石納入式とも申すべき尊嚴な法要が、このコンクリート基壇上に於て行はれた。當日舊檫礎の眞上に當る3尺角の穴（床版面中央部に作られた開口部）の檫には、素木の枠を組んで靑竹で飾り、その前に祭壇を設け後ろには、正面・左右と夫れ夫れ白砂・千體佛・寫經石・百萬靈講塔婆等が積み重ねられ、木下貫主代理中之院住職森田潮應師により、これ等納入の先鞭として、淨鍬を以て白砂が舊檫礎上に振り蒔かれ法會の幕を閉ぢたのであつた。

云ふ迄もなくこの千體佛は、塔倒潰後檫礎下發掘の際井戶側の様な半圓形をなせる石の中から發見された素燒の小佛體の事で、眼目の寫經石とは、今回新たに天王寺高等女學校職員生徒及卒業生有志によつて淨書された般若心經1字1石で、多數5色の小石より成り、又百萬靈講塔婆とは、長約5寸位から1尺位迄の小さな銅塔婆で、再建奇進者の篤信に報ゆる爲のものであつて、これ等何れも舊檫礎上に納められたのである。但し、寫經石・銅塔婆等舊遺構と關係のないものは、適宜差支へのない場所に納入し、砂は夫等空間の塡充用として土代りに用ひたのである、即ち舊檫礎上には、先づ以て元通りの位置に9つの石を並べ、その周を寫經石で埋め、銅塔婆も（バラバラになるのを慮り數個の木箱に收めた）納入し、淨砂を以て覆ひ、元通りの高さを置いて次の5つ石を並べ、適當に塔婆を配置してはその間を砂で埋め順次3つ石2段と、1つ石2段を舊位置に据え、最後に2個の井戶側様石迄都合よく据えつける事が出來た。これ等舊遺構の位置は、主として四天王寺圖錄伽藍編に於ける報告に基づいたもので、物自體の性質上、先づこれ以上の正確さが望めない事は致し方がない。かくしてこの井戶側様石の周りにおくべき「四つ石」も多少の缺き取り位で首尾よく6尺角の穴の中に納まつたのが3日後の24日であつた。

以前の通りなら、この上にすぐ新檫礎が載るのであるが、今回は基壇がすつと高く（3尺餘り）なつた爲、さうするわけにいかないので、この四つ石の上に新たに蓋石を設けて、井戶側內容物の保護に資する事にし、新檫礎は別にその上所定の高さに据えるべく、蓋石の完成迄千體佛の納入はしばらく見合せる事になつた。1方豫て工作の出來上つて居た檫は、4月26日よりそろそろ基壇上に運び込みを始め、1番長い第3柱（約70尺）に手間取つた他は比較的簡單に、第1・第2と合計3本共全部月末迄には運び込みを了し、5月2日よりそれ等の繋ぎにかゝり第1・第2柱を先づ接續し、次いで第3柱を其上に繋いで總長137尺の檫が出來上り、5日には接手周めも終つてここに素屋根の中央高く細長い檫の先が中空に聳える事になつた。（但しこの時は假据えで檫礎の上に載つて居ない事勿論である）

因みに檫の太さは元口で直徑3尺、末口で同6寸、下より第1柱は長約40尺の高野材、第2柱は長約30尺の土佐材、第3柱は長約70尺の吉野材で、何れも内地檜乍ら夫れ夫れの寄進者によつて別々に奉獻されたものである。

これより先、5月3日には基壇の周に遣形が施され、6日からは側柱の礎石を据え出し、四天柱のそれを以て8日に据付を了し、13日からは愈々これ等の礎石上に初層の柱を立て始めた。側柱12本と、最後に四天柱の中2本（南側2本は立柱式に邪魔になるので建設を式後に延ばした爲）と合計14本で1日置いた15日にはすつかり立て終へてしまつた。1方外陣敷石仕上げになる處は、床版上輕コンクリートを打ち側柱の間を繋ぐ狹間石（長押の下になるので、地覆石とも云へる）も14・15兩日を以て据付けを終つた。又蓋石も漸くその下側になる面へ銘文の彫込みが出來て、5月17日午後、前述の千體佛を井戸側石の中に恭しく納入後、その上に被せられ、最後に殘りの間隙を砂で塡めて、翌18日には床版面3尺角の開口部に半分はまり込む樣に新檫礎が嚴然と据付けられ、ここに舊檫礎上の遺構は外界と完全に遮斷されて、永久に保存される事になつたのである。

五重塔新礎石概要

種別	個數	大いさ 縱	大いさ 横	大いさ 厚	材質	摘要
側柱礎	12	尺 3.20	3.20	約 1.10	北木島産花崗岩	上の柱の水平移動と腐蝕防止の爲、中門の場合同樣、石の表面に十字形の小溝を穿ち、この上に柱の根に作り出された十字の枘がはまる樣になつて居る
四天柱礎	4	3.50	3.50	約 1.10	同	この場合は直徑3尺5寸、脊2寸の圓型繰出しがあり、その表面に十字の小溝を穿つた事は前者同樣である
檫礎	1	4.00	4.00	3.00	同	下半は床版中の開口部にはまる樣1邊4尺5寸角となり、上半の床版上に出る部分は側面に傾斜をもたせた爲、全體の形は横から見ると、逆皿型鋲の如である。厚みが厚いのは中央に1尺角の枘穴と、更にその底に直徑8寸の舍利安置の穴を穿つた爲である

尙ほこれ等新礎石の概要を記せば上表の如くで、その中檫礎のみは、先に昭和13年1月18日舍利容器をその中に奉安する樣にと寺の方針が決定した爲、檫の枘穴（檫は懸垂式を採用したので、その移動を防ぐ爲、根に1尺角の枘を作り出し、これが檫礎中に穿たれた穴にのぞむ樣になる）と舍利安置の四所と兩方を備へる必要から、脊の高いものになつたが、不必要な重量は減するべく、特別の考慮を拂つた結果妙な形のものが出來上つてしまつた。併し据付後は、その上半のみが見られるので、他の礎石との釣合ひも決して悪くはない積りである。又蓋石は2個の石より成り、2つ並べて1邊約4尺5寸角、厚約6寸のもので、その內面中央（下側になる面）約2尺角程を綺麗に均して、そこに次の銘文を刻んだ。

昭和九年六月二十一日　依大風倒潰
昭和九年十月九日　自檫礎中佛舍利出現
昭和九年十二月二日　於基壇下十一尺餘發見創建時礎石
昭和十一年十月十三日　地鎭大法會修行
昭和十二年四月二十二日　釿始式擧行
昭昭十三年五月二十二日　立柱式修行佛舍利納入

四天王寺　住職　寂善代
一山大衆

かくて柱の繋ぎの貫や、1部長押等を取付け、5月20日には大枓も戴せられて、事實上の立柱を終り、丹塗りの色も鮮かなこれ等列柱の並び立つ基壇上に於いて行はるべき、5月22日の立柱大法會を迎へる諸準備が着々と進められていつたのである。

2　立柱式と舍利納入

既に地鎭祭及び斬始め式を終へ、着々その工を進めて居た五重塔は、其後約1ケ年を經た昭和13年5月22日を期して、愈々立柱式を擧行する運びに立至り、ここに本格的組立の第1步を踏出す事になつた。當日は好晴に惠まれ、數千の會衆列立の下に、壯嚴な大法會が五重塔基壇上に於いて修行された。式は午前10時より木下貫主導師となり1山大衆による讀經に引續き、工匠の手による柱固めの式を以て無事立柱式を終了したのであるが、ここに忘れてならない事は、當日の法會は「立柱式」には違ひなかつたが同時に舍利納入の意も含めて嚴修されたといふ點である。されば祭壇の背後中央には1段高く、新調の舍利容器に納めた貴き舍利を安置し、式後1般の隨意燒香終了を俟つて、午後正2時木下貫主自ら紅白の吊紐を取つて、礎の底深くこれを奉安し、塔信仰の對稱として未來永劫にその尊嚴を保つ事になつたのである。

抑々塔は塔婆であり、委しくは窣堵波、蘇偷婆等と書かれ、その源は遙か印度のスツーパ（Stupa）迄遡り得る事を思へば、塔婆の本體たる佛舍利の信仰的重要さは今更論ずる迄もなく、特に四天王寺の如く塔婆中心伽藍配置を有する寺院にあつてはその重要さは一入の事である。本寺の緣起によるに、五重寶塔は一に六道利救の塔と稱され、建立に當つては佛舍利6粒に、太子の御髮6毛を加へられ、共に礎中に納められたと傳へられて居る。それ故に創建以來數度の災害を被り乍ら、常によく萬難を排して再建され今に當寺信仰の中心として仰がれて居るのであつて、先般の風水禍により、倒潰せる文化再建五重塔に於いてもその礎中央の凹所より、水晶球を中にして金銅の寶蓋と蓮座を具へた舍利容器が、更に金銅板によつて圍まれ出現した事は周知の通りで（四天王寺圖錄伽藍編參照）如何に丁重に保存されてあつたかが窺ひ知られよう。

隨つて今回の再建に當つても、この貴き舍利を納入すべき容器の設計製作に就いては、特に深甚の注意を拂ひ、塔婆の本建築にふさはしく且つ1層崇高嚴肅なものたらしめるべく、12分の努力を傾注した積りである。即ち舍利は先づ水晶製五輪塔型の水輪中に納め、それを圓筒型純銀製の器に入れ、これを金銅の筒に納めて、金色燦然たる寶瓶型容器の中央に位置する如くし、更に排氣鐘型の硝子器に納めて礎中央の凹所に安置したのである。

3　初層組立工事

5月22日の立柱式を終へ、翌23日より引續き第1層の組立に取掛つた。先づ法會に邪魔になる爲取除いて置いた四天柱の中の南側2本を立加へて16本全部の柱立を了し、これを貫・長押等で固める1方、柱上部には臺輪を取付け大斗を載せ、その上第1肘木を井桁に組んで斗を置き、更に第2肘木・第3肘木も同樣重ねて順次上の方へと組上げていつた。塔の斗栱としては各層共總て和樣3手先を採用したので、上方に軒天井と蛇腹枝輪が組まれ、その間に尾垂が突出し、更に丸桁上よりは多數の垂木が並列して軒裏を形作り、木負・茅負等の橫架材も載つて次第に軒が完成して行くのである。これ等外部から見られる化粧の部分と、完成後は全然見えなくなる處の粗木構造部分との組立狀況をわかり易く述べる事は甚だ困難であるが、後に揭げる寫眞とその解說で大體了解出來る事と思ふ。

初層3手先斗栱を組み終へ、引續き7月下旬より地垂木の取付を始め、茅負・飛簷垂木・裏甲と順次化粧軒を完成し、次いで8月初旬より桔木を組み、母屋桁を渡して、屋根野地を施し、中旬より屋根葺に取掛つた。當五重塔に於いては、他の金堂・中門等と同樣銅瓦を採用したので、その下地は普通の土瓦とは大いに趣を異にし、野地板を張らず、母屋桁の上に直接屋根の勾配通り、細かい桟を平瓦と圓瓦各々の位置に應じて、正しく配置したのである。隨つてこの上に瓦を葺上げても、桟の間の空間を自由に空氣が出入出來るから、夏季光線の強い直射を受けても、その熱で下地が焦げるといふ憂ひはないわけである。

かくて屋根を葺上げてゆくにつれ、2層の椽框の取付も行つて屋根の見切りをつけ、1方8月下旬より桔木の上に土居桁を組み始め、2層柱立に備へる事になつた。この土居桁は柱の土臺に當るわけで、呑1尺、

幅2尺程の大材を用ひ、充分構造の堅固を期した積りである。

4 第2層組立工事

かくして8月下旬第2層の柱が据はるべき土居桁の据付をなし、9月6日その上の柱立を了し、大斗を据へ第1肘木を組み、斗の仕合せや臺輪の取付等總て初層の場合と同様の順序に上へと組上げ、第2・第3肘木と重ねて、10月2日には尾垂の取付も終つた。やがて軒天井や通肘木・實肘木も裁り、10月中旬には丸桁の据付も濟み隅木や木負も組み終へ、下旬より地垂の取付を始めた。

11月に入つて茅負を組み、飛簷垂・化粧裏板を取付け、中旬には蛇腹枝輪・桔木等もついて裏甲の取付にかゝり、3層の土居桁も組まれる1方、初層内陣の臺輪取付や須彌壇下の地覆石外陣の布石敷等も始められ、かくして5月の柱立以來滿6ヶ月を經たのであつた。

5 第3層組立工事

土居桁を組み終へた處で、昭和13年11月24日その上に第3層の柱立をなし、同時に四天束を据へ、その間を繋ぐ貫や頭貫・方立・大斗等も型の如く取付け、第1肘木・第2肘木と順次上の方へと組立ててゆくと共に、第2層の裏甲取付やその端切りも濟んで12月中旬には瓦下地も全く完成した。かくて第3層は第1層・第2層等と同様の順序に從つて組立を續け、柱立以來滿8ヶ月の昭和14年1月22日頃迄には尾垂が大方取付を終つたのであつた。

1方12月初旬より初層扉板8枚（檜の1枚板でその大いさ巾2尺7寸5分、高8尺2寸4分、厚3寸5分）や四佛板4枚（樑を圍み須彌壇上に4方から取付いて枠の中に納まるものでその大いさ、巾3尺、長11尺、厚1寸3分）或は須彌壇下と四天柱脚元とを巡ぐる蓮瓣彫刻等の工作も始められ、下旬よりは幣軸・楣・蹴放等の工作にもかかり、上層の組立に併行して初層内部の完成にも努める事になつた。

昭和14年1月下旬尾垂の取付を了した後、その上の3手先目斗栱の組立や軒天井の組込にかかり、2月中旬に隅木を納め終つた處で1時この方の組立を中止し、初層工事の進捗を計る事になつた。

そのわけは塔の主體建築工事の完了と同時に初層内部極彩色施工も完成させたいといふ寺院當局の希望に沿ふ爲であつて、先づ出入口附近即ち楣・方立・幣軸等を取付け、3月中旬腰長押の取付にかかると同時に再び上層の組立に立戻つて、直ちに木負・地垂の取付に着手した。そして枝輪等の取付も始める1方、初層の方は扉上の臺輪長押をつけ、3月17日よりは須彌壇蓮座の取付にかかり、21日迄にすつかりその漆接着を了したのである。

又この間須彌壇格狭間や相輪の寶珠・龍車等の石膏原寸模型も完成し、前者は2月中旬、後者は3月中旬、それぞれ工事現場に搬入され、本工事も種々の方面よりその完成に向つて拍車をかける事になつた。

6 初層内部工事及び第4層組立工事

上層の主體組立工事に並行して初層内部の諸工事も進捗をはかる必要から、上と下と2手に別れて仕事を進めてゆくことにし、先づ下の方で組入天井の極彩色に取かゝるべく、その組子並びに天井裏板を本坊内の1室に運び、昭和15年3月下旬より天等の彩色に着手し、更に四天柱・側柱其他長押等、彩色を施すべき木部はその割れを埋める爲、4月中旬より小刻苧彫りを始め、引續きその小刻苧詰めにかゝつた。又須彌壇は3月下旬より4月上旬にかけて上下の框並びに兩側の束を取付け、根太を組んで床下工事を完成し、他方内陣の折上天井や樑を圍む四佛板框の假取付も始め、4月下旬よりは須彌壇框・束等の漆下地を施し、5月下旬には極彩色で文様を描いた外陣組入天井の取付を始めた。尙外陣に於いても4月中旬より5月上旬にかけ腰長押・臺輪長押・内法長押等の取付を了し、腰長押下の壁面には壁下地を施し、荒壁がつけられた。

上層に於いては3月下旬より4月上旬にかけ第3層の飛簷垂を取付け、中旬より桔木を組み裏甲・枝輪等

を取付け、下旬には第4層の土居桁を組み、4月28日に柱立を了して、愈々第4層の組立工事に取かゝると共に、第3層の野地も次第に完成し、5月22日立柱式以來滿1ケ年を經過した頃迄に第4層の第2肘木を組終へたのであつた。この間の工事で注目すべきは樑の懸垂を行つた事である。

即ち4月下旬4層目四天東の土居桁を組終へた處で、その中央に懸垂用金具を取付け、鎖で4方から吊すべく徐々に荷をかけて、その平衡狀態を檢べ乍ら、5月中旬全く懸垂を完了した。これで樑の枘が樑礎の枘穴に少し許り嵌り込んで所定の位置を保つ事になつたのである。

かくして5月下旬第4層第3肘木を組み、6月上旬尾垂を載せ、中旬より軒天井をつけ、下旬には隅第2尾垂・丸桁・桔木等を取付け、地隅や木負も組終へ、7月に入つて地垂の取付にかゝつた。次いで中旬には茅負・飛簷垂・天井裏板・枝輪等を取付け、桔木を組み土居桁を置いて、愈々最後の第5層柱立を待つ事になつた。下の方では6月上旬初層內部蓮座の漆下地にかゝり、西側の連子窓を取付け、中旬には內部極彩色の下塗りも餘程すゝみ、臺輪下小壁の漆喰上塗りも濟んで、下旬より須彌壇格狹間板の取付や臺輪の極彩色に着手した。7月になつて臺輪彩色の進捗と共に側柱上部の極彩色も始め、又須彌壇漆塗りや其床板の取付にもかゝり、かくて初層內部も日を追ふて賑かに莊嚴されていつた。

7 第5層組立工事と初層內部の莊嚴並に諸附帶工事

昭和14年7月下旬4層枝輪の取付や土居桁の据付をなし、26日その上に第5層の柱立を終へ、愈々最上層の組立に取かかつた。大斗を据へ第1肘木を組み、斗を載せ、更に第2肘木を組んでゆく手法等、凡て從前の各層同樣の順序に從ひ、8月下旬よりは斗栱間の壁下地にもかかり、9月上旬に臺輪の取付、第4肘木の組立を終へ、昭和13年5月の立柱以來滿1年4ケ月後の22日には尾垂も大體取付けられた。

又第4層母屋桁や屋根野地も8月下旬迄には施工を終り、前年8月初層の平葺以來1時中絕の銅瓦葺工事を8月より再び續行し、初層圓瓦葺を濟ませ、第2・第3層を經て、9月上旬第4層を大半葺終へた處で、第5層野地の完成を待つ事にし、隅巴・面戶瓦等の取付を最後に中旬より再び葺方中止となつた。

初層內部に於いては前より引續き外陣の柱や內法長押等の極彩色を施し、8月中旬より內陣の臺輪・柱・長押等にもかかつたが、9月中旬より堂本印象氏が四天柱に十二天像を畫かれる豫定にて、その準備もあり13日より佛畫完成迄裝飾文樣は畫家と寺院との希望要求により、止むを得ず1時現場施工を中止する事になつた。又須彌壇床は8月中旬漆下地を施し、9月中には全部仕上る豫定であつたがこれも亦右同樣の理由に基き佛畫完成迄施工を待つ事にした。

尙この間左官工事は4層中塗が出來初層は腰壁を除き上の方は全部上塗が完成した。又石工事は8月中旬より基壇石の搬入を始め、9月上旬よりその工作に着手し、大きな耳石や葛石が次次に仕上つていつた。この他7月26日には當局から寺院への指示により現素屋根に假設避雷針を設置した。

又8月3日・8日と新聞社關係の祈願祭が5層足場上で行はれ、次第に完成に近づく當工事現場は爾來1般篤信者並びに關係各方面の參觀で賑ふ樣になつた。

昭和14年9月下旬第5層尾垂の取付に續き、3手先目の斗仕合せにかかり、10月に入つて實肘木・丸桁・隅木等を据付け、中旬より木負・地垂の取付を始め、下旬には茅負を組み飛簷垂・化粧裏板・枝輪等も取付けられた。11月上旬より桔木や裏甲を載せ始め、中旬には相輪を受けるべき左義長柱の組立が出來小屋束も少しづつ立ち出した。

この間工作の方も連子窓・隅棟の拵へ等大分進捗し、工事開始以來幾度か搬入された內地產檜の原木の山も今は殆どこなされて廣い下小屋は全くガラ空になつてしまつた。

尙樑を4層目四天東土居より懸垂した事は既に述べたが、大きな振れを防ぐ意味から補助的にもう1ケ所吊る必要があり、第3柱に前同樣の吊金具を取付けて10月中旬左義長柱の土居中央より鎖を下げて懸垂した。

初層內部に於いては9月20日より10月10日に至る約3週間、堂本印象氏が四天柱に十二天像を畫き終られるのを待つて、中旬より1時中絕の須彌壇や蓮座の漆塗にかかり、又窓枠の極彩色を濟ませて11月より

内陣長押・四天柱等の施工を始め、1部未完の天井板やその組子辻飾りも全部取付けを終つたので上部は非常に美しくなつた。

石材工事は基壇の耳石・葛石・地覆石・束石等の工作を11月迄に大半終り、次は段石の製作に取かかり11月4日にはかねて京都市黒谷の金戒光明寺本堂建築場で天沼俊一直接監督の下に田伏石材合名會社の手で製作を終了した蓮花文彫刻の羽目石16枚が、貨物自動車にて當現場へ搬入された。

又基壇下を固めるべきコンクリート工事も10月早々より從來塔の周りに盛上げてあつた傾斜土面の掘方にかかり、下壇より上壇へと順次2重基壇型に打方を終り、11月下旬最後の階段型コンクリート打を以て全く終了する運びに立至り、下の方は餘程形が整つて來た。

尙相輪莊嚴の爲金箔を使用すべく、寺よりかねて當局へ書類提出中の處、10月14日付大藏大臣よりの使用の許可あり、11月14日よりその箔押しにかかり、又1時議論の的となつてゐた避雷針問題も、塔内に電導線を引込んで差支へなき旨10月12日付寺へ認可書の下附ありかくて萬事好都合裡にその設置準備をすゝめる事になつた。

1方本工事の方は昭和14年11月下旬より12月中旬に至る約1ケ月間、第5屋束・母屋桁等を組み、第4層以下の隅棟・斗下地等の取付をなし、12月下旬より第5層瓦下地にかかり、1月中旬迄にこれを仕上げ、次いで各層椽木口板並びに椽板の取付を始めた。

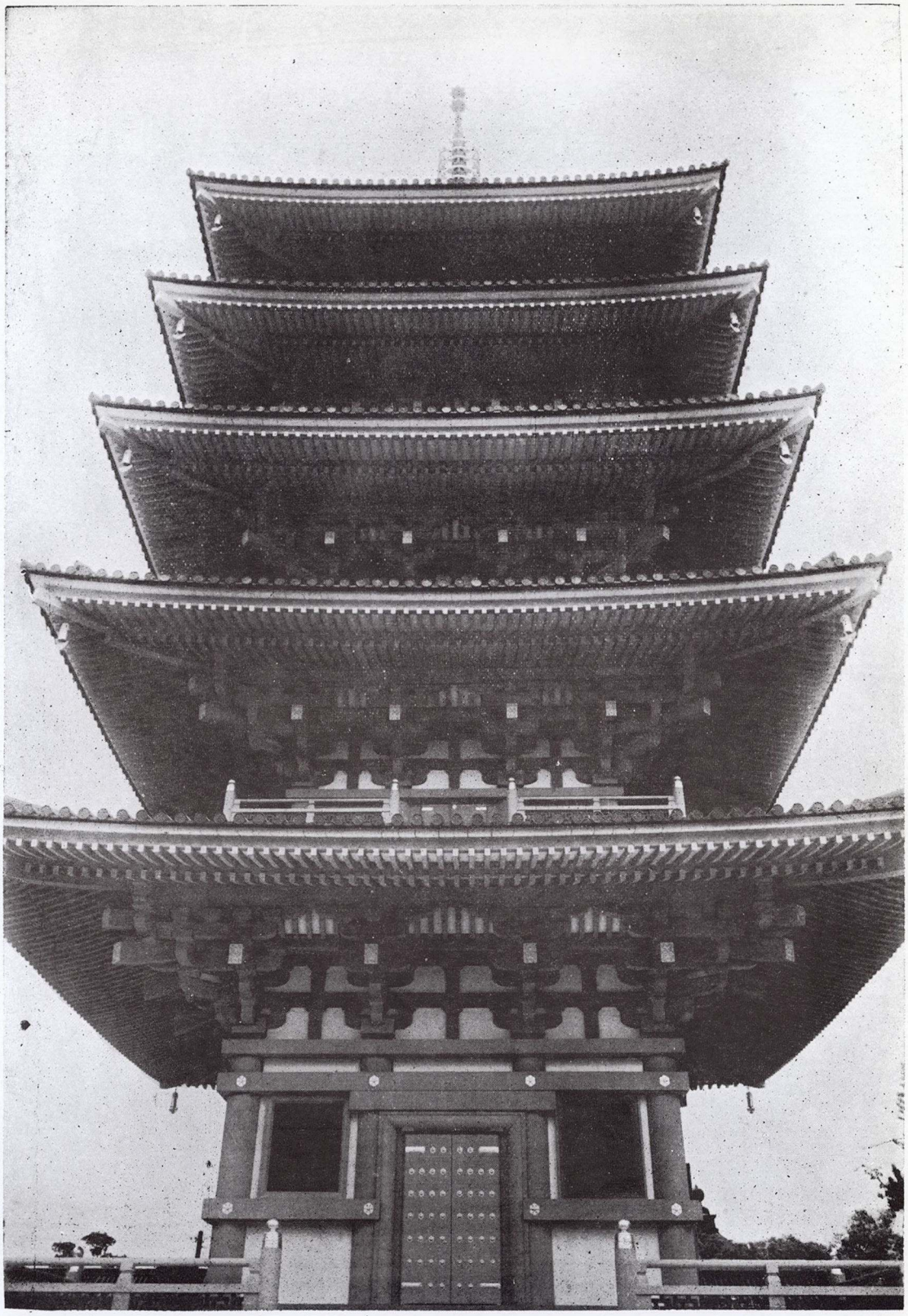
この間連子窓・勾欄組子・枓束・扉・窓小脇羽目等の工作も順次すゝめられ、又12月中旬より下旬にかけ、第4層屋根の銅板葺、各層鬼板・斗瓦等も取付け、別に相輪据付の爲め素屋根上へ新しく假足場を組立てた。初層に於いては引續き内陣長押・楣・四天柱・側柱等の極彩色を施工し、1月中旬より特に工人の數を增してその完成に全力をつくす事になつたため、仕事は大に捗り2月初旬よりは幣軸の彩色にかかる迄になつた。又須彌壇の黒漆塗や下の蓮座側面朱漆塗も12月上旬には完成し、中旬よりは格狹間忍冬文及び蓮座表面綠青下地にかかり、1月中より綠青塗を始め下旬1杯で格狹間だけは大體出來上つた。又基壇下コンクリート工事は階段並びに地覆石下を最後に、11月21日これを打ち終へ、基壇石工作は前同樣1月以降も着々その工が續けられた。

尙相輪に金箔を使用する事が時局下特に許可され、11月下旬より露盤・覆鉢・請花・九輪と順に下より箔押しにかゝり、12月下旬に至つてこれ等が1通り完成した。そこで露盤は12月22日一先づ現場へ運び、直ちに据付けたのであるが露盤受の梁や束の仕合せに相當日數を要したゝめ完全に所定の位置に納め終つたのは今年になつてからであつて、引續き1月22日にはその上に覆鉢と請花を組立てた。

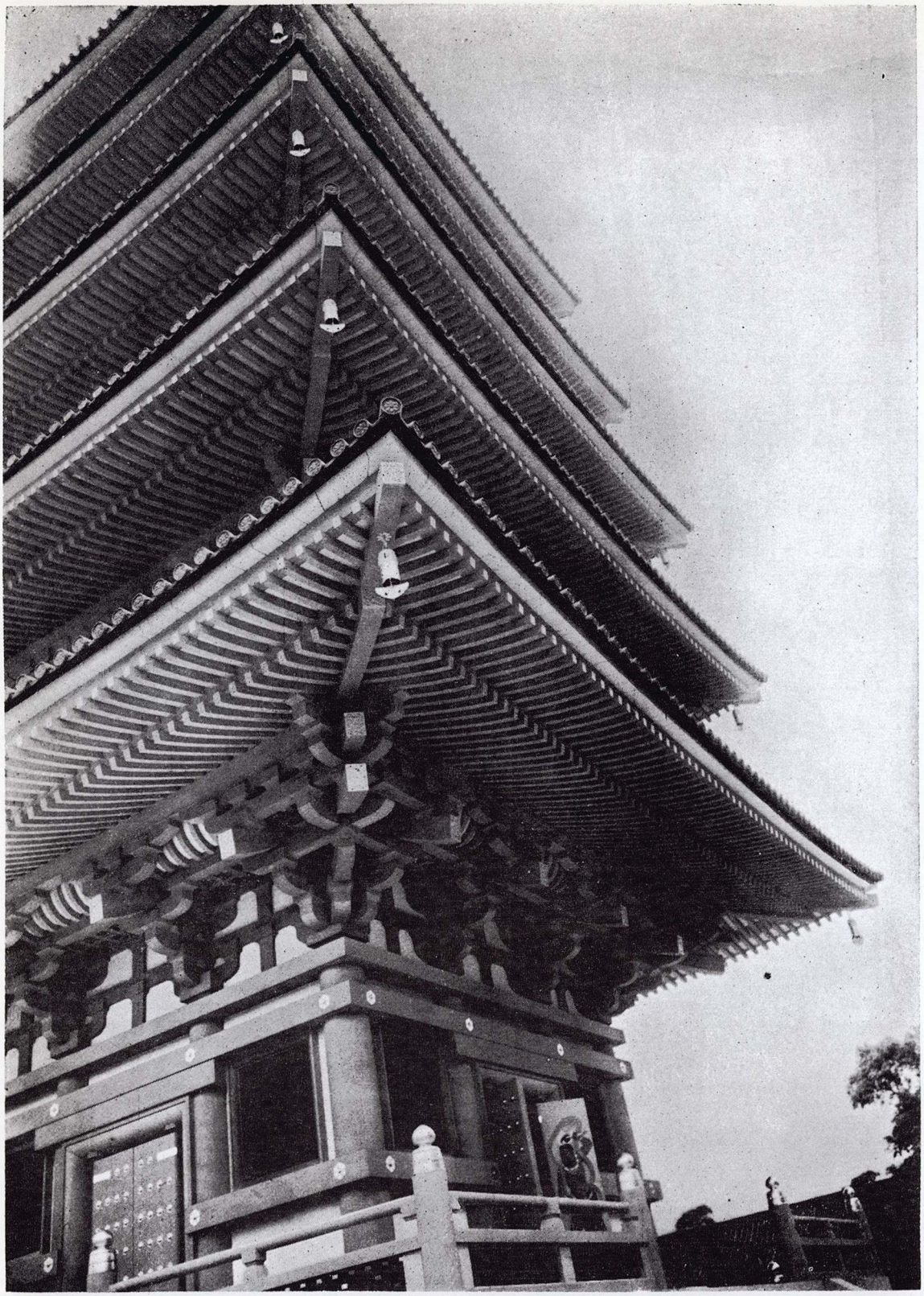
次に避雷針工事は11月下旬塔3ケ所に地中板を假埋設し、27日抵抗試驗の結果7.5オームといふ數字を得たが翌28日これ等の地中板を繋ぐ地中線を塔周に埋設し、次いで30日には地中板1個に對し、木炭3俵づつを入れて本埋設を了したので、12月14日再度の抵抗試驗の際には、僅か1.25オームといふ非常に良好な結果を得たのであつた。その後12月下旬電導線を塔内に引込み、碍子取付や各層屋根との連結線の施工を終つたのである。

かくて豫定通りと迄はゆかなくても、諸工事共先づ順調に進捗して最後の完成に努め、昭和15年5月竣工、同月22日より26日迄5日間盛大なる落慶法要が營まれた。

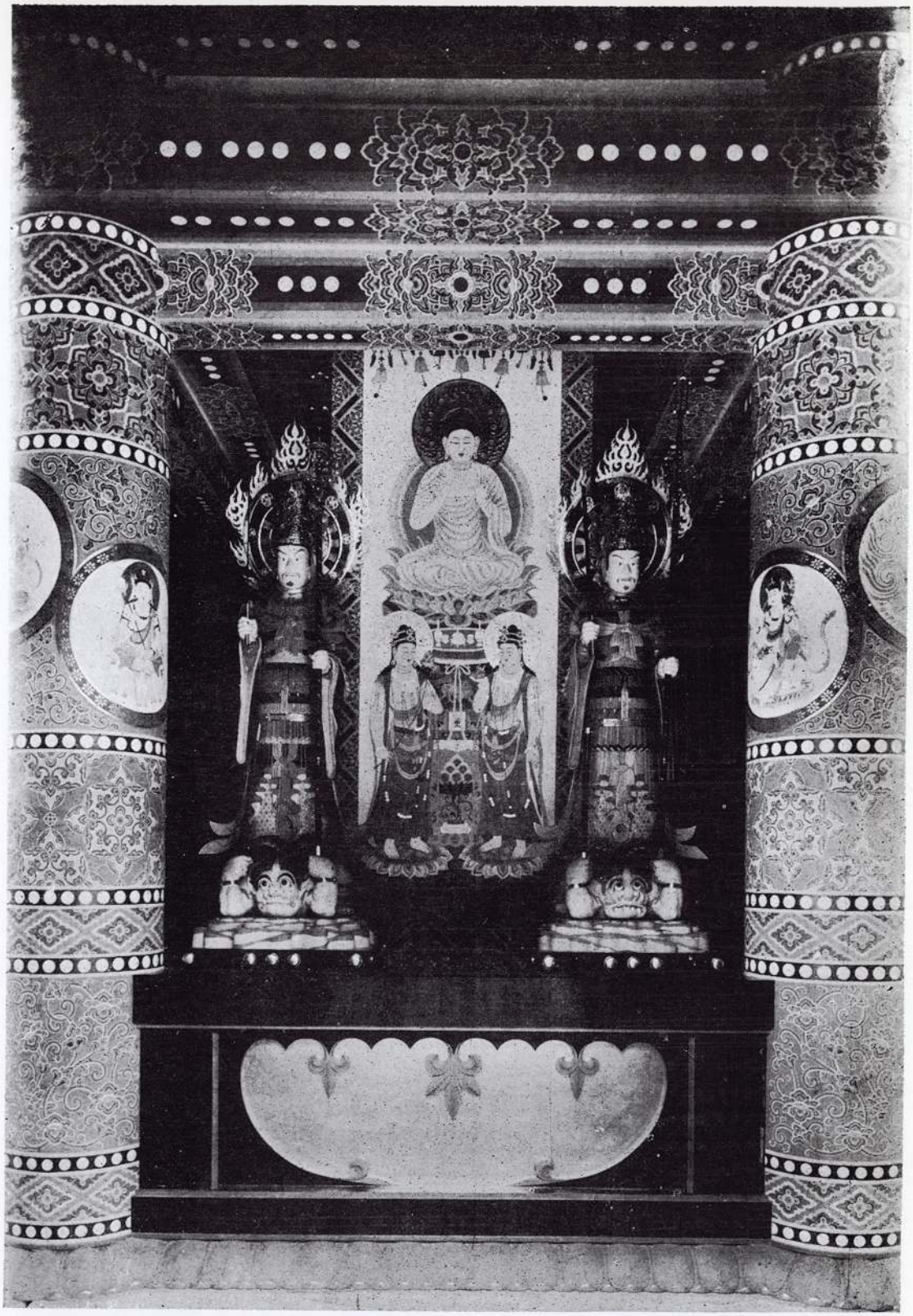
※　　※　　※



外部詳細①　西側からの見上げ寫眞。これで少なくとも３重目迄は三手先の枓栱を用ひてある事が知れる。初重枓栱全部（又は中の間だけ）と第２重中の間だけは、間枓にせず、中門上正背脅面中３間の様に、斗束にすればよかつたが、洵にどうも氣がつかないで惜しい事をしたと思つてゐる。初重東西の扉には、後に蓮花文の座をもつた引手をつけたから、今ではこの寫眞とは少し異なつてゐる
（5月29日・天沼）。

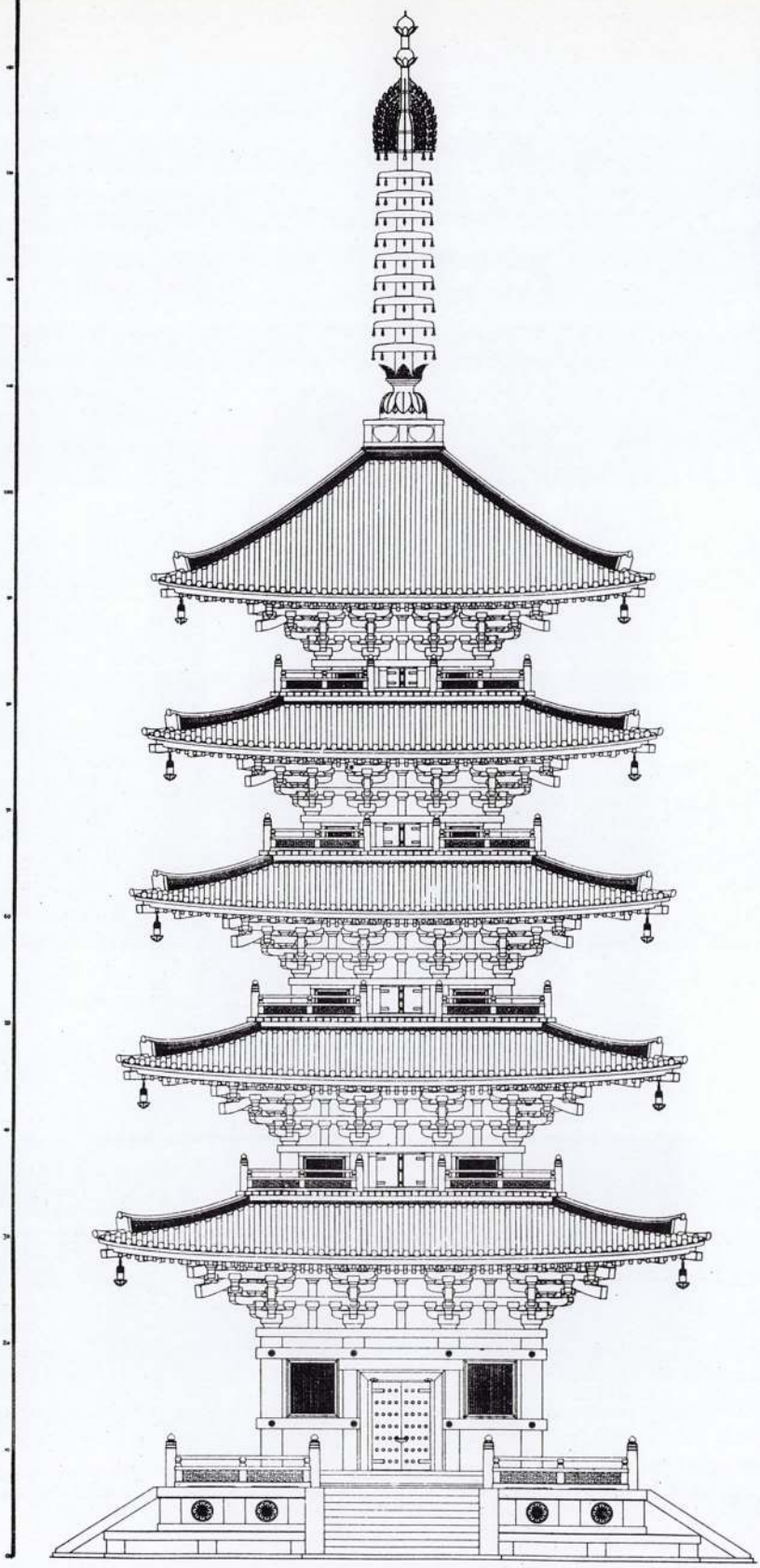


外部詳細②　此頃は斯様な後ろへ順囲しさうな寫眞が相當に流行する様だが、上も下も切れた倒れかゝた寫眞ではどうも學術的ではない様で解説の書き様がない。然しこれでも料供が三手先といふ事だけは判る。尾棰・化粧隅木・地及び飛檐棰の鼻に打つてあるのは雄黄色の釉藥をかけた陶器で、透彫飾金具の代用品である。此種のものは朝鮮の新羅時代の建築棰鼻の裝飾には相當に用ひられたが、内地のは遺物は未だ見出されない様である。だから創意ではないが内地の建築には初めての試みかも知れない。（5月29日・天沼）。



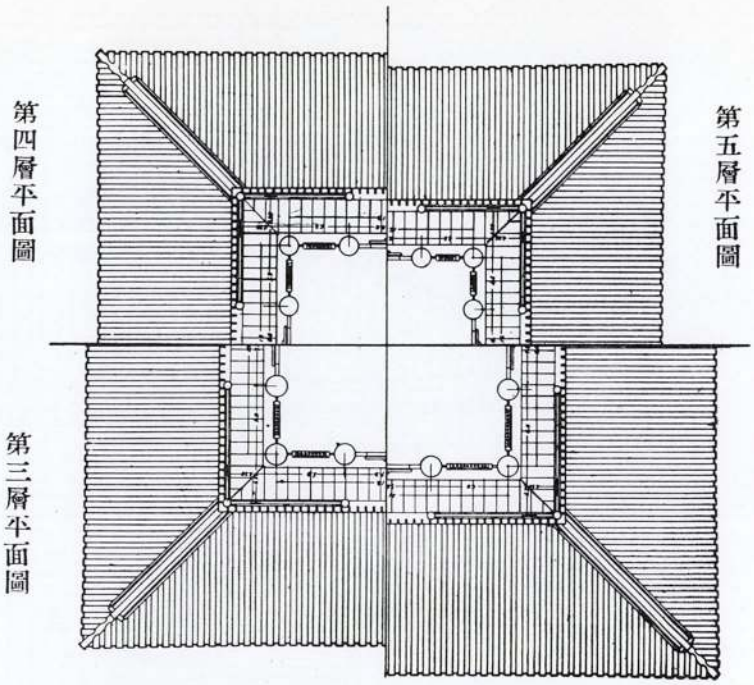
内部正面　初重南側出入口の扉を開いた正面をみた所。左右は夫々西南及び東南隅の四天柱。中央は中心柱を覆へる四佛板で．これは釋迦三尊．其左右は四天王のうちの増長天と持國天。四天柱圓文内の十二天（一本の柱に三躯づつ但し其輪郭を除く）と中心柱覆板の佛像（但し額縁を除く）は堂本印象氏．四天王は新納忠之介氏の作。グラビヤ頁第51圖參照（5月26日・天沼）。

四天王寺五重塔再建立面圖



工学博士 天沼俊一 設計
吉村孝義 製圖

四天王寺五重塔各層平面圖

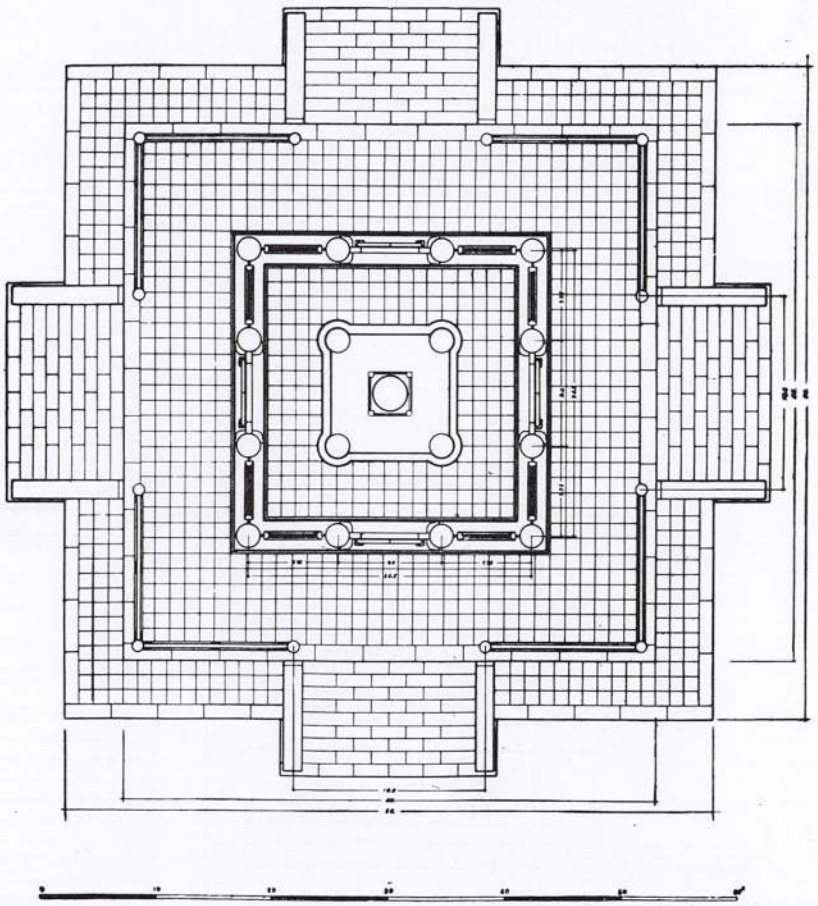


第五層平面圖

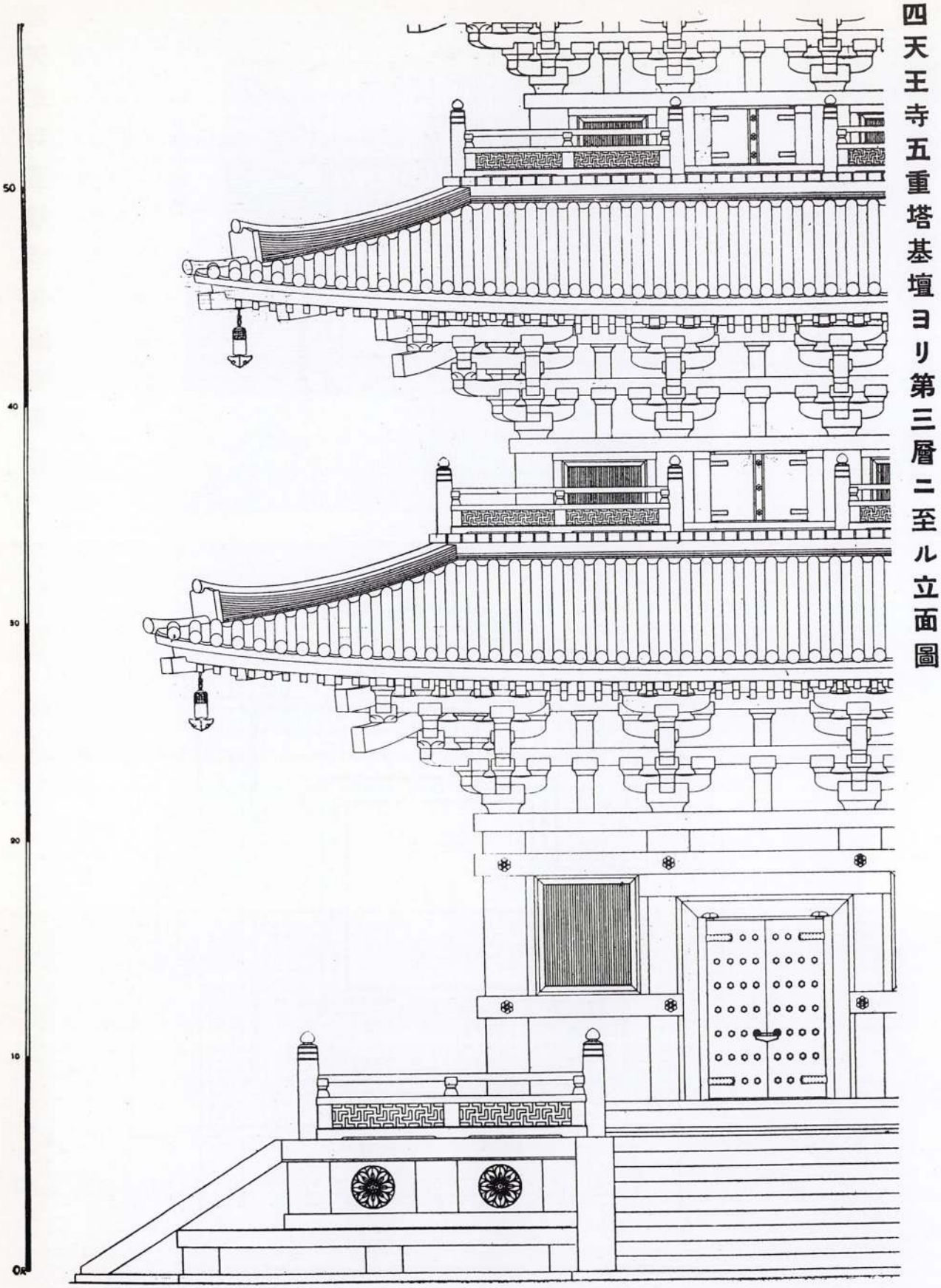
第四層平面圖

第三層平面圖

第二層平面圖

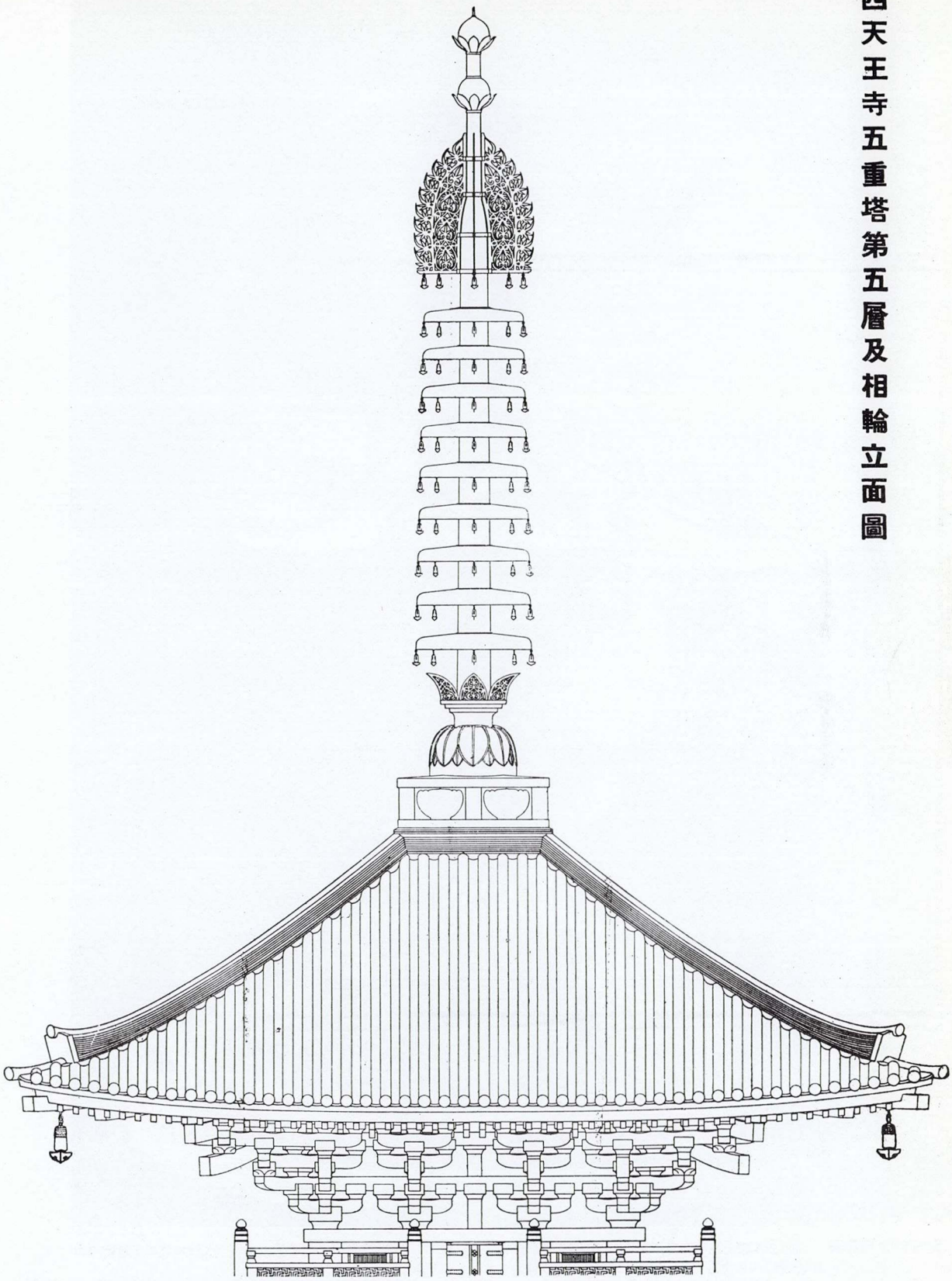


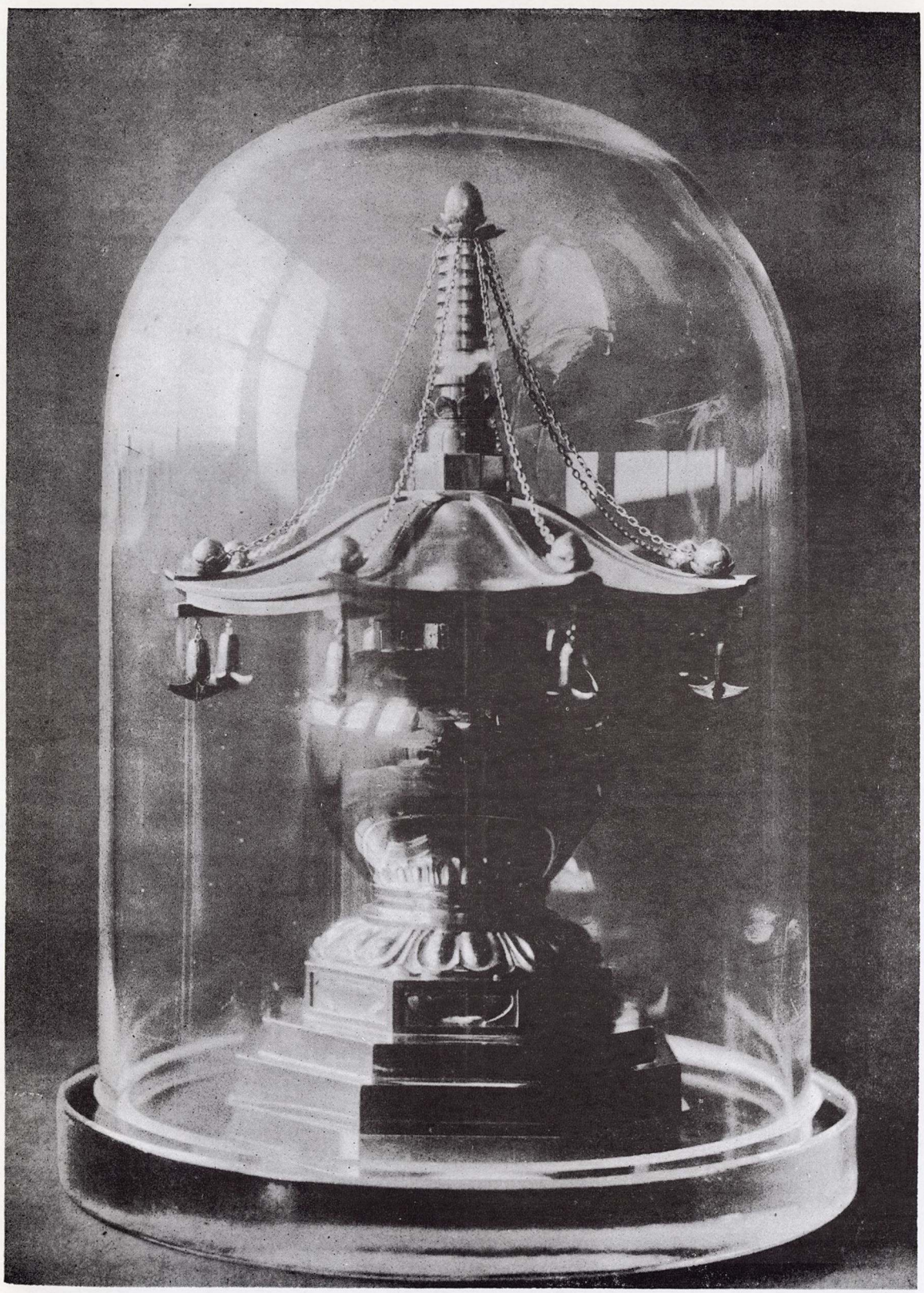
初層平面圖



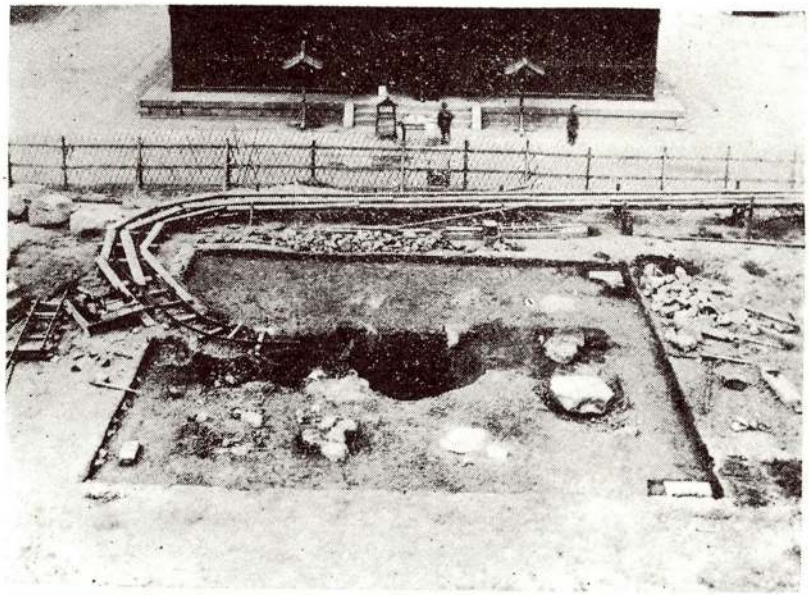
四天王寺五重塔基壇ヨリ第三層ニ至ル立面圖

四天王寺五重塔第五層及相輪立面圖

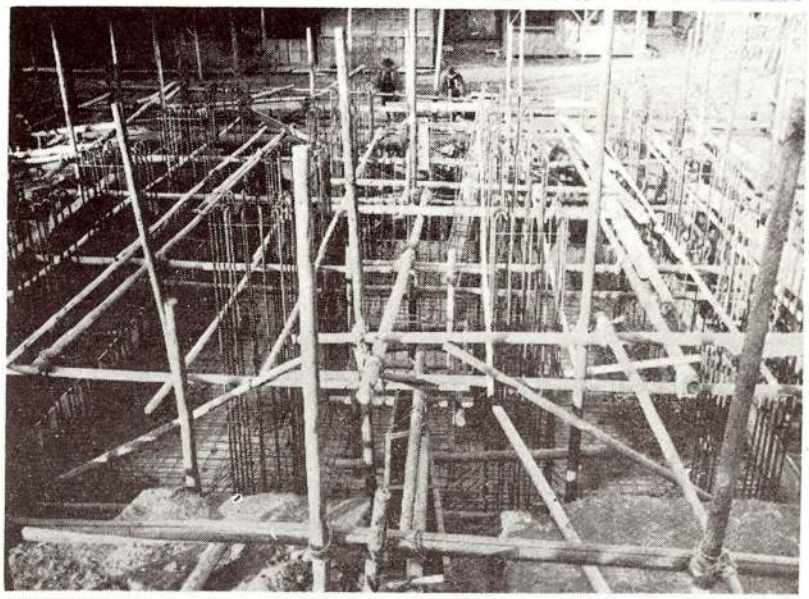




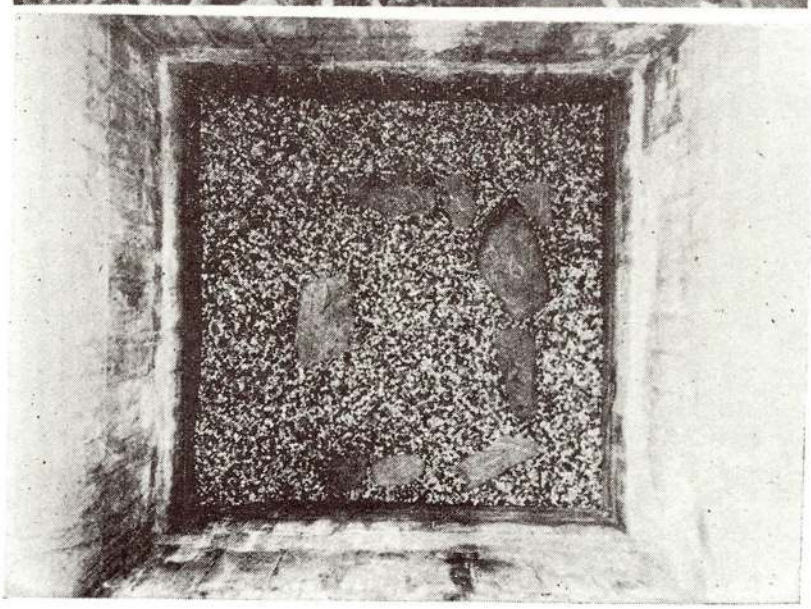
寶瓶型舍利容器　塔婆の本體である佛舍利を納入した容器の全形である。本文にも述べた如く．この設計に當つては塔婆の本建築にふさはしく．且つ一層崇高嚴肅なものたらしめる可く十二分の努力が傾注されたものである。



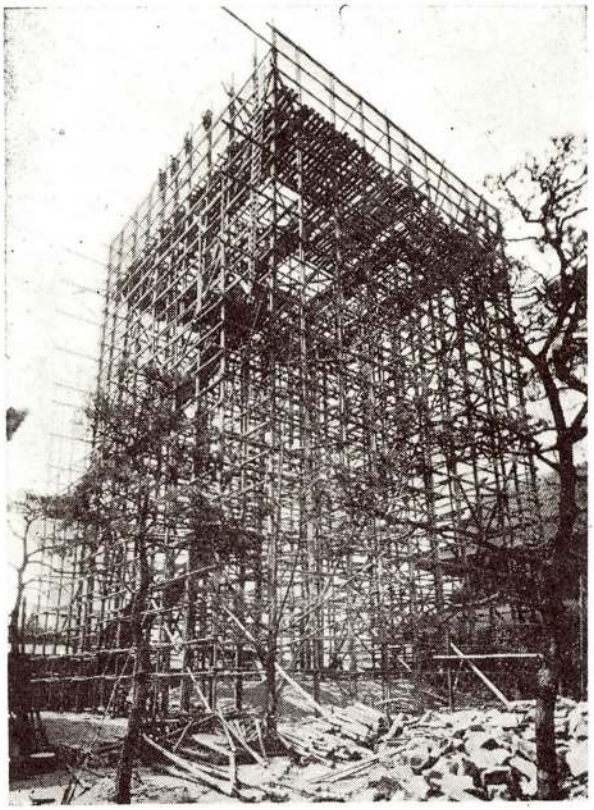
第1圖　中門上層勾欄上からの俯瞰寫眞で、昭和12年10月25日の狀態である。元の基壇の盛土並びに舊礎石を除去してから、引續き昭和12年9月28日から塔址約40尺平方の地面を畫して根切りの掘方にかかつた。掘りかけて間もなく東南隅に近く東西に長い松香石の出土があつたのを切つかけに、礎石下の根石や角石等が續々掘出され、10月4日から7日にかけて深さ凡そ1尺平均に掘方の進んだ時、數多根石の全貌も略ぼ明らかになつた。



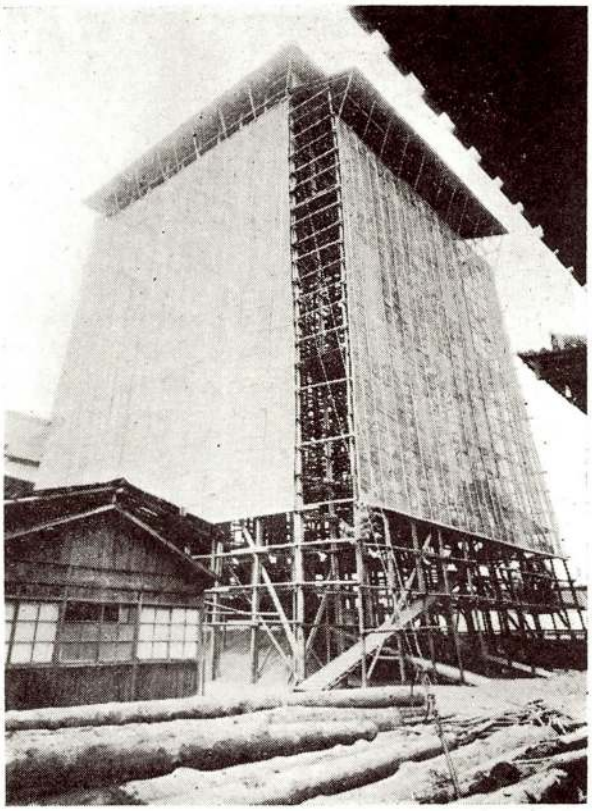
第2圖　基礎巖石地形の上へ捨てコンクリートを打ち床版及び各柱下の支柱の鐵筋を組終つた時の寫眞である。中央パネルに圍まれた中に白く見えてゐるのが舊檫礎で、これの周圍6尺角は壁で圍み保護をする事にした。圖は昭和12年12月20日の狀態である。



第3圖　舊檫礎とその上の遺構保存の爲に作られた鐵筋コンクリート造1室を上から見た寫眞である。中央に散在する9つの石は舊檫礎上に元通りにそのまゝ並べられもので、その周圍を埋めてゐるのは、今回新に作られた般若心理の1字1石である。これは5色の小石で1つの石に1字づつ經文が淨書されてゐる。昭和13年4月22日寫す。



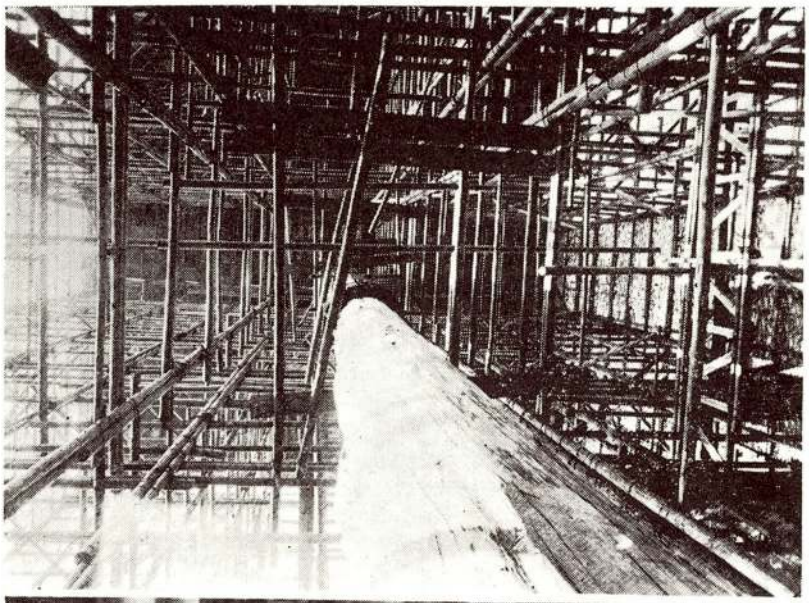
第4圖　昭和13年4月8日には未だ足場は出來上らずこんな有樣であつた。然るに昭和15年4月13日には、初重連子を取つけず4方の扉を吊込まないだけで、新塔は全貌を現はしたのである。（5月29日・天沼）。



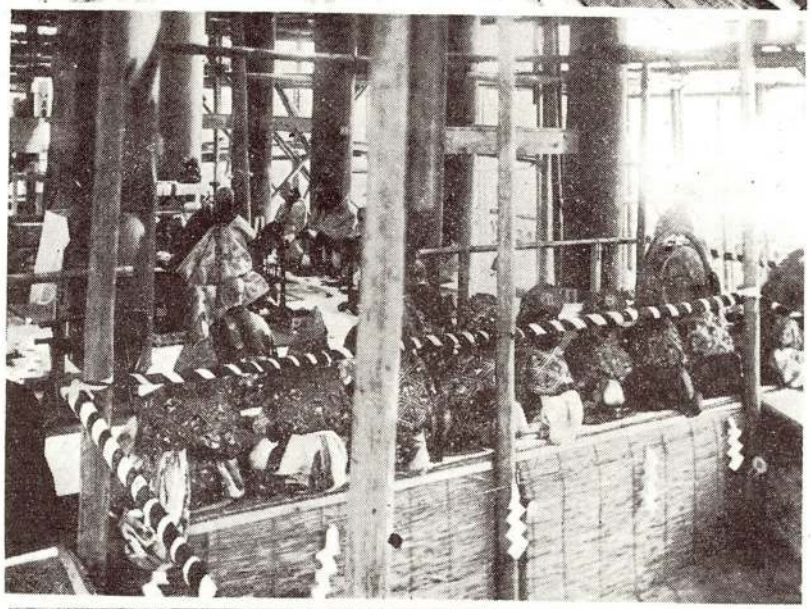
第5圖　伽藍內西南隅から素屋根を望んだ寫眞である。これで軒高約100尺餘り、簀の張り初めの邊りは大體初層の組物が取つく邊の高さで、この少し上に軒下に當る棚足場が作られて居るのである。この寫眞は昭和13年5月22日立柱式終了後夕方撮影したものである。塔が中門と金堂との中間に建立されてゐる事や、事務所が塔の西側にある關係等現場の狀況を了解するに便であらう。右上の三角は廻廊同、中央の小三角は中門の屋根の一部である。



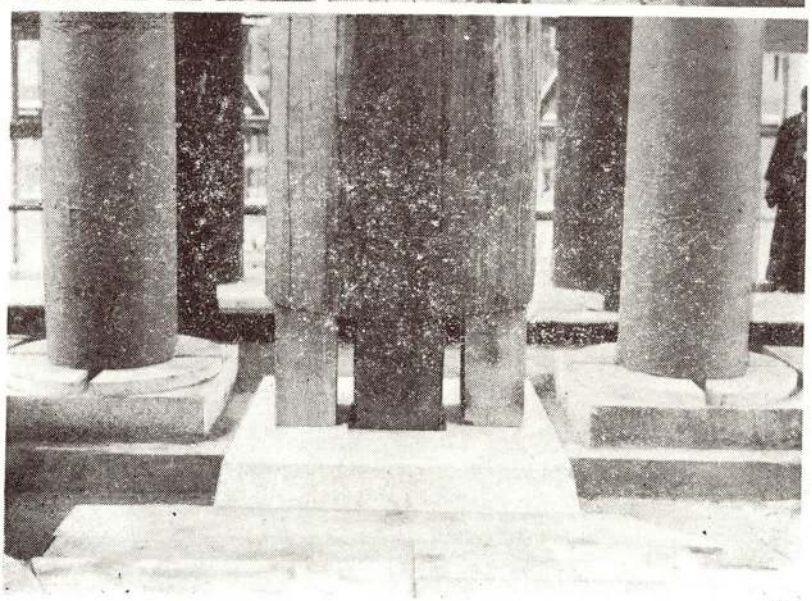
第6圖　5重塔素屋根を西大門の勾欄上より望んだ全景寫眞で左に金堂、右に中門が聳え、手前に廻廊より1段高く西重門があり、左下隅には經藏の屋根、右下には納經所の屋根が見えて居る。この寫眞は立柱式以來滿1ケ年たつた時の狀況——外觀は大して變化はないが——を後世に殘すために撮したものである。昭和14年5月22日寫す。



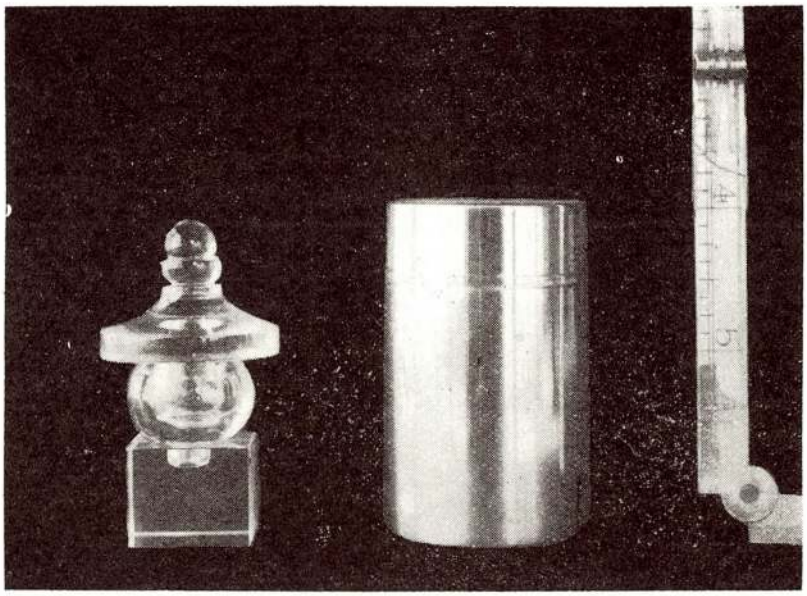
第7圖　第1、第2、第3柱と3本を2ヶ所で繋ぎ總長137尺の樑が出來上つた處を下から見上げた寫眞で、ここに見えて居るのは殆どその第1柱のみで、上の方に黒く見える細長い木で柱を卷いてあるのは、第1柱と第2柱との繼目の補强材である。右の方には1部實の張られた處も見られるし又この寫眞で多くの丸太が交錯した錣屋根の構造もほゞ了解出來るであらう。昭和13年5月12日寫す。



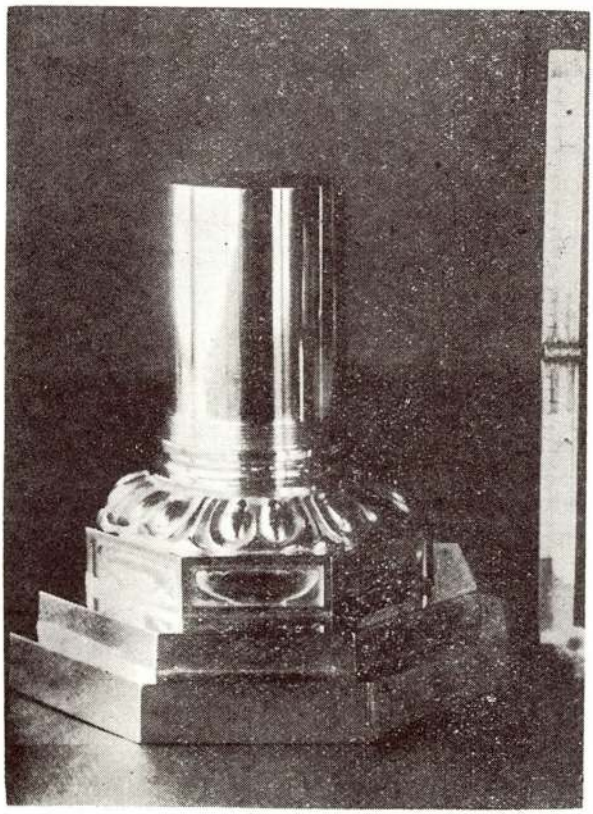
第8圖　昭和13年5月22日立柱式が擧行された。寫眞は5重塔基壇上に於て修行された莊嚴な法會の有樣である。



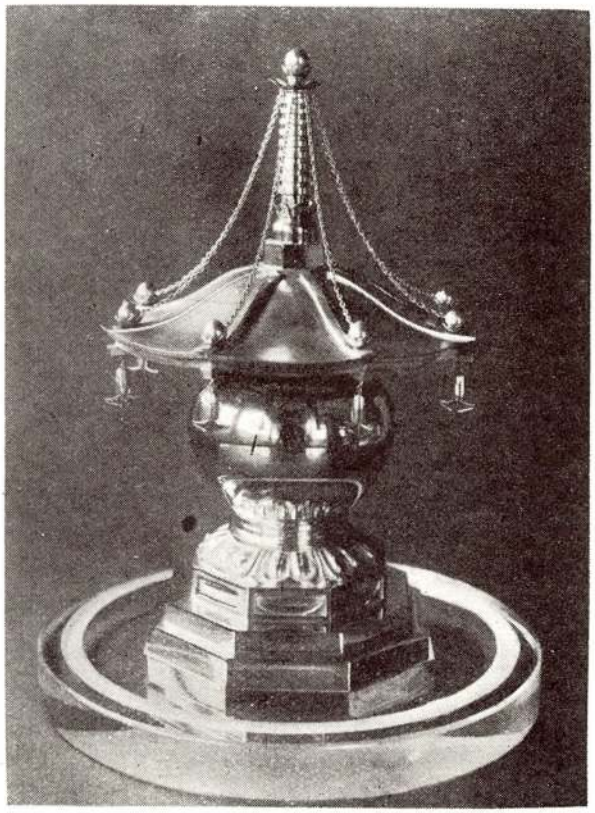
第9圖　5月22日午後2時舍利を樑礎中へ納め、無事案の移動を終え、かひ物をして假据えを了した處の寫眞で、舍利納入後1時間の事である。中央の太い樑の下に3本の角束が見えて居るが、左右の2本はかひ物で眞中の稍太いのが樑より作り出してある枘である。塔が落成すると、この左右の束が取り去られた狀態で樑が吊られる。



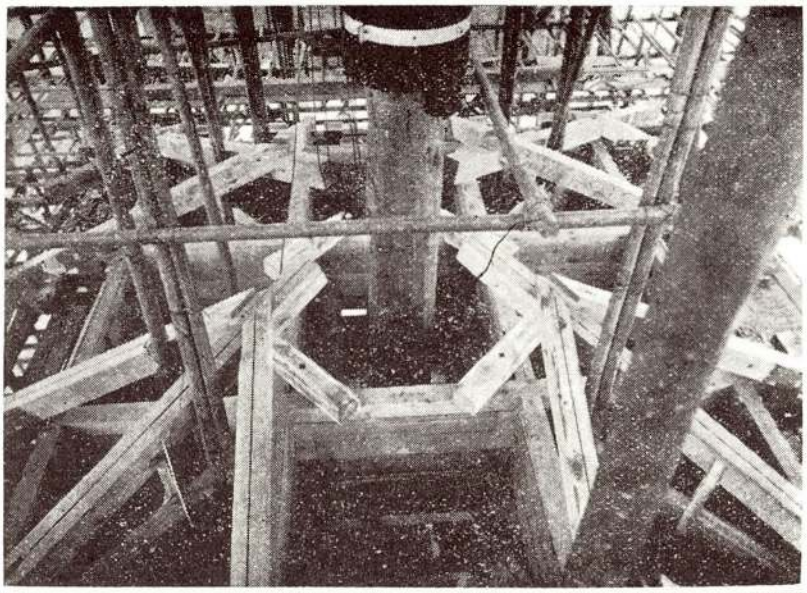
第10圖　舍利を納入す可き容器で向つて左は水晶製5輪塔型容器、右は純銀製圓筒容器である。前者がそのまゝ後者の中に納まる關係から、5輪塔の笠即ち火輪を圓く（平面圖にて）作つたので、圓筒容器は圖に見る如く印籠蓋になつて居り、5輪塔の方は、笠から上（火・風・空の3輪）と、軸部（水輪）と、基礎（地輪）との3箇に別れ、各々を納差しにして組立てる樣にしてある。舍利はこの水輪の中に納めるので、中を圓く繰つてある。昭和13年4月21日寫す。



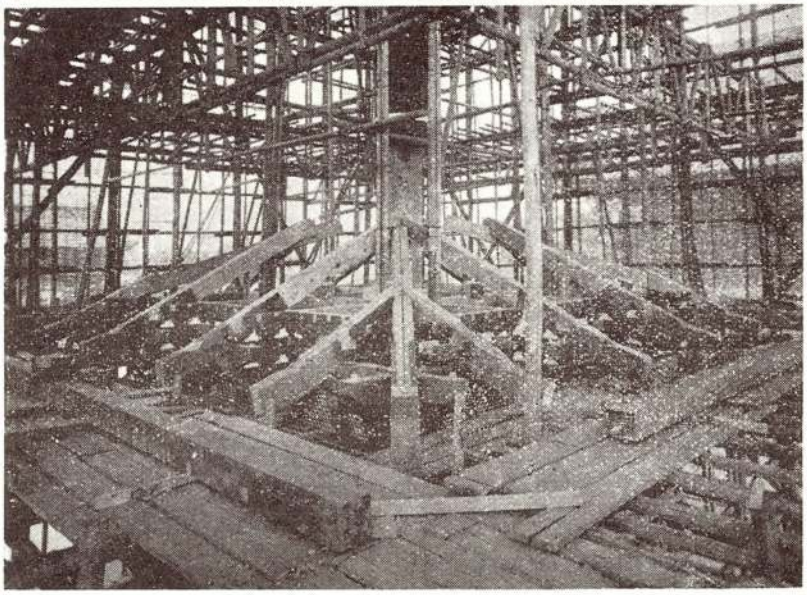
第11圖　寶瓶型舍利容器の下半部で、前圖の純銀製容器がこの筒の中に入る樣になつてゐる。この容器は8角の2重基壇の上に、上面複瓣裝飾をもつた基礎がのる樣になつて居る。基礎の側面に1區劃1つづつ格狹間を彫つてある。圓筒下部の螺旋は、次の圖に見る樣に寶瓶型容器の上半部が上から捻ぢ込みになつてしつかり固定するためのものである。昭和13年4月21日寫す。



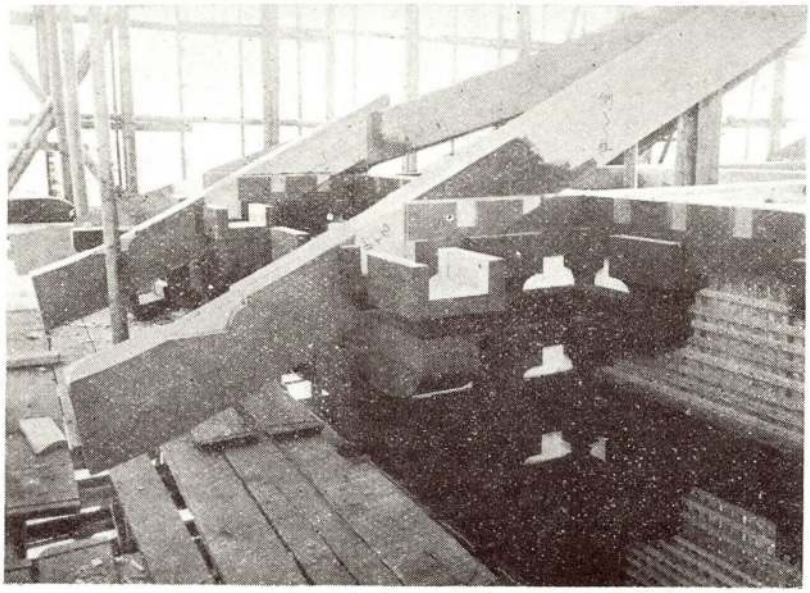
第12圖　寶瓶型容器の全景寫眞である。これが舍利容器の本體で、水晶製や、純銀製のものは、云はゞこの附屬容器に當るものである。隨つてこの容器には、最も意を用ひその總高約9寸、純金60匁を用ひ、眞に金色燦然たるものたらしめ、その莊嚴に努めたのである。笠の8隅上には蓮座付寶珠を載せ、これと9輪上の蓮瓣との間を金鎖を以て繋いだ事圖に見る通りである。硝子の盤の周圍に白く圓い輪が見えて居るのは、上から鐘形の硝子蓋を被せた際のはめ込み用の溝彫である。昭和13年4月28日寫す。



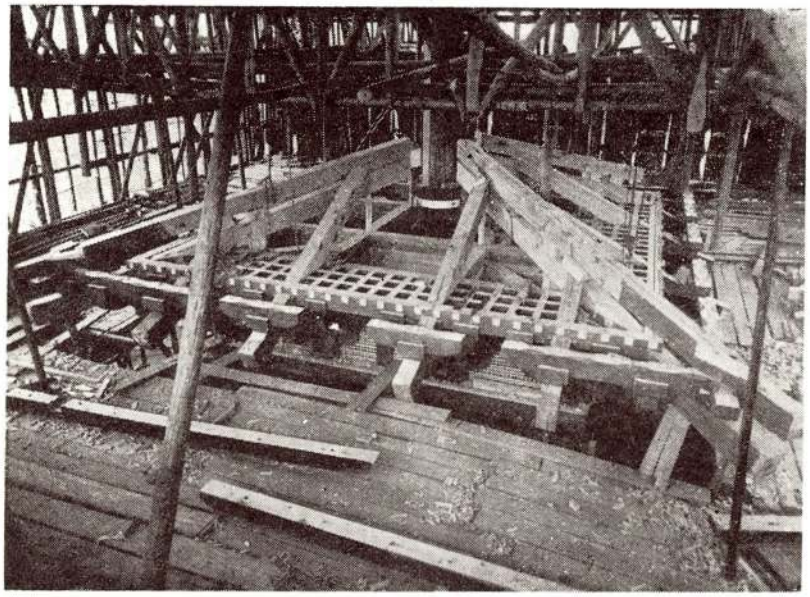
第13圖　第4重目の構架式を上から見た所柱上の組物を構成する肘木を重ねて井桁に組んだ上に、隅及び平尾垂が仕掛けてある所がよく判る。隅行のは「隅尾垂」で、4方の隅尾垂と45°に出遇ひ、井桁に組んだ肘木の上に出てゐるのが4方柱上の尾垂である。圖の中央の上方に心柱の上の繼手の一部が見える。昭和13年6月22日寫眞（5月29日・天沼）



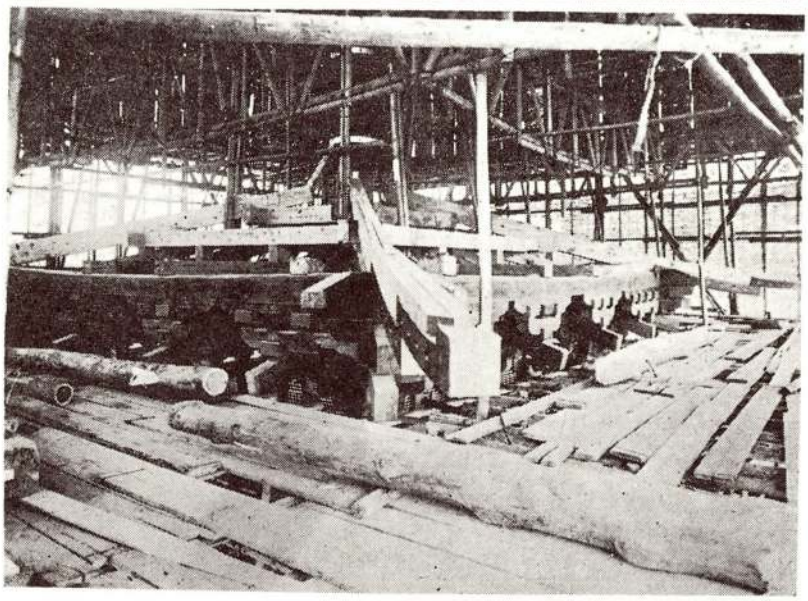
第14圖　初層第4肘木と軒天井の取付く通肘木とを組合せた上に、更に尾垂を取付けた狀況を示す。尾垂の末端に近く切缺きのある處にもう1つの枓が載つて、その上に秤肘木が組まれ所謂る3手先目が出來上るのである。尙この尾垂の側面と先に述べ通肘木との間に細かく軒天井が取付て來る事や、吉輪が柱の內外兩側より取付いて、その間を千切りで固めてある有樣等もこの圖で了解されやう。昭和13年6月22日寫す。



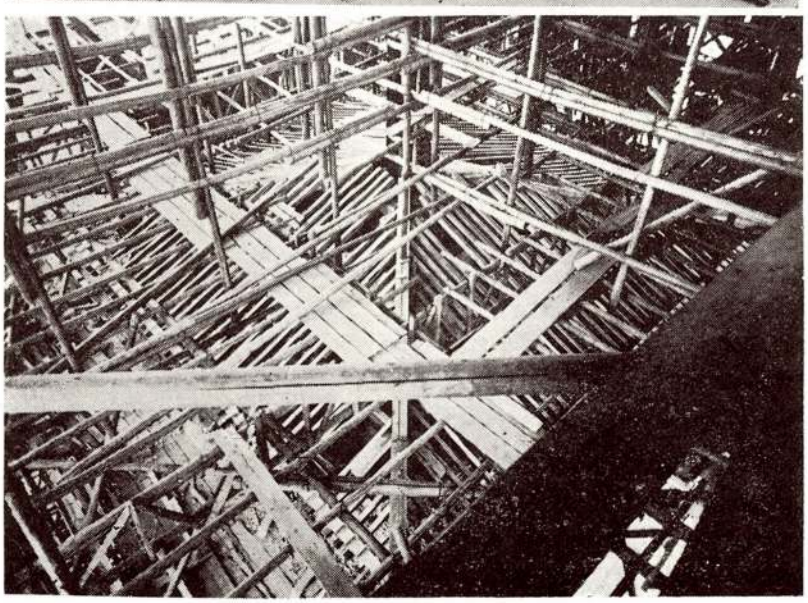
第15圖　初重軒斗栱をよく見せた寫眞で、これでみると2手先目の秤肘木の上に尾垂を仕掛け、此上にのるべき3手先目の秤肘木受の枓のきりかきを尾垂につけてある。比較的大きな寫眞だから尾垂の「反り」と「增し」と鼻の切り樣、枓や肘木の形、補强のため刷毛板を一木から削つてあるところ、及び斗栱間の壁下地等、何れもこれで充分了解し得る筈である。昭和13年6月22日寫す。



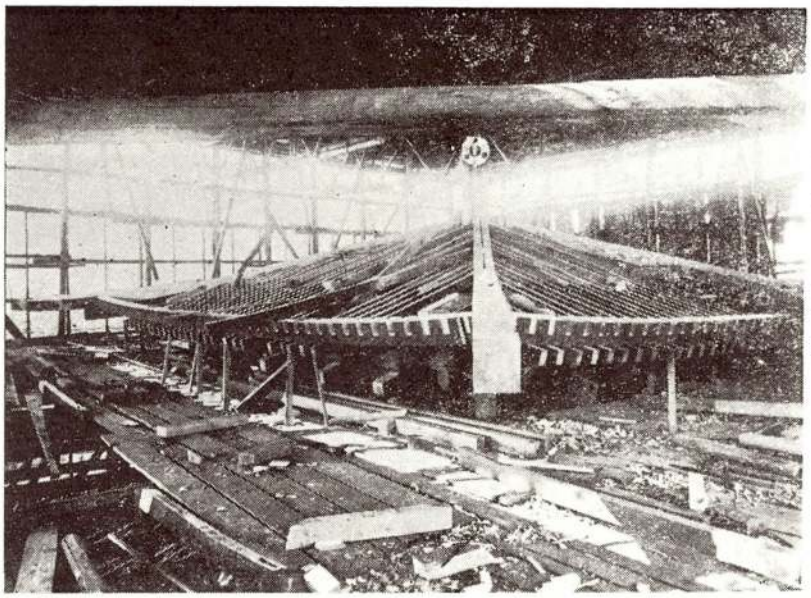
第16圖　第4重軒構架式の1部で南方よりみたもの。隅行には2重目の尾垂が仕掛けてある。軒天井が取附られ2手先目の通肘木に軒枝輪の切り缺きがはつきりつけてある所や3手先目の秤肘木が尾垂上の枓に含ませてある所が至極明らかである。これを見れば日本建築に於ける少なくとも完備した3手先の構造が了解できる筈である。肘木の「笹繰」もはつきりしてゐる。昭和14年6月22日寫す（5月29日・天沼）。



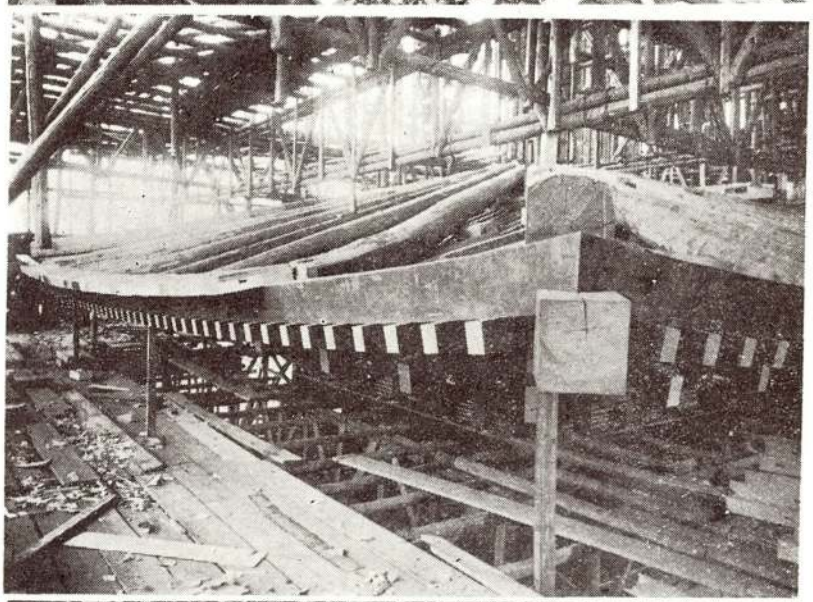
第17圖　第4重東南隅よりの寫眞。前方に突き出してゐるのは化粧隅木で、下側は地隅木、上側は飛簷隅木。前者の左と左下とに隅尾垂が見えてゐる。其左右には尾垂上に3手先目の枓栱をのせてあるところがよく見えてゐる。圖の中央より少し左の上の方に心柱の繼手が現はれてゐる。昭和13年7月22日の寫眞（5月29日・天沼）。



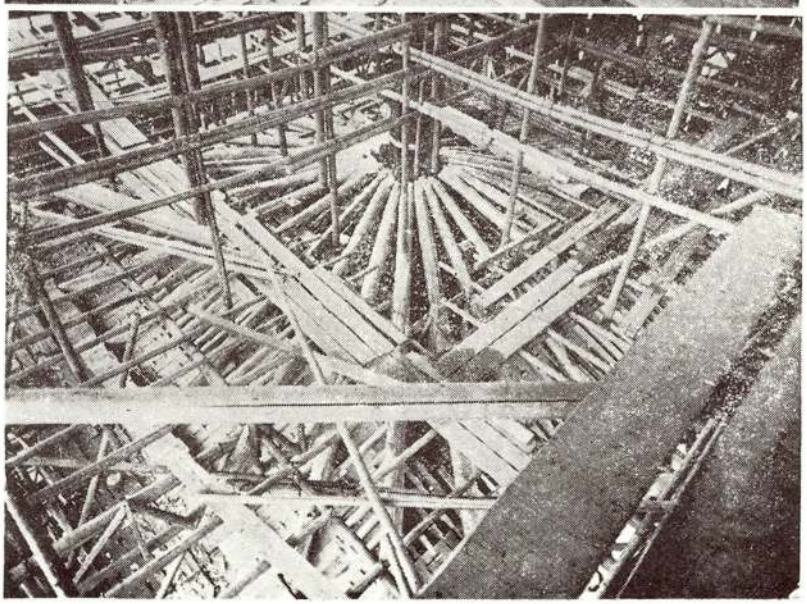
第18圖　第3層地垂の取付を大半終つた狀態の全景を東南隅足場上より俯瞰した寫眞で、4方に向つて細かく並んで居るのが地垂である。圖の中央邊上下に眞直ぐ通つて居るのは申す迄もなく東南隅の隅木である。昭和14年3月22日寫す。



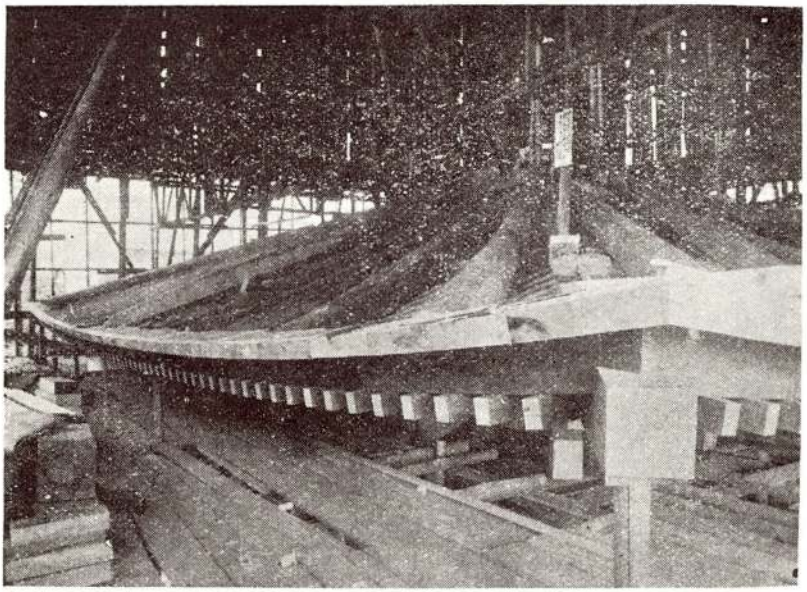
第19圖　第5重を東南隅からみた昭和14年10月22日の寫眞。前方に突出してゐるのは東南隅飛簷隅木。其左右の齒棒の様なものは「木負」。其下に並んでゐるのが「地棰」で、「飛簷」は圖でみる様に木負の切り缺きの所に嵌込むのである。（5月29日・天沼）。



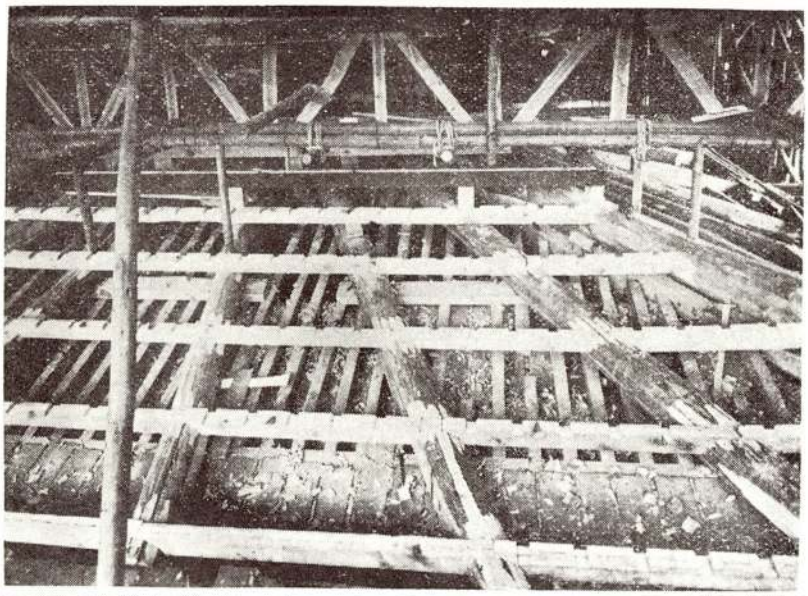
第20圖　昭和14年4月22日にとつた第4重東南隅の寫眞で、飛椽簷の上に「茅負」がのり、南側の「切裏甲」が大部分取付けられたところを見せたもの、この裏甲の上に「瓦座」がのり其上に瓦を葺くのである。飛簷棰の上に放射形に配置された丸太の様なものは「桔木」（5月29日・天沼）。



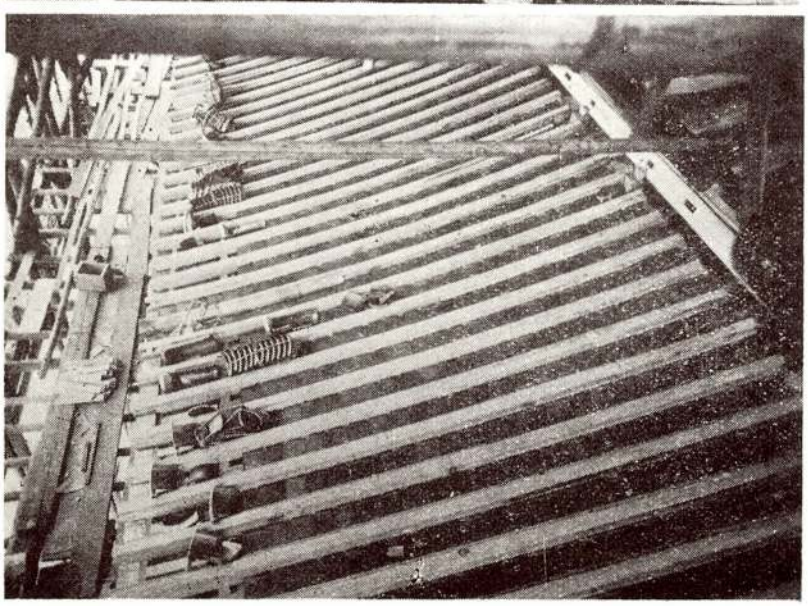
第21圖　第20圖を高所より見下ろした寫眞で、桔木なる材料が中心より4方に事實放射形に配置されてゐるところがよく判る。南側切裏甲も飛簷棰の裏板も皆一目瞭然である。昭和14年4月22日寫（5月29日・天沼）。



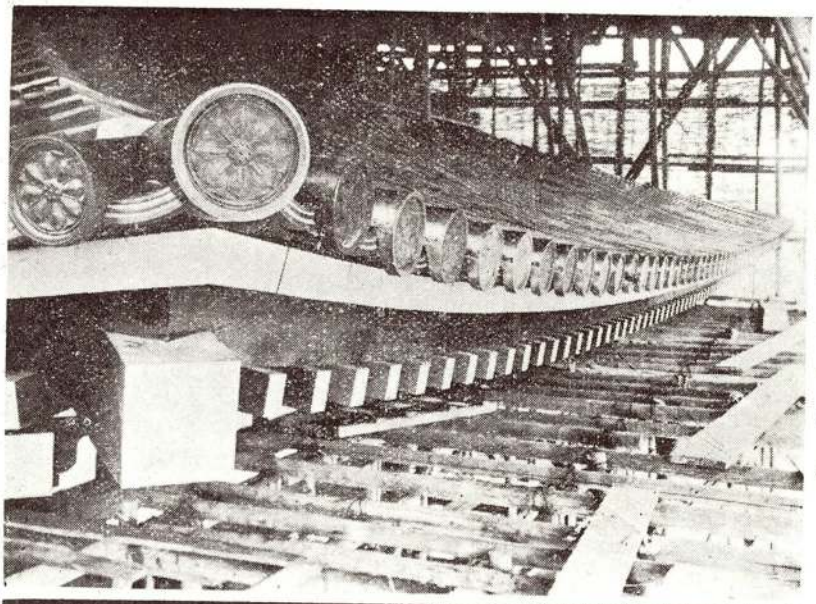
第22圖　昭和14年8月22日に於ける第4重を東南隅より見たる狀況。右手の大きな方形は飛簷隅木の臬、其左下小さい長方形は隅尾棰。大方形の左右に並んでゐるのは飛簷棰、其上は茅負と裏甲。其上に放射形に配置せられたる太い木材は桔木（5月27日・天沼）。



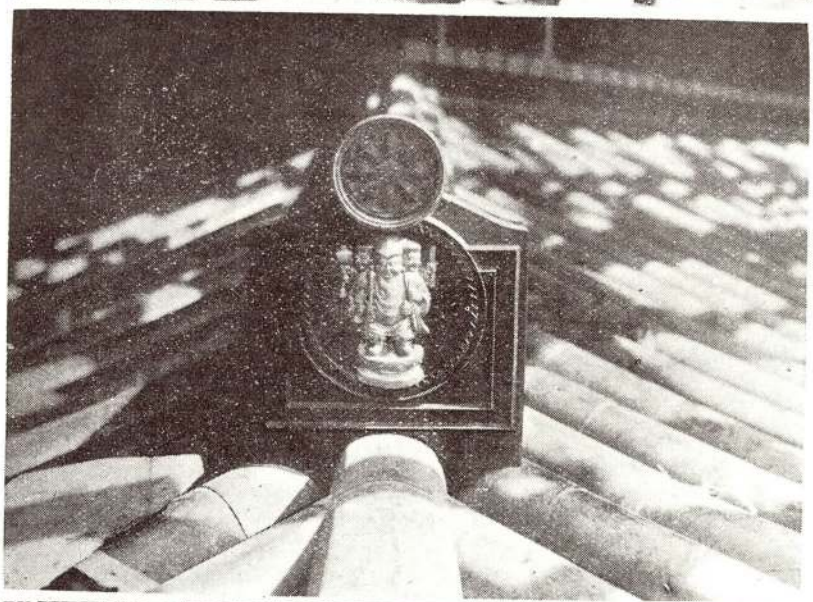
第23圖　第2重屋根南側の一部で飛簷棰裏板をはつた上に桔木が配置され——桔木は茅負をはね上げ、軒下の垂下を防ぐ用をなすものである——其上に略ぼ等間隔に桔木に野棰受をかき込んである所を見せたもの。昭和13年12月22日の寫眞(5月29日・天沼）。



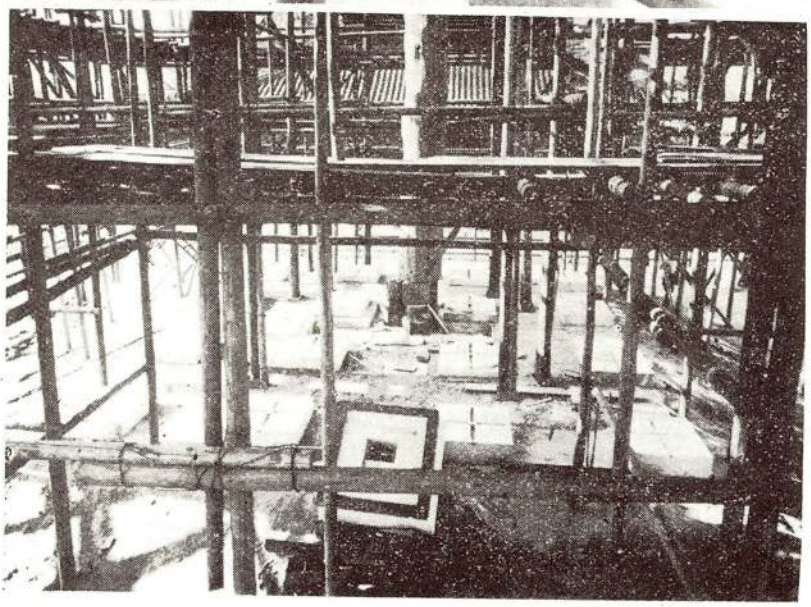
第24圖　第4重目西側屋根で、少しく下方に彎曲せる白色のものは圓瓦を以て覆ふべき部分、即ち圓瓦の下地で、其間は平瓦を殆んど全部葺いて了ひ只僅に軒口に近い部分だけが未だ葺き足らずにある。平瓦を12枚づゝ結へたのが屋上においてある。昭和13年8月22日の現狀。5月27日・天沼）。



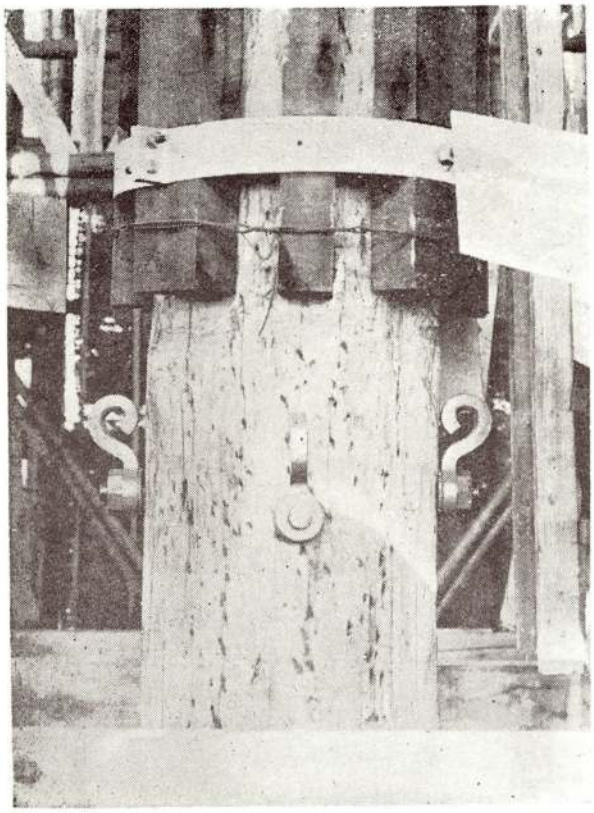
第25圖　昭和14年8月22日には、第4重も既に降り棟を除く他は全部葺き上り、此圖の如き有樣を呈するに至つた。此を第23圖と比較すると軒口の狀況がよく判ると思ふ。即ち裏甲の上に瓦座があり、其瓦座に軒先の文樣のついてゐる瓦が乘つてゐるのである。隅の蓮は正面を向いてゐるので、特に此圖の如く大きく見えるのである（5月27日・天沼）。



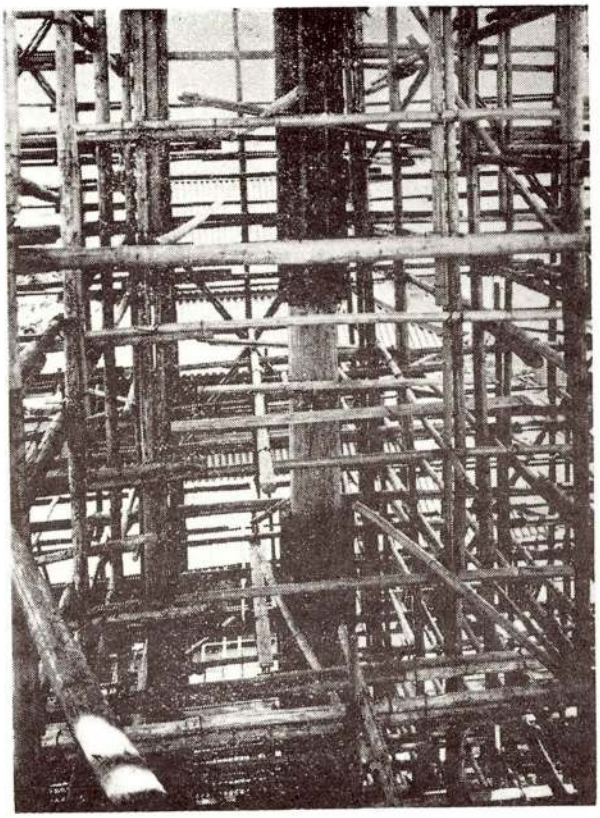
第26圖　倒潰以前の塔婆初重西北隅鬼瓦には、鬼面の代りに三面大黑像がつけてあつたさうで、再建の塔婆も亦、寺院側に同樣の意匠の瓦を用ゆる希望があつたので、ただ「三面大黑像」といふだけの條件で、故明珍恒男氏に製作を依頼した。同君は快諾して直に中西弘藏君に命じ、中西君の原案に明珍君が修正を加へ出來上つたのがこれである。中西君は製作に15日を費し、明珍君は其修正に3日かかつたさうである。（5月25日・天沼）。



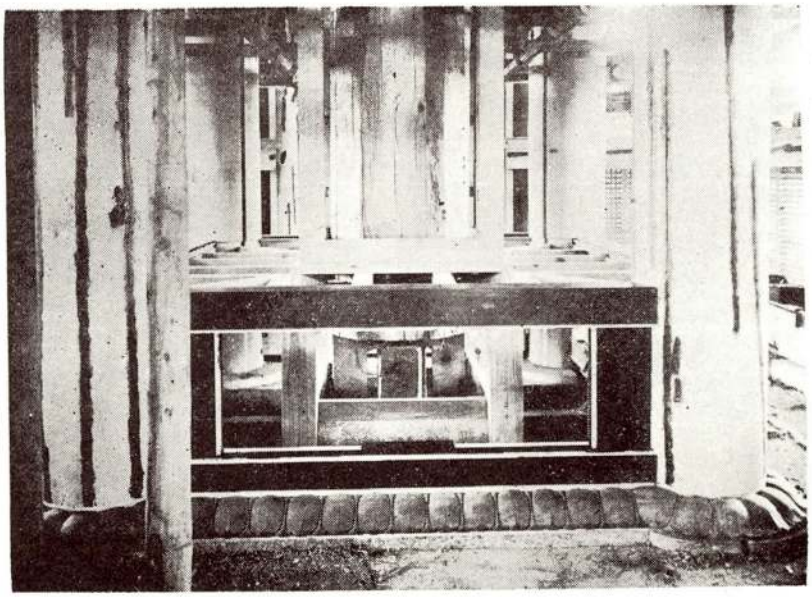
第27圖　今からざつと二年前なる昭和13年5月12日には、此圖でみる樣に塔はまるで着手されてゐなかつたと見える位で、礎石は据えられたが、圖の中央下に近く中央に方形の穴——更に其中に舍利納入の圓形の穴——をあけた心柱の礎石をころがしてある狀況で、心柱のみが中心より少しく北方に臨時にたててあつたのである。背景の建築は金堂（5月29日・天沼）。



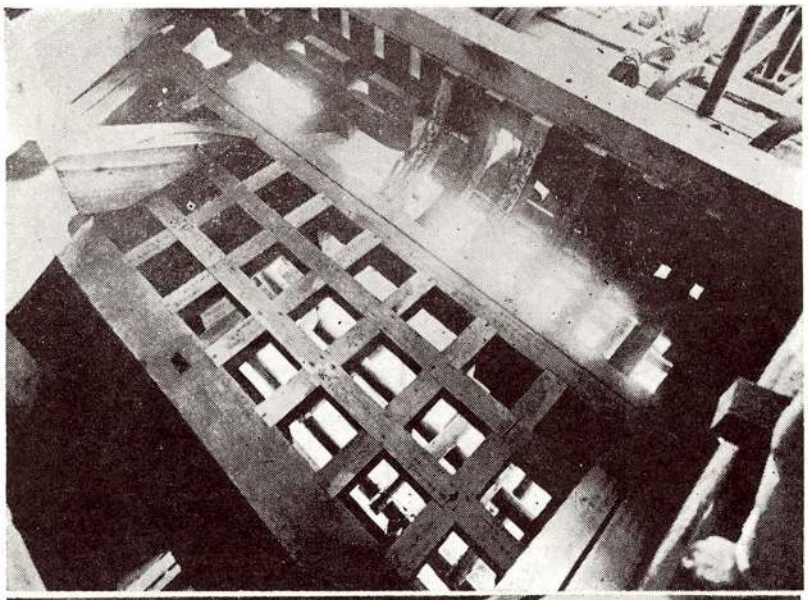
第28圖　第2柱と第3柱との繼手（第3層上）の吊金具の取付く邊を大きく撮した寫眞で、4方より吊る爲金具は樑の周圍4ヶ所にあるのである。直徑1.2寸の太い鐵棒を突通してそれに捲込みとしたのでこの金具が外れる心配は先づないと云つてよい。尙樑はもう1ヶ所5層目の屋根裏より補助的に吊るので、その鎖を受ける金具が4個丁度もう2層上のこの邊りに取付く事になつてゐる。昭和14年1月22日寫す。



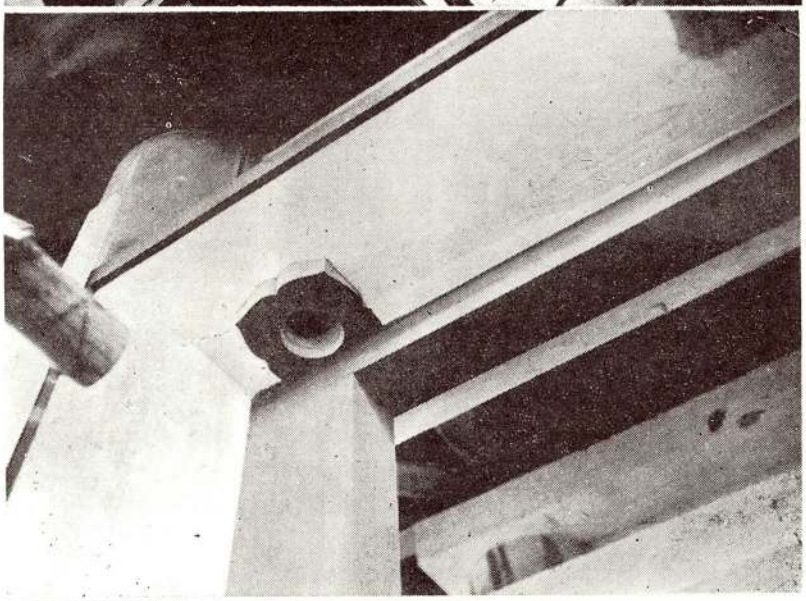
第29圖　昭和13年5月22日に於ける中心柱の有樣を示す圖で上下に木材を以て取卷いた部分は繼手の補强材を示したもの。中心柱は3本繼ぎで、中央のは長さ30尺である。中心柱は主として第4重、補助として第5重の2個所より鎖を以て懸垂したのである。(5月27日・天沼)。



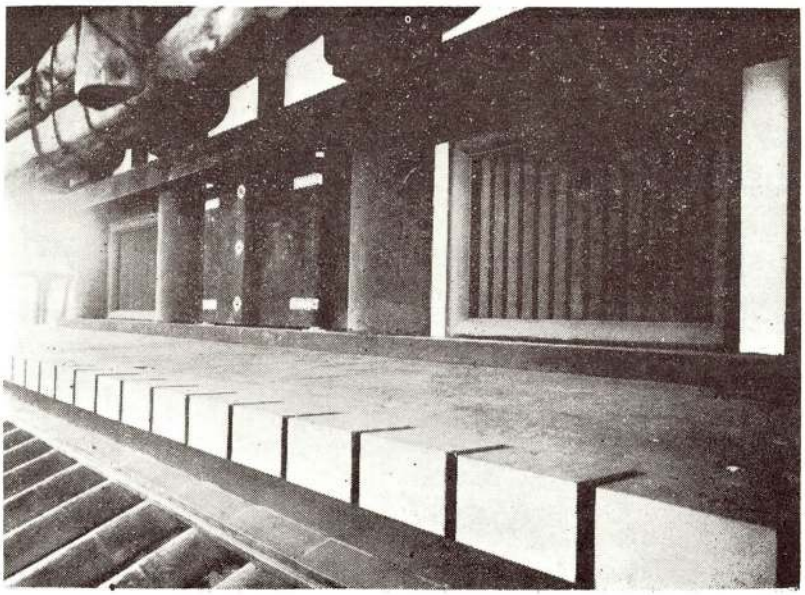
第30圖　四天柱及び須彌壇下に蓮花瓣をつけた所で、此は檜材を以て刻み出したもので未だ綠青が塗つてないから杢目が見えてゐる。左右は四天柱、其間の黑色をした水平垂直材は須彌壇框。中央の太い押角材は心柱（下部の枘と左右かひものの木片が見えてゐる）。其左右と須彌壇根太上を水平に巡れる削立た細長い木材は四佛板の額緣である。（5月25日・天沼）。



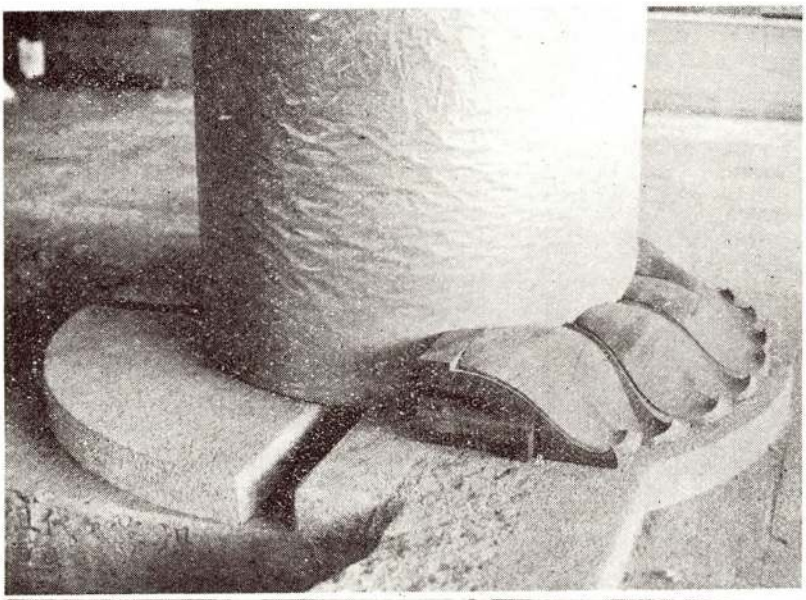
第31圖　軒天井と枝輪の關係を示す寫眞で軒天井が如何にして組まれ又枝輪がそれとどういふ連絡を保つて居るかがこの圖でよくわかる。圖の左上には隅尾垂と平尾垂の取付部分も出てゐるから、尾垂とこれ等の關係も明瞭であらう。軒天井裏板並びに枝輪垂が取付られると、外部とが全く遮斷され、美しい化粧の部分のみ下から仰がれる事になるのである。昭和13年7月22日寫す。



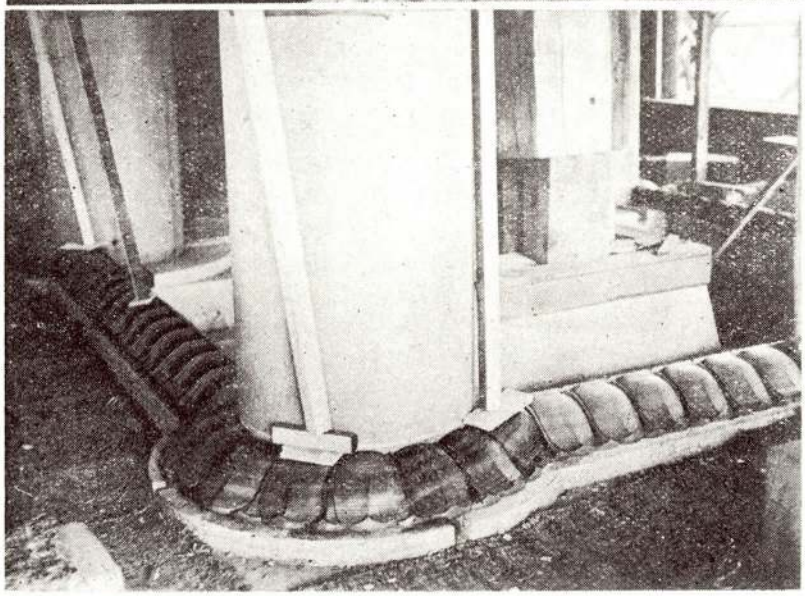
第32圖　初層中央出入口上部を外から見上げた寫眞である。上方より左へ折れて大きく白く見えて居るのは幣軸の上部と側面とで、云はゞ出入口を圍む額縁の樣なものであり、白い部分は曲面をなして居るのである。此面の1部に黒く4瓣花の突起が見えるが、これは藥座で扉の軸摺の金具を取付ける爲であり、幣軸より共木で刻み出したものである。こうした形のものは遺物としては中尊寺金色堂に見られるのであるが、場所柄誠に好都合なので應用してみたのである。昭和14年4月22日寫す。



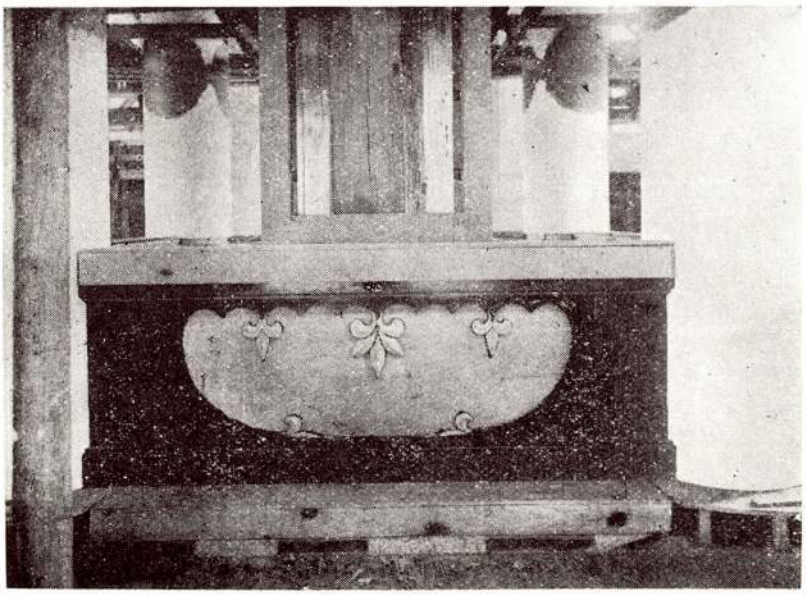
第33圖　第2重南側軸部の寫眞。中の間は板扉、左右の間は連子窓。椽は下からみると切椽の如くであるが、實は此圖に見る如く長い横木に切り缺きをつけて恰も完全なるものの如くに見せてある。夫から内方は明け放してある場合が多いが、鳩の害を防ぐため板をはつた。椽先には未だ勾欄がついてゐないが、これで勾欄をつけると斯樣な不體裁は全部隱されて了ふのである。(5月25日・天沼)。



第34圖　四天柱の脚元を側面より見た圖で須彌壇下に取付く蓮瓣と四天柱の分との接續部分がよくわかる。蓮瓣と下の石との緊結方法は仕事の上でいろいろ困難があるので、結局漆を以て密着せしむる事にしたのである。礎石の上端から蓮花瓣を刻みだすか、木で作つて側面からつけておくのは、實は自然ではないのであるが、そこは飛鳥・奈良時代にあつてこそさう言へるが、須彌壇を木で造つてある以上、これで少しも差支へはないのである。昭和14年1月22日寫す。



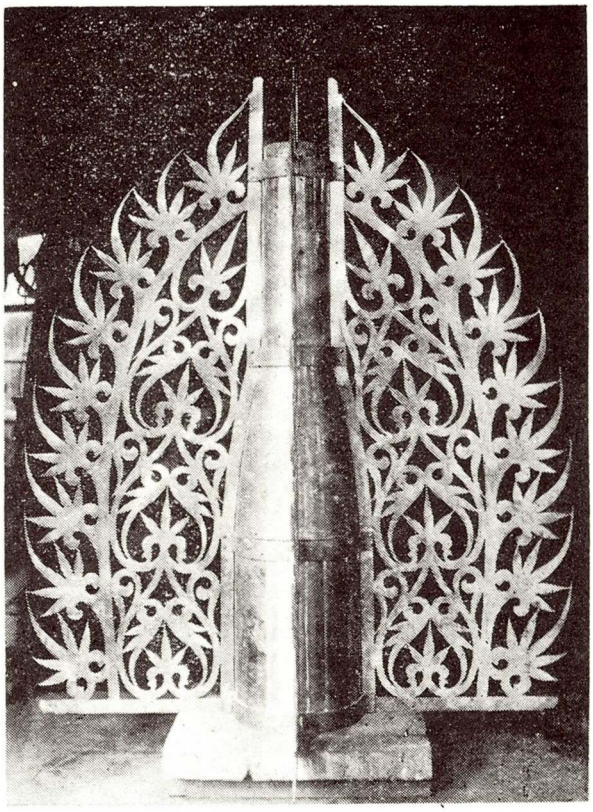
第35圖　須彌壇下の蓮座即ち蓮瓣彫刻を全部取付終つた處を四天柱の外側鴨より見た寫眞である。その接着に漆を用ひた事は上述の通りで、その膠着を期する爲仮りに周圍上部より抑への棒をかつてある現狀がわかる。柱下の部分は蓮瓣が放射狀に出るのに反し、須彌壇框下のものは眞直ぐ横に並ぶのでその形が同じでなく、特に兩者の境をなす1瓣は特殊な形のものとなつたがこれは自然の結果で全部取付いて終ふとこの樣な所はまるで目立たないのである。昭和14年3月22日寫す。



第36圖　此須彌壇は敢て古式の復活ではなく、一至極任意に決定したものである。上下框及び鴨東は平安鎌倉の頃式とし、羽目板には上端が連續擺線の如き曲線をなせる格狹間を刻し、上端の莢の3個所より下向きに忍冬文樣を下げたのであるが、中央は5葉左右は3葉とした。これは橘夫人厨子藥師化佛の天蓋に暗示を得たのである。壇は黑、面は朱漆、忍冬は綠青塗、格狹間内は金箔置仕上げとした（5月25日・天沼）。



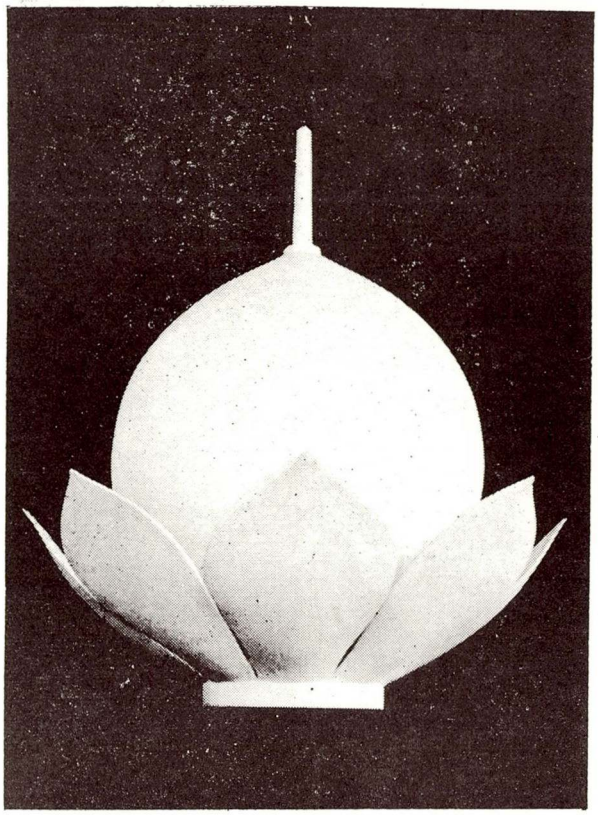
第37圖　五重塔に限らず、塔婆として缺くべからざるものは相輪である事はいふ迄もないが、その相輪の意匠で最も苦心を要する部分は水煙である。こゝに出したのは水煙の女型であつて、横に置いてあるのを便宜見易い様に縦にしたのである。相輪の全高約40尺のうち、水煙は高7尺、櫞の4方に4枚、十文字に取付く事になるのである。圖の女型左方輪廓に↓型又は1文字につけてある小溝は鑄造の湯口である。昭和14年1月23日寫す。



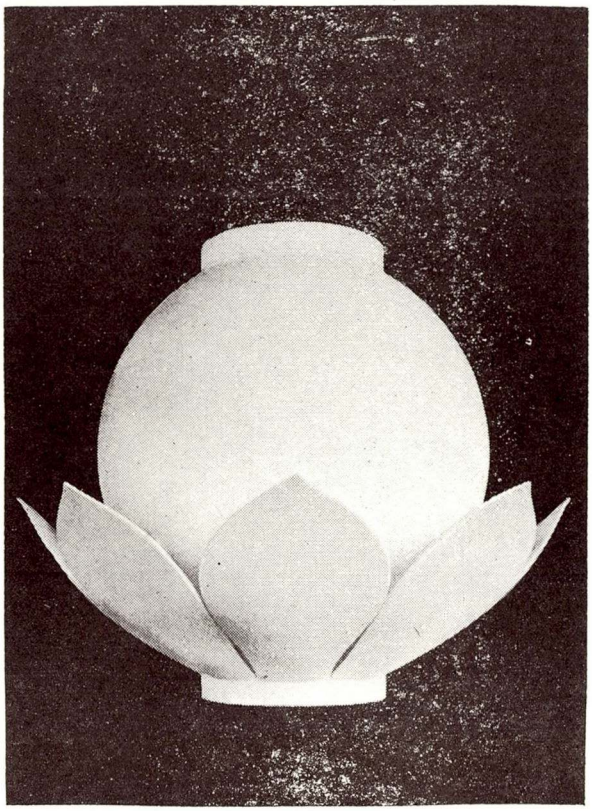
第38圖　此は水煙の殆んど立面寫眞である。材料を飛鳥時代に採り、總て忍冬文様を以て造りあげたもの。法隆寺金堂内天蓋伎樂天人の背光、本尊釋迦如來脇侍藥王藥上菩薩寶冠等から材料をとつたのである。現存の古代水煙は、殆んど總てが蓮華を意匠したもののみだから、此機會に忍冬水煙を計畫してみたのである。高さ約7尺幅約2.5尺（5月25日・天沼）。



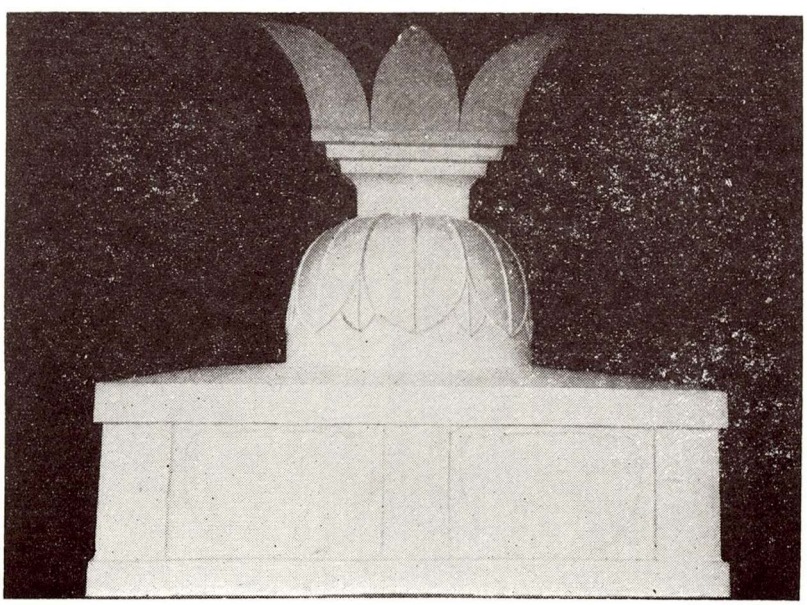
第39圖　露盤1邊7.6尺高2.45尺、4方上下框の間を束を以て2區に分ち、1區劃内に1個づつの格狹間を刻んだ圖の如き極めて平凡なもの。これは拙作中の拙作で、洵に慚愧に耐えない。須彌壇側面へつけたものをくり返すか、玉蟲厨子臺座の脚の繰型の様なものをつけるか、或は又慶州石窟庵半肉彫立像の臺座式のものにするか、いくらでも好例があるのに、夫等に氣がつかずして、斯様な、ものにしておいたのは、如何なる冷評でも甘受する覺悟である（5月25日・天沼）。



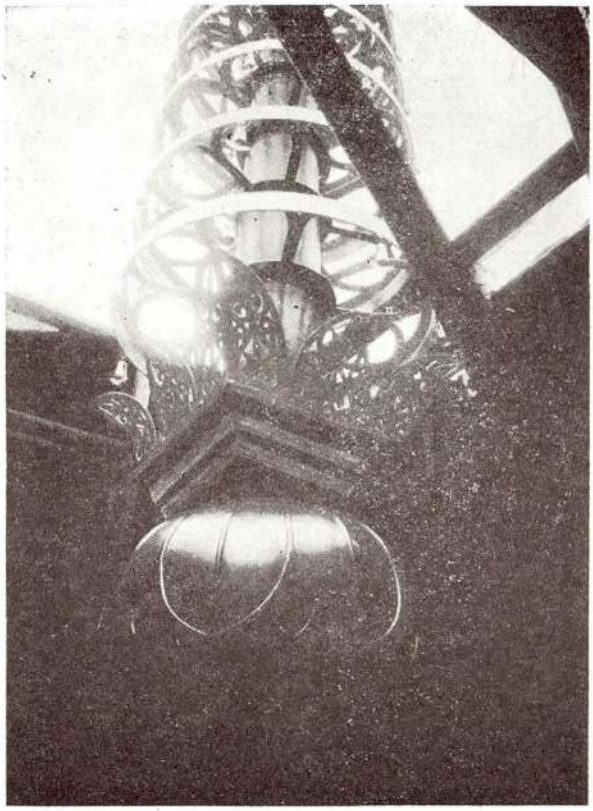
第40圖　相輪の上部をなす寶珠の石膏原寸模型の寫眞である。8葉の單瓣を取付けてその下部を莊嚴したので別に新しい試みでは無いが、唯その形には多少意を用ひてある。即ち細長い球形と首の長い基本形がそれで、これに蓮瓣を取付けてみると、まるで始めと變つた感じを與へる結果になる事が上圖でよくわかると思ふ。まして之が地上140尺餘りの高處に上つた時を思へば1層その感は深いであらう。上部には避雷針の突針がついてゐるが、この突針は實施に當り遙に短くしたから、できた所はこの樣に見憎くはない。昭和14年3月13日寫す。



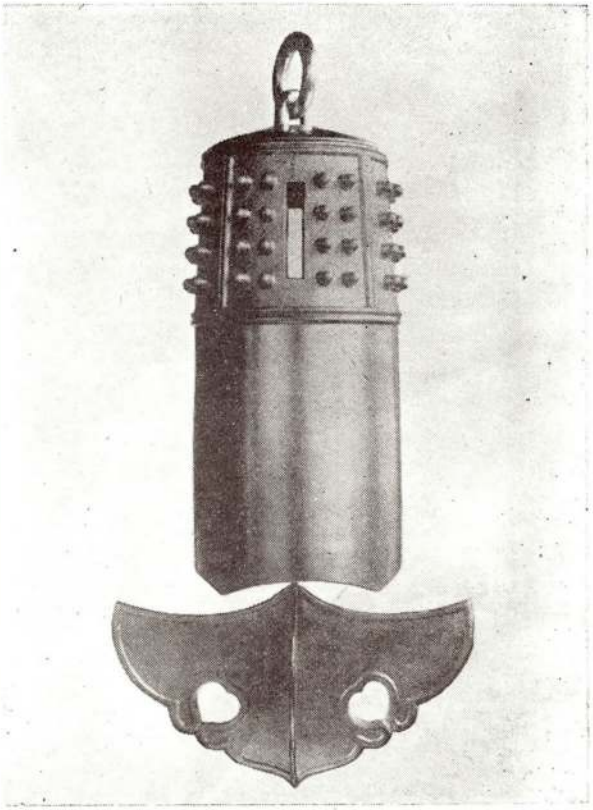
第41圖　前圖同樣龍車の石膏原寸模型である。寶珠同樣球形の左右直徑は約1尺6寸位である。



第42圖　露盤及伏鉢と、其上の平頭とに就いては、何度も考へ直してみたが、古い時代の形は不服だし、仕方なしに紙の上でつくり上げたのである。第1露盤は至極平凡だが側面に2個づつの格狹間を入れる事にした。その形については、はつきりしてゐない飛鳥式で計畫する事は、そこに大分危險が伴ふのでどうかと思つたし、奈良式のは入れにくいし他と比べると少し時代は降るが思ひ切つてこんなものにしておいた。併しこれは今になつてみると大分拙いので、もう少し考へてみればよかつたと思つてゐる。次に伏鉢であるが言ふ迄もなくこれは塔の本體で最も大事な部分である。西北印度のスワット川の溪谷から出土した塔婆の塔身即ち伏鉢の部は、上方から滿開の蓮花を以て覆ふた樣な薄肉の彫刻がしてある。これは洵にうまい考へだと思つたのでこれを今回伏鉢に應用する事にした。最後に平頭は、平面方形なのが古いと考へてゐるので、藥師寺東塔の夫を參考し、その上の花瓣は朝鮮の新羅統一時代の石塔平頭附屬の花瓣を斟酌して輪廓をきめ、內部の文樣は朝鮮慶北漆谷郡東明面の五重博塔を見學した際其平頭についてゐた花瓣の淺彫から、不圖思ひつき忍冬文を2つ重ねてみた。



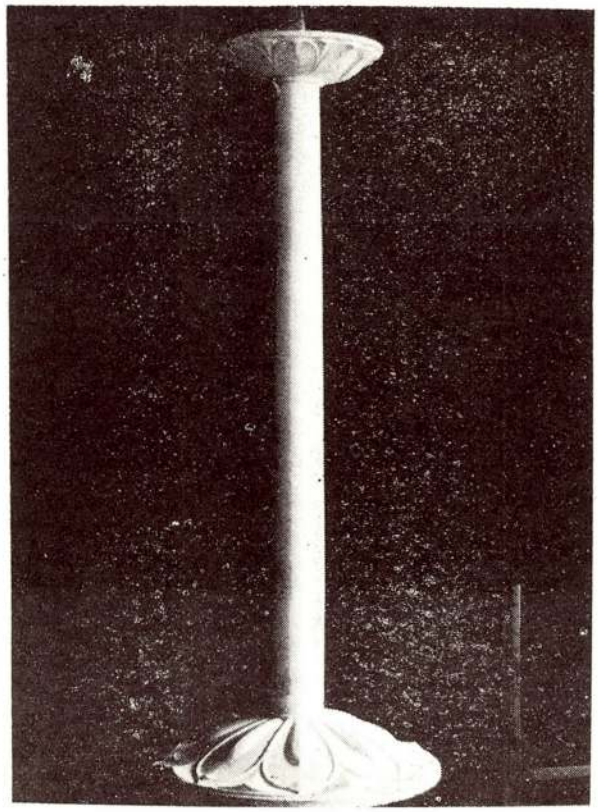
第43圖　主として伏鉢と請花鉢を見せるのが目的の寫眞である。伏との上は八葉の蓮花文を以て飾つた。我國現存の遺物には斯る例はない。これは既記の通り西北印度なるペシャワー市北方、スワット溪谷出土小塔婆の狀鉢の裝飾を元としたもの。方形の平頭上の透彫花瓣は忍冬文様を材料としたもので、これも亦遺物はなく、飛鳥式を應用したものである。（5月25日・天沼）。



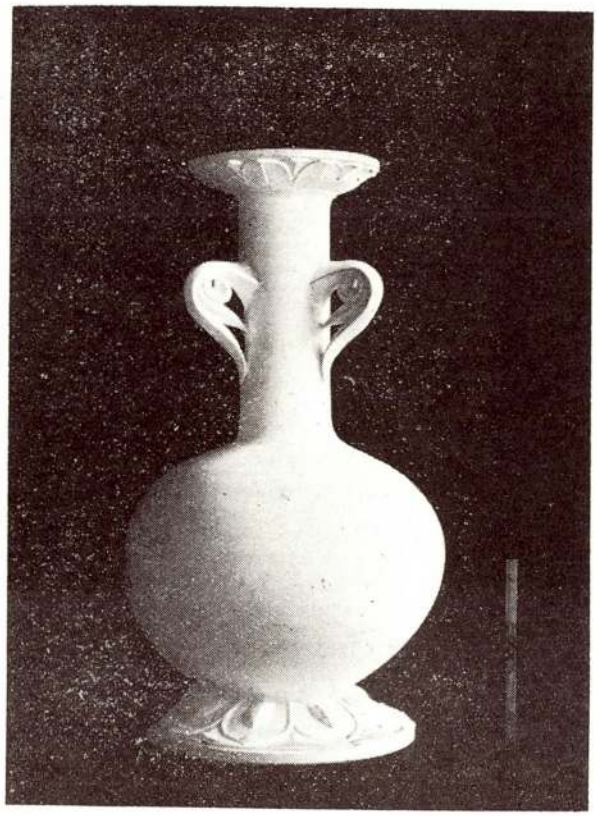
第44圖　各層の飛簷隅木下から吊す風鐸の寫眞で、實物は砲金製漆箔となつてゐる。下の方の羽根を擴げた様な形をしたものを鐸舌（俗にいてふ形）と云ひ、これを吊してある針金の途中に十文字の檀木がつき、舌が搖れる度に檀木が胴に當つて音を發するのであつて、微妙な音色を出す爲にはその厚みや合金の割合並びに檀木の大きさ等いろいろと苦心が要るのである。これは先に金堂の修理の際に初めて考案したもので中門にも用ひる事になり、塔の分と共に同時に製作した爲全部同一形式のものになつてゐる。昭和14年1月22日寫す。



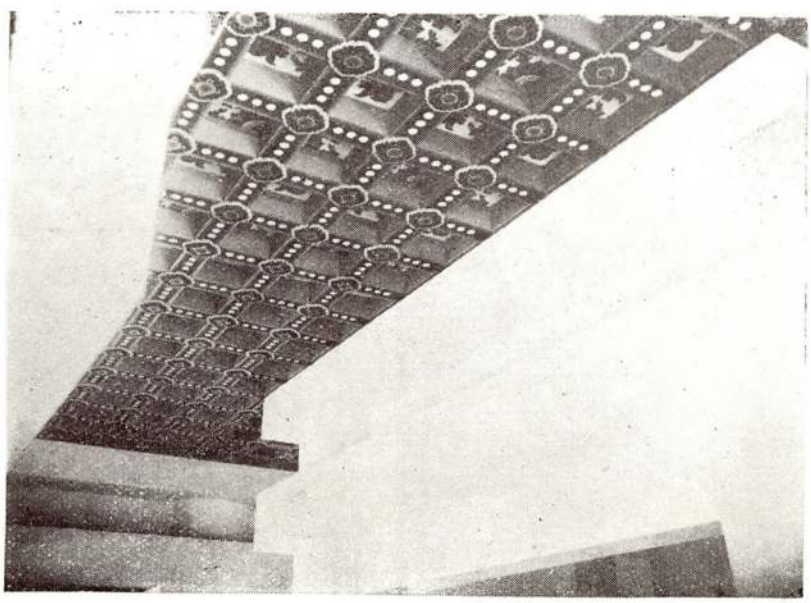
第45圖　初重須彌壇上におく三具足の內、これは香爐である。臺の蓮花は軒先の瓦と同種の蓮花文、兩方の取手は忍冬文、つまみは蓮蕾、蓋の烟抜きは錠の側面につけた別種の忍冬事で、ゆきのしたの葉の様な特殊の意匠のものの無限唐草にしたのである。右方にあるは曲尺の約5寸（6吋）（5月25日・天沼）。



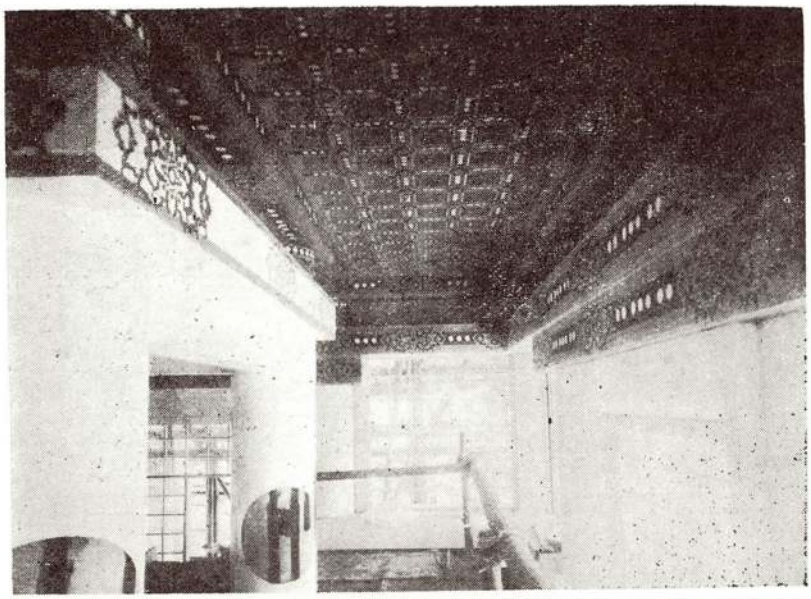
第46圖　三具足の内燭臺。臺座上端の蓮花文は同様に軒先瓦文様をとつたが、上の蓮は隨意の形とした。竿は少しく胴張をもたせこれで香盧同様飛鳥末から奈良初期位の形を現はしたつもりである。右に立てるは曲尺の約5寸（6吋）（5月25日・天沼）。



第47圖　三具足の内花瓶。意匠は燭臺と香爐の解説を讀めば自然に判るであらう。右にあるは曲尺の約5寸（6吋）（5月25日・天沼）。



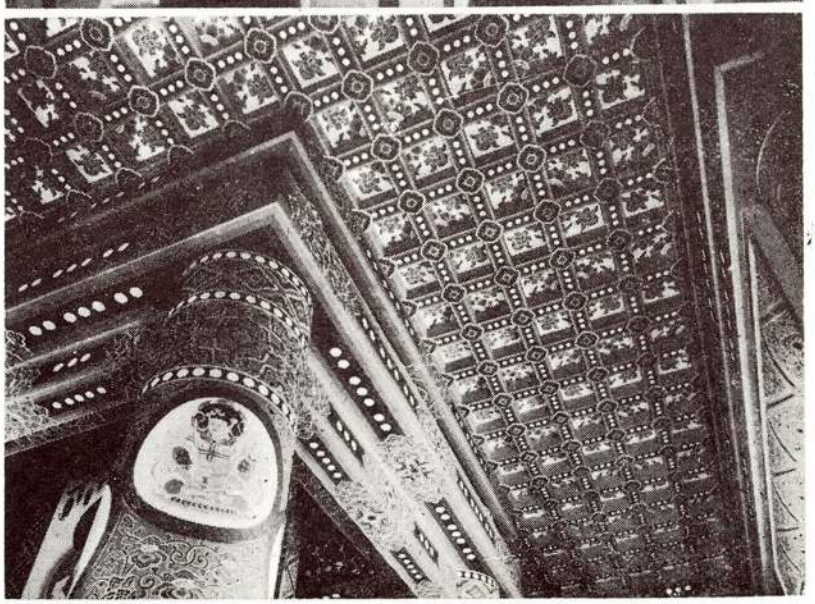
第48圖　昭和14年6月22日に於ける初重内部の狀況を示す圖である。完成して其位置に取付けられたのは天井だけで、他は全部漸く下塗ができただけである。斯様な狀態から滿1年後の昭和15年5月22日は裝飾畵は全部できて丁ひ落成式を擧行されたのであるが、未だ此時分には前途頗る遼遠で、隨分心配もしてゐたのである。（5月27日・天沼）。



第49圖　初重內部天井と長押位が漸く仕上つた所を寫したもので、昭和14年9月15日の寫眞。左手2本の圓柱は四天柱で、圓文は佛像を描く場所としてとり除けてある。其上の長押は散し文樣の下繪輪廓だけができて居り、線條文も何もまだ描いてない。散し文樣は中心飾と葉及び纏綱彩色の色別の輪廓とを型紙に切り抜き、夫れを白地に印刷して、夫から色をつけるので、甚だ手間がかかる仕事である。（5月27日・天沼）。

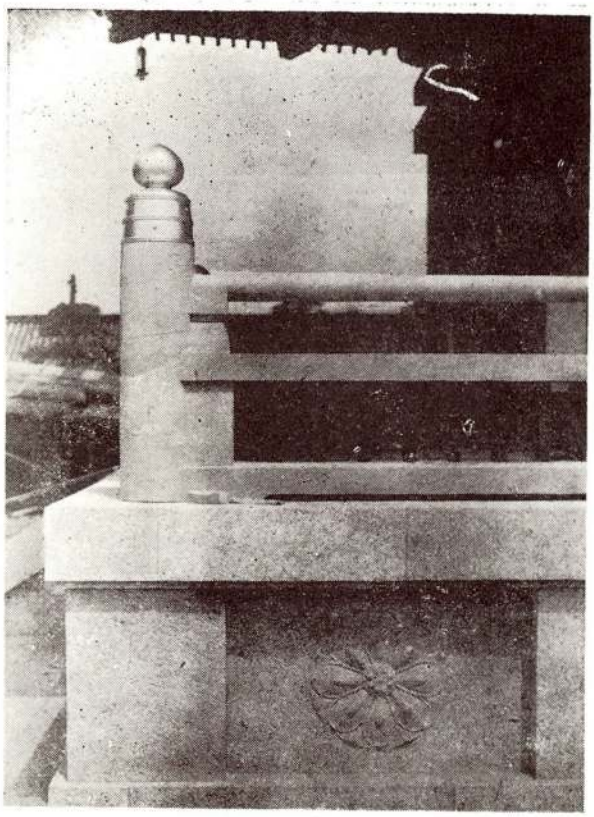


第50圖　前圖と同日の寫眞で左方の四天柱は、此圖では中央に現はれて居り、從て此位置は自然了解できる筈である（5月27日・天沼）。



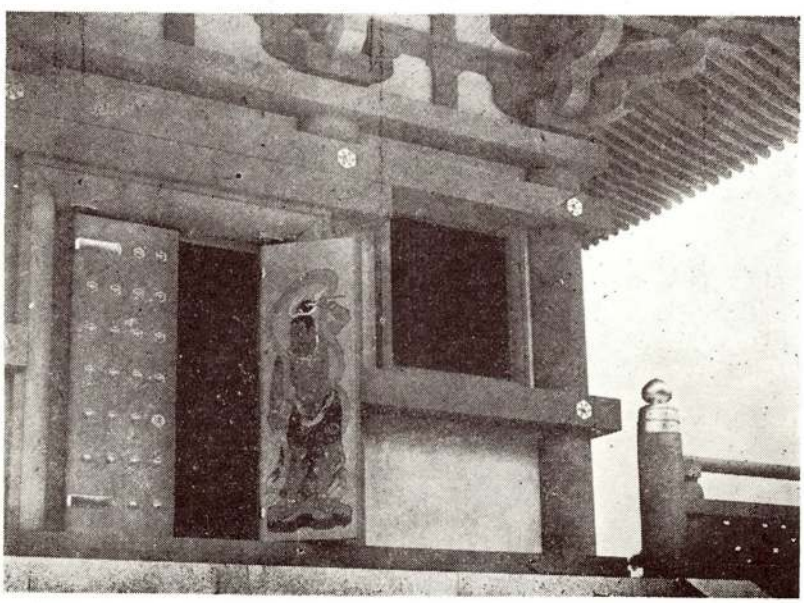
第51圖　初重內部西南隅四天柱を西南隅よりみたものであるが、楯も臺輪も天井廻緣も格天井も、更に右下には東南隅四天柱も少し見え、圖の右端には南側の出入口幣軸上端と西側柱の上部と、さうして2重の長押に天井廻緣が見えてゐるし、中心柱4方を覆へる四佛板と其額緣も寫つてゐるから、此圖を前付アート頁の3頁の寫眞と比べてみると一層明瞭であらう。
（5月26日・天沼）。





第52圖　東側出入口の扉肉合彫（シシアイ彫）を内部からみたもの。四天王の内多聞天（左）と増長天（右）。最初埃及式の彫刻を希望した所、故奈良美術院主事明珍恒男氏は謂はゆる「肉合彫」なる1種の彫刻を以て仕上げられた。此種の彫刻は埃及式彫下浮刻のところもあり、又鎌倉室町頃の建築彫刻、例へば手挟・木鼻に見出される様な、此等扉彫刻の背光に見る如き輪廓を自然にほり下げて、其うちの必要な部分を浮彫にする様な彫法もある。但し何れも小型のもののみであるが、明珍氏は頗る大膽にこれを大きな扉面に應用し、自由自在に雄渾な刀法を以て、先人未發の彫像八軀を完成され、安井秀豐氏は明珍氏と協議しな類例美しき彩色を施された。斯くして從來我國建築界にがらのなき他の追隨を許さざる肉合彫は完成されたのである。右方から斜に見ゆる壁畵（上方の分其額縁を除く）は堂本印象氏の作（5月26日・天沼）。

第53圖　上重基壇と勾欄部分である。上壇羽目石に蓮花文を浮彫にしたのは、昔はあつたかも知れぬが、現存の遺物はない。この蓮花文は軒先瓦のと同意匠のものである。其上の勾欄は鎌倉式のつもりで、平坦地覆の間に卍繋の組子を入れた。飛鳥・奈良の擬寶珠勾欄が判つてゐないし、平安時代のはどうも應用しかねたので、鎌倉式とし、中門上層と塔婆各層のを皆同じにして連絡をとつたが、これも失敗した一つで、擬寶珠を蓮蕾とし、斗束を撥形にすればよかつたと思つてゐる。



第54圖　此は南側初重軸部。扉が半分開いてあるが、南側には金剛力士の肉合彫がある。扉面には六葉座の飾金具を7列4行、上下に八雙金物更に南北兩面に海老錠をつけて締りをする事にしたので、左方の扉の右端下から3つ目に錠の座が見えてゐるが、此座は文様と同じ蓮花文を用ひたものである。即ち基壇上層羽目石の蓮花文と此座と同一の意匠とし寫眞には見えないが錠につけた忍冬文様と香爐の煙抜きに用ひたものと同じにしておいた。出入口上部幣軸より四葉の蕚座を刻み出しておいたがこれは中尊寺金色堂の出入口の例に倣つたものである。（5月26日・天沼）。

言葉より見たる》塔婆《

瀧澤眞弓

塔婆

佛舍利を奉安し供養する墳墓を梵語で「スツウパ」といふ。この語音は、そのまゝ漢字に轉寫されて「卒塔婆」と譯され、それが省略されて「塔婆」となり、更に略されて「塔」なる一字に、文字通り最後の名殘りを留めるに至つた。——と、普通には斯樣に說明されてゐるやうである。語原的には、一應は正にその通りであらう。少くとも常識的には、それでよいであらう。——が歷史的には、この說明は少しく嚴密を缺くのではないかと思はれる。

明治末年・大同館版の〃哲學大辭書〃によれば

「佛典の舊譯家は巴利語を寫して塔婆といひ、或は略して塔といふ。新譯家は具に梵語を寫して窣堵波となす。國文學の古書に窣塔婆とせるものあるは新舊二譯を混用せしものなり。云々」

とある。——この項の筆者は當時の東京帝大講師堀謙德氏であるが、この嚴密にして簡潔なる叙述に、私は敬服する——即ち、最初に支那に入つたのは巴利語の「トフパ」(thūpa, thūpo) であつた。巴利語とは「聖典語」の意だとさへ云はれ、釋迦族の語として初期佛教弘通のために教團の間に最も普通に行はれた語である。この言はゞ通俗的なものが、先づ東道の役をつとめ、やがてその後からやつて來たところの「スツウパ」(thūpa) が「完全語(スクリツタ)」として、その正統性を主張した、といふわけであらう。が、その正しい音を漢字の上に轉寫せんがために、飜譯諸家の間に於ては、種々なる文字の組合せが試みられ、多くの當て字が生れるに至つた。たとへば「窣堵波・素覩波・數斗波・率都婆」等々、の如くである。

さて、「塔」とは、上に述べたところによつて明らかな如く、巴利語系の「塔婆」の一部分である。それはトフパの「トフ」である限りに於て、唯一片の音標文字たるにすぎない。また現に、漢字學者の說く所によれば、この字は古來の漢字でなく、佛教の傳來に伴つて「トフパ」なる外來物を紹介する必要上、恐らく六朝時代に、新しく考案されたものだとのことである。

「塔」は普通に「トー」と訓まれてゐるが、その振假名によれば、漢音は「タフ」であり、吳音は「トフ」である。いづれも「フ」なる氣息音を含むところを以てみれば、六朝人が如何に忠實に巴利語の thūpo の音調 (th-, 0-) を模寫せんとしたかゞ窺はれる。

然しながら、その文字構成は依然として漢字傳統の一方式に從つたものであつて、いはゆる形聲文字の範疇を出ない。且、それが新しい事物に對して態々考案されたといふ事、またその字の偏が土の構成物たることを標示してゐる事、などを思ひ合はせると「塔」の字は單なる一片の音標たるよりも、むしろ最初から塔婆そのものたる資格を賦與されてゐたのだと解される。

この舊譯の「塔」の流布の後に新譯の「窣堵波」が——恐らく玄裝の西域記を筆頭として——登場し來つたのである。がこの「堵」も亦土偏の字であり、既に古く〃詩經〃にも「築室百堵」などゝあるが如く、建築に關係のある語であつたりするところは、その摸音も依然として漢字以外の何物でもない。これに比べて、私はむしろ、「塔」の字を佛教傳來に際會して創作したといふ六朝人の意氣込に多大の敬意を表したい。

「窣堵波」は勿論唐音で發音すべきものであらうが、私はその方面の知識をもたぬので、念のため今日の支那音で當てみると、この三字はどうやら "su- tu- po" といふ樣に發音されるらしい。これからさかのぼつて、新譯家も亦如何に「具に梵語を寫し」たかゞ推察される次第である。

とにかく「窣堵波」の行はれる以前に於て、既に「塔」は言はゞ社會的通念となつてゐた。このことを實證する文獻は少くないと思ふ。差當り造塔問題に深い關係のある法華經を開いて見ると「爾ノ時ニ佛前ニ七寶ノ塔アリ」(見寶塔品) とか、また「諸ノ塔廟ヲ造ルコト、無數恒沙ニシテ

★筆者は神戸高等工業學校教授

國界ヲ嚴飾シ、寶塔高妙」（序品）とかいふ風に熟語の形で示されてゐるがこの「塔廟」とか「寶塔」とかに相當する所を、聖德太子の法華義疏では、たゞ「塔」の一字とされてゐる。日本書紀には「蘇我大臣馬子宿禰、塔ヲ大野丘ノ北ニ起テ」とあるし、出雲風土記には既に「五層ノ塔」や「三層ノ塔」などの語が見えて居り、萬葉集には「香塗れる塔」の語もある位だから、少くとも日本には、最初から單獨なる「塔」が——文字としても、概念としても——渡來してゐたのではないかと思はれる。

浮圖

塔に對する音譯の成立は大體以上の如くであるが、然らば之に對する意譯は如何なつてゐるであらうか。辭典を按するに「正言窣都波、此譯云廟或云方墳、此義翻也、或云大塚、或云聚相、謂累石等、高以爲相也」（玄應音義）。「新云窣覩波此云高顯方墳義立也」（法華文句）などゝある。因に、茲に「正シク言フ」とか「新タニ云フ」とかあるのは、さきに述べた新譯家の提唱を反映してゐるものと思はれるが、スツウパは、要するに土石を累立修造せる墳墓のことである。尙ほ、斯かる形相を暗示する譯語としては「圓塚・大聚・功德聚・高顯處」などいふのがあつて、塔婆は當に高大莊嚴なるべきことが要請されてゐたのである。現に印度には、その巨大なるものが至る所の佛跡に築造せられ、中にはやがてその上に草木が生ひ茂り、往々にして自然の山の如き觀を呈するに至つたものすらある。

法華經の「見寶塔品」に次の一節がある——

> 「爾ノ時ニ佛前ニ七寶ノ塔アリ。高サ五百由旬縱廣二百五十由旬ナリ。地ヨリ涌出シテ空中ニ住在ス。……四衆、大寶塔ノ空中ニ住在セルヲ見、又塔ノ中ヨリ出ス所ノ音聲ヲ聞イテ皆法喜ヲ得、未曾有ナリト怪シミ、座ヨリ起ツテ恭敬合掌シ、却ツテ一面ニ住ス」

由旬（yojana）は聖王の軍一日の行程ださうだから常識から推して、この寶塔の大きは法外である。いはんや、この文字通り架空的な構想は、全く荒唐無稽な一種の戲曲（ドラマ）であつて、恐らくは單なる主觀的恣意のまゝに妄想されたものであらう、と私は豫て解釋してゐた。ところが、嘗て滿洲に行き、早朝汽車の窓から遼陽の白塔を望見するに及んで、この法華經の叙景が必ずしも荒唐無稽な妄想でないことを感じたのである。白塔はその時朝嵐を拔き塵界を絕して紫金の曉天に浮涌してゐた。その莊嚴雄大な姿を仰望して、私は古代の佛教徒たちの體驗的實感を忖度せざるを得なかつた。古來果して、體驗に立脚せずして、偉大なる文學があり得たであらうか。——尤も私は不幸にして未だ印度地方の自然については何等經驗をもたぬものだが——私は心の中に叫んだ、然うだ、これこそは文字通りの「浮圖」である、と。

浮圖なる語も亦古くより、塔婆を指す語として屢々用ひられ來つたところである。元來「浮圖」とは "Buddha" の音譯であつて、「佛陀」とは稍異る系統に屬するものだと云はれるが——日本語の「ほとけ」といふ語は「佛家」の意だとの說がある。それが「浮圖家」の音に近いことも併せ考ふべきである——それが何時の間にか轉化して塔婆を指す語となつた。何故、斯樣な轉化が起つたのであらうか。その轉化の契機となつたのは、大陸に於ける現實的な寶塔涌出の光景ではなかつたらうか——これこそは私自身の空想であるが。

支那の塔に至るまでに、印度の「圓塚」はガンダラに入つて* 「方墳」となつてゐた。それが西域を過つて、支那に入り、支那古來の樓閣建築と結合して、特異な發達を遂げた。「高顯處」の理想は、斯くて支那の高塔に至つて決定的な實現を見たのである。

*印度のスツウパの約束と、支那在來の樓閣建築との結合によつて支那の塔婆が生れたといふ見解は古く伊東博士の說かれたところであるが、更にその間にガンダラ佛塔の介在することが近年足立博士の研究によつて明らかにされた。

聚相異變

冒頭に云つた如く、スツウパ即ち塔婆は佛舍利の墳墓である。それは要するに土饅頭である。それが土饅頭であるといふことは、たとへ佛家の所說が如何あらうと、實はそれが必ずしも佛教特有の形式でないことを暗示する。蓋し、墳墓として土饅頭を築くことは、最も自然的な處置方式であつて、殆どあらゆる民族に共通の現象である。恐ら

くは上古以來印度地方に行はれてゐた墳墓の形式を原型として、その上に佛教徒或は釋迦族獨特の意匠を加へたものであらう。尤も、既にその古き原型は殆ど壞滅して居り、獨り佛教系のもののみ傳へられてゐる今日に於ては、佛塔によつて逆にその原型を想像する外ないのである。が、少くともそれは、印・歐系の古代文化圈に——インドからギリシア地方へかけての——共通なものであつたと推定される。そしてその證跡を、吾々は古いギリシアの花瓶（Lekythos）の繪模様の中に見出すことが出來るのである。（第一圖參照）



ギリシヤの墓　（第一圖）

土饅頭形の墳墓をギリシア人は tymbos（tymba）と呼んだ。この語はラテン語の tumba, 古代フランス語の tombe を經て、英語の tomb に連絡する。イタリア語の tomba 如き、偶然にも「塔婆」の音調に似通ふのも亦一奇である。が、斯かる語の根源をなしたと推定さるべき印度古語は未だ知るを得ない。

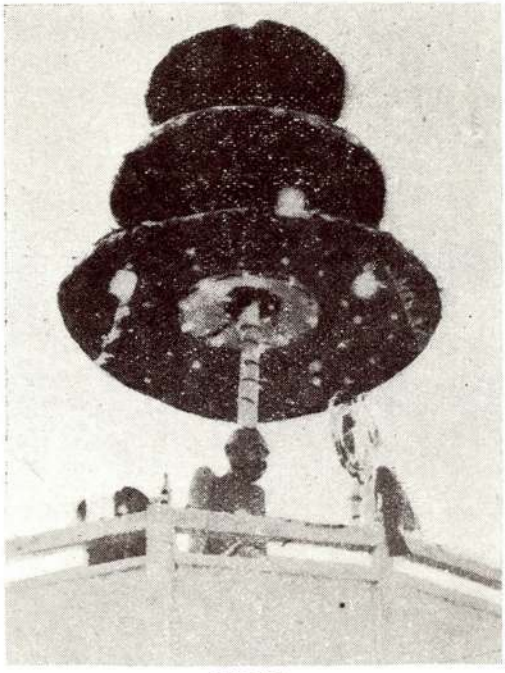
一方 Liddell & Scott の希英辭典によれば、梵語の stup-as はギリシアに入つて stypos となつた。從つてラテン語の stipes に連なることになるわけだが、このギリシア・ラテン語は「柱形突出物・樹幹」の如きものを意味し、梵語のスツウパの意味するところとは多少異るやうに思はれる——實はこの問題に關して、その道の專門家にも尋ねてみたのであるが——〔Sans〕stupa,〔Gr〕stypos の語根は夫々 √STUP, √STYP なるべく、それは「積ム・聚ム・固ム」の如き意味をもつのである。スツウパの原意は恐らくこの方の意味であらう。法華經の方便品に「曠野ノ中ニ於テ、土ヲ積ンデ佛廟ヲ成シ、乃至ハ童子ノ戲レニ沙ヲ聚メテ佛塔ト爲ス」などゝあるのも、この意味に於てよく理解される。日本語でも「塚」といふのは、私見によれば、土石をつかねて造つたものゝ意で、その根原に於いて「ツム・アツム・ツカム」などゝ相通するものがある。

そこでこの問題の一應の結論として——今度は私の臆測であるが——印度の stūpas はギリシアに渡つて stypos となり語形の上では衣鉢をついだ形だが、意味の上では柱形突出物に變化してしまつたのである。これを日本語で言つてみれば「塚」が化して「束」となつたのである。斯くて印度の塔婆 stūpa はギリシアの土饅頭 tymbos 上の柱形 stypos となつた、といふわけであらう——そして、この言はゞ古き塔婆西漸の事情は、やがてその新しき東漸に際しても亦、期せずして同じやうに繰返されることゝなるのである。

さて、スツウパの形式には略一定の約束があつて大體四つの部分に分けて見ることが出來る。即ち（1）基壇、（2）塔身、即ち土饅頭、（3）普通「平頭」と呼ばれる頂上の四角な一廓、(4) 傘形の柱、これである。この形式は、佛典所說の「下基四方、周匝欄楯、圓起二重、方牙四出、上施盤蓋、長表輪相、佛言、作塔法應如是」（摩訶僧祇律）などによく照應してゐる。而して、佛塔としての典型的特色はその上半部分、特にその傘形の柱——「盤蓋」乃至「輪相」——に存するのである。

古來、印度・波斯・埃及等の地方に於ては、尊者に對する世俗的禮儀として、その頭上に大日傘を捧げる。この世俗の禮儀は、やがて僧院に移されて天蓋ともなるが、墳墓に移されて傘形の柱となる。傘によつて尊敬の念が表現されるならば、その禮儀の効果は傘の大さや數量に比例する、といふことにもならうか。斯くて一本の大傘が、更に平頭の四隅に四本の小傘を從屬せしめる形式を生じたが、又一本の共通な軸に數多の傘形圓盤を貫くものゝ如き、言はゞ傘の複合體をも生するに

至つた。尤も印度に於ては、この形式は單に塔婆に限られたものではないらしい。實に現代の聖者ガンヂイ翁がマイクロフオンを前にして獨立運動の大法輪を轉じつゝある、その頭上にもこの傘形の柱は立つてゐるのである。（第二圖參照）



（第二圖）

とにかく、必要より禮儀へ、禮儀より象徴へ。一本の傘にも、その存在形態には自ら變異がある。事情は獨り傘形柱のみの問題ではない。塔婆そのものが、一つの象徴的「形式」と化するに至る。も早や、禮拜の對象としての塔婆は必ずしも舍利塔としての「實體」たるを要しない。象徴ならば模型で足りる。既型なるが故に、その最も典型的特色たる傘形柱が裝飾的に誇張され、言はゞ樹幹の如く成長し、引替へて本體たる土饅頭は退化せる球根の如き觀を呈するに至る。同時に、その基壇は高く、やがて階層を加へることゝなる。本來の塔婆より見れば、この形式上の變化は正に主客轉倒であると云はねばならぬ。

斯かる傾向は既に印度に於ても可成の所まで進んでゐた。が、それが徹底されたのは恐らくガンダラに於てゞあらう。印度の模型に於ける象徴形式は、異邦に於て本建築の上に寫される。それが西域を過り、支那に入り、支那の樓閣建築と結合するに至つた、といふ順序であらう。

相輪

印度の塔婆は支那の樓閣と結合したが、結果に於て、それは要するに樓閣上の裝飾と化した形である。いはゆる「相輪」がこれである。この支那化された相輪が朝鮮を經て日本に渡つたのであるが、日本のものは、何時の間にか一定の嚴格なる形式に結着してしまつた。そこで、私は今便宜上この確乎たる形式をもつ日本の相輪を基準として考へて見ることゝする。日本の相輪は、八つの要素から成立つてゐる。周知に屬することながら、その名稱を列擧すれば、（1）土臺が「露盤」、（2）土饅頭が「覆鉢」或は「伏鉢」、（3）平頭に相當する所に裝飾がついて「請花」、(4) 心柱が梵語 Ksetra の音を寫して「刹」、(5)刹を貫いて全塔婆を名實共に支配する「九輪」、(6) 宛も火焔の如き透彫の「水煙」、(7) その上の壺形か、それとも珠形か「龍車」と名づくるもの、(8) 最尖端に位する「寶珠」、である。之等の要素は密教系のものを除いては、古來殆ど例外なしに、宛も結晶體に於けるが如く、整然たる秩序を守り通してゐるのである。

この日本の純一なる操守に對比すると、大陸のものは、まことに千差萬別と云ひたい多樣さである。思ふに、西域から塔婆なるものを學んだ支那の建築家たちは、これを在來の樓閣建築と結合せしめることに思至つたのであらうが、建築史的に見れば、この結合は一つの驚くべき統一であり、劃期的な創作であつた、と云はねばならぬ。わけても藝術的な六朝の人々が、この新興藝術に對して多大の好奇心を以て臨んだといふことは想像に難くない。

問題は獨り塔婆建築のみのことではない。六朝時代は支那史上の一大過渡期であつた。あらゆるものが、古き形態より新しき形態へ變化せんとする時代であつた。意匠慘憺の時代であり、從つてまた、偉大なる創作の時代であつた。

例へば一例を、最も支那的な藝術としての書道にとつてみてもよい。東晋の王羲之が眞に偉大である所以のものは、彼がたゞ古今無双の能筆家だつたからといふのみではない、實に彼はその子の王獻之と共に、樣式の統一大成者であり、新樣式の設定者だつたのである。このいはゆる二王を時代の先頭として、支那の國粹藝術たる書道は、初

めて眞に藝術的活動期に入つたのである。後世のいはゆる六朝風の書の如きは、偶然にも碑刻の故に長き保存に惠まれたところの、北方的な一樣式たるにすぎない。

畫家には、同じ東晉に顧愷之があつた。佛教徒には、遙々印度に渡つた熱情的な沙門法顯があつた。時代はやがて、百花爛漫の唐朝文化への、言はゞ醱酵期であつた。斯かる時代の背景なしには、支那の塔婆の意匠の豐富さ——そしてその影響の永く後世に及ぶこと——を考へることは出來ないと思ふ。

既に、その意匠に於て多樣なるが如く、相輪各部の名稱に於ても變化と動搖とがあつた。——尤も、このことを私は唯一二の例から推測するにすぎぬものだが——塔婆の傘に對して、支那人は最初「承露盤」若しくは略して「露盤」なる名稱を與へたやうである。史上有名な北魏の永寧寺の塔には〃洛陽伽藍記〃によれば「承露金盤三十重」があつたとされてゐるが、それは傘形部分を指したものと解される。「盤蓋」の意である。元來「盤」とは淺い皿形の器である。古來道家の說くところによれば、盤を樓臺上に裝置すれば天來の甘露之に注ぎ不老不死の靈藥となる、といふのである。斯ういふ、如何にも支那的な神秘觀が、異境所傳の塔婆の「露盤」觀にも反映してゐないとは云へない。

日本書記（崇峻紀・元年三月）に百濟から寺工・畫工・瓦博士等と共に「鑪盤博士」なるものが渡來したとあるが、恐らくそれは盤蓋としての露盤、乃至は全相輪を作る金屬工師を意味するものであらう。

ところが、この「盤」は何時の間にか、文字通りの輪郭にすぎぬ圓輪と化し去り、恐らくこの事と關聯して、露盤の名は最下の土臺に移つて行つたのである。（尤も、この名稱の轉化が既に支那にあつたか、日本に於て初めて行はれたのか、私は未だ審にするを得ないが）斯道の專門家は、この轉化は誤謬であるといふ。が、盤は一面に於て、物を承ける臺をも意味するから、この轉化は甚だ順調に行はれたといふわけであらう。後には碁盤算盤などいふ語も出來た位である。

茲に「算盤」といふ語が引合ひに出たが、その唐音と形狀とを參酌して、日本では「十露盤（そろばん）」などゝも書かれてゐるが、俗に九輪のことを亦「そろばん」といふさうである。恐らく江戸時代の世俗であつて、軸に算盤珠を貫いた形が九輪に似てゐるところから來たのであらう。或は、ともすると佛家が學的嚴密の立場から「承露盤」と說いたのを——現に日本の僧の書いた谷響集といふに「重々の相輪を承露盤と名づく」と斷つてゐるさうだが——無智な民衆は音調の似てゐるところから「十露盤」と早合點した、といふやうなことも考へられる。

「相輪」の語にしても、前揭の僧祇律には「長表輪相」とある。辭典を按ずるに、佛典解說者の說として「相輪トハ、圓輪ヲ出シテ、以テ相ヲ表ハスタメノ故ナリ」をもあれば「輪相ト言フハ……上ニ盤蓋ヲ施シ、長ク輪相ヲ表ハス、經中多ク相輪ト云フ」ともある。相輪の名が圓輪に對して初めて與へられたのか、それとも既に盤蓋に對して與へられてゐたのか不明である。また「相輪」といふよりも「輪相」と呼んだ方が語義としては順當でないか、とも考へられる。が、いづれにしてもこれ等の言葉の中には、輪々相重の美觀が暗示されてゐる。

相輪の美觀もさることながら、或は既に「輪」なる語が、特に佛家にとつて精神的意義をもつものではないだらうか。といふのは、佛教に於ては極めて神聖な意味をもつところのものが屢々「車輪」によつて象徵せられてゐるからである。例へば「轉輪聖王・輪寶・法輪・輪華・輪圓具足」等々。更に五輪觀の如きは、やがて密教に於ける「五輪塔」の根原ともなるのである。が、更にさかのぼれば、古代以來支那に於て、「輪」は高大なる樣相を意味した。禮記に云ふところの「美哉輪焉、美哉奐焉」なる句より、やがて「輪奐」の美が宏壯華麗なる建築美を意味するに至つたのは周く人の知るところである。支那人の心理に於て「輪」なる語の意味するところが如何に深く且つ大いなるものがあるかを思はざるを得ない。

然らば、日本人にとつて、「輪」は何を意味するか。何時の頃からか、日本人は草木の花を「一輪、二輪」と數へるやうになつた。輪に高大なる建築的美を感じた支那人との間には測り知るべからざる距りがある。先天的な性格の相違である。而してこの相違は、相輪の形式の上にも亦反映してゐる、と思ふのである。

日本の九輪

日本に於ては、何故か圓輪の數は殆ど總べて九つと定まつてしまつた——例外として現存するものは、當麻寺の三重塔の八輪と、多武峯十三重塔の七輪との二種のみである。——かくて吾々は、相輪のことを俗にまた「九輪」と呼ぶ。が、何故に九つの輪に定まつてしまつたかは不明である。敢て憶測すれば、元來それは「空輪」と呼ばれてゐたものが、「空」と「九」との音韻の一致が契機となつて、九輪の意匠が試みられ、然かもそれが美的効果を擧げたとすれば、名實共に九輪であることこそ天來の妙緣だ、といふわけでもあつたであらう。現に『吾妻鏡』には、文治五年三月十三日の條に「此間塔婆ヲ建テラレ、今日空輪ヲ上グ」とある。尤も流布本の中には、同じ箇所が「九輪」となつてゐるものもあるが、物集博士の『廣文庫』には「倭訓栞」として「東鑑〔吾妻鏡〕には空輪と見えたり」と態々斷つてゐる。

日本の相輪の特殊性は、單にその九輪の數にあるのみではない。大陸のものが種々多様なるに對して、日本のものは——既に前節に於て述べた如く——確乎として一定の秩序を維持してゐる。言ひ得べくんば、一種のオーダーである。それは支那のものが創作であつたのに對して、日本はそれを形式的に模倣したからだ、といふことも考えられる。が、問題は單にそれのみでは解釋し盡くされぬものがある。第一に、日本のものは、大陸のものに比して、如何にもよく洗錬されてゐる。日本人が美の上に求めたものは、變化ではなくて純化であつた。第二に、この純化は、異國的のものを排除して、日本的なものを強調した。この點で先づ注意さるべきものは水煙である。水煙の如きものは、スツウパ本來の約束には無かつたものである。それが日本に於て積極化されたといふのは、あの天空に向つて燃え立つやうな趣が、特に日本人の氣象に合つたからではあるまいか。

大陸風の相輪には、日本の水煙に相當する所に天蓋様の大盤蓋、言はゞ「寶蓋」をもつものが多い。乃至は、水煙と寶蓋とが併用されてゐる。從つて、水煙の存在は甚だ消極的である。その寶蓋を排除して、水煙一點張りとしたのは日本人ではなかつたらうか。法隆寺の塔の如き、現存する最古のものに於てさへ、九輪の直上に堂々たる水煙が君臨してゐるのである。

再び言ふ、日本の相輪は洗錬されてゐる。曾て足立康氏が『國華』誌上で、北魏塔婆様式の系統を論ぜられた一節に「一般にガンダラの塔婆が、よく整つた輪廓を持ち、明快な風趣のあるのは恐らく西方〔ギリシヤ〕の影響に負ふ所が多からう」といふ意味のことを述べられたが、誠にに卓見であると思ふ。そして偶然にも、ガンダラの塔は、支那のものよりも遙かに日本のものに似通うてゐるのである。しかも、日本のものが、洗錬といふ點に於て一層の進境を示してゐるこは云ふまでもない。

然らば九輪に於ける日本的美の根原は何處にあるのであらうか。——私は提案したい、敢て端的に——其處には日本人の草花に對する獨特な感覺先天的な愛、が反映してはゐないだらうかと。覆鉢は球根の如く、請花は花であるよりも、むしろ根葉であり、刹の莖に九輪の葉、水煙は正に滿開の花でその上の龍車と寶珠とは蕾の如くである。但し、これは何か實在の草花を寫したといふのではない。その全體の形式美のうちに、私は何となく植物的な構成を感じると、いふのである。

> 敢て空想を逞しうすれば、あの水煙の透彫に、私は曼珠沙華を聯想する。この花の名は梵語のManjusakaから來たもので、和名を「彼岸花」といふ。尤も、この花が佛典所說のものと如何なる關係にあるかは知るを得ないが『大和本草』といふ書には「此花を國俗曼珠沙華と云ふ」とある由だから、或は日本での俗稱であるかも知れない。今日では普通に毒草として知られてゐるが、同時に昔は藥草として用ひられたことも考慮されねばならぬ。一脈の妖氣をたゝへた魅惑的な花である。日本人の心に映じた最初の佛教藝術の姿も亦斯くの如きものではなかつたらうか。
>
> 法華經の序品に、寶塔の莊嚴を形容して「天ノ樹王、其ノ華開敷セル如シ」とあるが、次いで佛德禮讃の條には「天ヨリ曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華ヲ雨フラシ」とある。わが國に於ても、平治物語の唐御所炎上の事といふ一節には「述王の建て給ふ瑪瑙の塔あり、かの塔の下には、摩訶曼陀羅華、摩訶曼珠沙華、四種の天華開けたり」などとある。
>
> 茲にいふ「天華」は、天より地上に降りそゝいだ花の意であつて、塔上を飾る如き意は無いので

あるが、上に引用した如く、法華經でも既に、塔の莊嚴なる姿を花咲ける「天ノ樹王」にたとへてゐるのである。それは自然の心理であらう。だから九輪の形に日本人の草花に對する愛が反映したといふやうな假想も許されるかと思ふ。そこで、水煙の透影に「一輪」の曼珠沙華を空想した次第であるが——これが本當に根も葉もない唯の話といふのかも知れない。

齋宮の忌詞(いみことば)なるものに「塔、阿良良岐(アララギ)ト稱ス」とある。塔婆に對して、純粹の日本語を求めるならば、精々この忌詞くらゐのものであらう。が、今日に於ては、この「あららぎ」が果して何を意味するかは不明である。日本書紀(允恭紀)に「蘭一莖」の語が見えてゐて、その「蘭」を「あららぎ」と訓ませてゐる。國文學の通說によれば、それは疎々葱の意で、野蒜を指すと云はれてゐる。が、また一說には山蒜(行者忍辱)の古名だとも云はれ、或は藤袴の別名だとも云はれる。〃大和本草〃に「眞蘭、和名藤袴、又あららぎといふ。古歌にらにとよめり」とあるさうで、蘭(ラン)なる名は、今日よりは廣い意味に用ひられてゐたらしい。現に笹山三次氏の「蘭譜」(昭和8年版)にも蘭科以外のものにまで蘭の名がつけられてゐることが注意されてゐる。が、大體に於て、長い花莖の先に花を開くものを指してゐるらしい。そのことは日本書紀の「蘭一莖」なる語にも暗示されてゐる。更に〃大言海〃の引用するところによれば、倭訓栞なる書に「あららぎ」の解說として、

> 「齋宮ノ忌詞ニ、塔ヲ云フハ、阿蘭若〔梵語にて修道院〕ノ意ト云ヘド、葱蒜ノ貌、九輪ノアタリニ似タルヲ以テ、俗ニ塔のたつト云フ意ニテ、蘭葱ヨリ出デタル詞ナルベシ」

とある由である。「蔓のたつ」といふ俗語を「塔」の上に僞裝したところなどは仲々油斷がならない。

この忌詞といふものは、佛事凶事を忌むところから生れたもので、要するに一種の隱語である。〃徒然草〃の一節に「齋宮の野宮におはします有樣こそ、やさしく面白きことの限りとは覺えしか。經、佛など忌みて、中子、染紙など云ふなるもをかし」とあるのがそれで、寺院を「瓦葺」と云ふのは隱當だが、僧侶を「髮長」と云つたり、毆打するとを「撫でる」などゝ、まるで人を食つたやうな云ひ方もある位だから、「あららぎ」が果して如何なるものを意味したかを一義的に決めることは困難であらう。然かも、また古來大宮人や神官のための笏を作る木の故に「一位」の尊稱を得たといふ別の「あららぎ」をも考慮に入れるならば、神佛問題も亦錯綜する。が、上揭幾種かの解釋に於て、其所に一貫して存するものは實に吾々の祖先が九輪の形に草木の姿を感じてゐた心情である——その命名者も、またその解說者たちも——そして、野蒜、山蒜の如きものが「あららぎ」と云はれるならば、さきの曼珠沙華が石蒜と書かれることも、更めて玆に注意してよいかと思ふ。

水煙を一輪の花と見たてる心。この心は、櫻草科の草花に「九輪草」や「九輪櫻」の名を與へた。この言はゞ、日本人の植物的感情。日本的美の秘密はこんなところにあるのではなからうか。

——問題はこれで盡きたのではないが、ひとまづこの邊で筆を擱く——(昭15年6月)

追記

(1) 大和長谷寺の〃法華說相版記〃に、「樹以表刹量如大針 上安相輪 如小棗葉」なる句がある。これなどは相輪の形を植物に擬する日本人の心情の一證ともならう。が、或はその手本は既に大陸に存したかも知れない。

(2) 當麻寺三重塔の相輪の「八輪」なることはさきに注意したが、「粟原寺伏鉢銘」に「和銅八年四月敬以進上於三重寶塔七科鑓盤矣」とある。實は私は未だこの銘文の正しい訓方に通ぜぬが、若しも鑓盤が露盤の意で盤蓋を指すとすれば、この三重塔の相輪は「七輪」であつたと解される。

法起寺三重塔の相輪は、今日では文字通り九輪だが、明治改修以前は「六輪」だつたさうである。(因に平凡社版〃大百科事典〃の塔婆の項所載の法起寺塔の圖面は改修以前の實測圖を採用したものらしく、「六輪」になつてゐる)尤もそれは中世に於ける塗雜乃至修理の結果であらう。が日本の相輪も、少くとも三重塔にあつては奈良朝以前には必ずしも「九輪」ではなかつたと忘はれる。そしてこの事はやがて相輪一般の「九輪」制確立の時期とも關聯する問題であらう。

讃　　仰

村　田　治　郎

I

四天王寺復舊の大業が目出度く完成したことを心から慶祝したい。その祝詞はもとより四天王寺當局の方々へ申しあげると同時に、關係せられた建築家の皆様に捧げなければならない。これだけの巨大な五重塔が新たに建設せられるといふやうな事は、近代に於て極めて稀有としか思はれないにも拘らず、長からぬ一生の中に此の聖業に關係せられたのは、建築家として全く最上の幸福であり榮譽であると言ふべきであらう。しかも江戸時代以前とは違つて建築家の社會的地位がいちじるしく向上し、技術家に相當の權威が認められ敬意が拂はれて來た現代に於て、この稀有な工事に關係せられたことは、昔の工匠達とは比較にならない大きな幸福だつたと申さなければなるまい。

四天王寺塔婆再興にあたつて局外者の私共にうれしく思はれたのは、第一に倒壞した塔のあとが十分學術的に調査せられて、その結果がある程度まで公開されたとであり、第二に新たに「四天王寺」といふ月刊雜誌が發行されて、内容に有益な讀み物と同時に建築工事の最新記錄が盛られた點である。とくに後者は恐らく必要が生んだ結果ではあらうが、古建築の工事に於て劃期的な企てだつたと言へよう。

工事を進めてゐる途中に今回の日支事變が起つたのであるから、塔婆建設にも色々と支障が起つたことであらうが、しかし平時よりも戰時に於てこそ、四天王寺の意義が一層高揚せられた點を見のがしてはならない。四天王はまた護世王ともいふように國土守護の神であつて、とくに四天王寺の金堂には初め四天王の像が西向きに祀つてあつたといふから、西方外敵を威服して日本國土を守護する意味が含められてゐたやうであり、その四天王寺がここに完成復舊したことは、現在の時局と結びあはせて考へると無限の意義がこもつてゐるのを覺える。

★筆者は京大工學部教授

II

日本の佛教は有力な國家的宗教であるが、しかしまたその源流を考へてもわかるやうに國際的性質を常に持つてゐる。その國際性ともいふべき一面を佛寺建築の中で最もよく示してゐるのが佛塔である。

高層塔の形がどういふ經過をたどつて出來上つたかといふ問題は、記錄も遺物もほとんどないために明瞭な解答が述べられないが、少くとも完成された形の上から見れば、頂上の相輪部が印度塔婆の形態に基いたもので、その下の高層建築の部分が支那古來の樓閣とほとんど同じ形であるとは言へる。故に形態的には印度系と支那系とに基礎を置き、それに日本的解釋を加へたのが日本佛塔の姿である。

次に伽藍配置に於ける塔の位置が注意を要する。四天王寺が百濟より傳來したまゝの古式な配置であることは言ふまでもないが、その源流にさかのぼれば支那の南北朝時代の佛寺に及んで居り北魏の首都洛陽の永寧寺の如きは、巨大な塔を前にし佛殿を後に配し、一郭の周圍には牆壁をめぐらし東西南北にそれぞれ門があつたといふから、四天王寺の中心部によく似てゐたことが知られる。佛寺の中心として塔を中央に置く配置は、支那に始まつたのでなくて西域に起源があり、新疆地方の遺跡のみでなく、アフガン地方、印度全域に於いて見られるのであるから、結局印度から出發して佛教とともに次第に東方へ傳へられたことが明かである。しかし印度系の配置では塔のみを中央にして周圍に僧房などを置くのであつて、その傾向をよく傳へた例は大同雲岡の石窟でも見られるが、多くの支那の場合は塔のほかに更に佛殿を中心に置かうとしたところに、支那的要素が加へられてゐるやうである。從つて伽藍配置に於ても印度、支那兩系統の流れが同時に四天王寺で汲めるわけである。

その他、今度の塔婆裝飾に盛んに用ゐられてゐる蓮華とか忍冬文様なども、また支那のみでなく印度の色彩も濃く、それらは遠く希臘、埃及にまで起原が求め得られる。かうして數へあげて見ると、四天王寺塔はまさに東亞建築の粋ともいふべき諸要素の集合である。さらに工事に關係指導せられた諸建築家が、西洋系の建築學にも明るいことを考へに加へるとすれば、東亞のみでなく世界建築の精華を集めて成つた塔とさへ言へるだらう。さういふ意味で四天王寺塔はひろく知識を世界に求めて綜合した建築であることに一點の疑ひもない。

III

しかし同時にまた四天王寺が聖徳太子によつて開基せられて以來の傳統を、再建された塔が嚴として守つたばかりでなく、かつての江戸的要素を捨てて飛鳥への復古的傾向を濃厚に示した點を顧みるべきだらう。しかも單なる復原に終始しないで、常に創意を加へて昭和の新塔婆を建立せられたところに一層意義深いものがある。かかる點に立ち至つて考へるときは、四天王寺塔が單なる支那系塔婆の再現ではなくて、眞に過去の日本歷史を深く省察して完成した日本的塔婆であることを感ぜざるを得ない。

時あたかも紀元2600年。四天王寺としてはもちろん、大阪市としても世界に誇り得る一建築が記念すべき年に完成したのを、一國民としてまた一佛教信徒として遙かに慶祝したいと思ふ。



持國天



增長天

四天王寺初層扉（內部）彫刻（故明珍恒男氏遺作）

再建成る四天王寺五重塔

藤原義一



カットはFletcher氏のHistory of Architectureに掲げる四天王寺五重塔

五重塔倒る

昭和9年9月21日關西地方を襲つた暴風雨は、僅か數時間の中に多數の人命を奪ひ、樹木建築物など多くの地上の物を破壞し去つて行つた。それ等の損害の中に四天王寺中門五重塔の倒壞も報じられたのであつたが、正直のところ我々に取つては身近い所の慘狀に心は一ぱいで、建築そのものにあまり重要性のない四天王寺の塔などには、新聞紙上のニュース以上の關心はなかつたのであつた。下加茂神社、上加茂神社の社殿、東福寺、建仁寺、醍醐寺、園城寺、竹生島等に於ける堂宇や社殿の甚だしい狀態を見て廻つて、我が貴重な古建築の損害を惜しみ、天然の破壞力の强大に驚嘆してゐた。醍醐寺五重塔の相輪が少し傾いた。奈良の興福寺五重塔の相輪も何うかなつた。藥師寺東塔の相輪は水煙のあたりが少し曲つた樣だつた。八坂五重塔が全體で何寸とか移動したといふ噂も飛んだがこれは噂にすぎなかつた樣である。併し近江の鞭崎神社の表門は確かに2寸ばかり寄つてゐた。國寶建築物で根こそぎ倒壞したのでは建仁寺方丈、三寶院純淨觀萬壽寺愛染堂が顯著なもので、屋根が剝がれたり、彫刻が吹き飛んだりした程度のものは、無數であつた。

併し何と云つても大阪の四天王寺は有名で、日々の新聞は崩壞した五重塔と中門、それから大破して傾いた金堂の物凄い寫眞を揭げ、中には飛行機で上空から撮つた珍しい寫眞もあり、會ふ人からは四天王寺の塔に就ての質から棒の質問を受けて大いに面喰ふ有樣だつた。その中四天王寺に行つて現狀を見る機會も得られ、さうしてゐる中に年の暮れに近づいて塔の心柱礎石下の發掘調査が始められた。このことは、當寺創建に關する種々重要問題に觸れるところがあるので、學界に於ても非常な關心を呼び、調査は愼重に行はれ、自分も毎日の樣に押しかけて、師走の寒風にふるへ乍ら根氣よく發掘作業を見てゐた。

現在の四天王寺伽藍の問題及び心礎下の發掘

さて四天王寺は周知の如く、聖德太子の御發願に成り、崇峻天皇元年攝津國玉造岸上に造營され推古天皇元年に難波荒陵に移された。これが現在の四天王寺で、伽藍の諸建物は創建後幾回かの罹災再建を經て、今回倒れた五重塔は文化10年の建立、中門は文化9年上棟、大破したが危く倒壞を免れた金堂も文化9年上棟、その他講堂、廻廊、西重門は文化9年と云はれるが、但し西重門は文化よりは少し古い樣である。西大門、北大門、東大門等は元和又は寬永年間に成つたもの、而て東大門のみは國寶に指定されてゐる。要するに古いもので江戶時代の初葉、大部分は江戶末期に造られたものである。併し伽藍全體としてはよく舊態を存し、殊に諸建物の配置は創建當初のまゝで、我國に於ける飛鳥時代初期の伽藍配置を示す最も典型的な實例とされてゐる。即ち南面伽藍で、中門を通る南北一直線上に中門、五重塔、金堂、講堂が並び、中門の左右から出た廻廊は金堂塔婆を中にして東西南北の四方を劃して講堂の左右に終

☆ 筆者は文部省囑託

り、講堂の後方には鐘樓と鼓樓が東西に並び（鼓樓は最初は經藏であつた筈）、その後ろに石舞臺があり、前に樂屋を備へ後方に六時堂、食堂が控え更に東北方には湯屋がある。建物は新しく變つてゐても往昔の規模は眼のあたりに殘され、殊に湯屋に就ては悲田、施藥、療病、敬田の4院に關聯して聖德太子數々の御營みが思ひ浮ばれる。

1つ1つの建物に就ても、例へば金堂五重塔は文化年間、謂ゆる江戸末期の最も悪い時節に出來たもので、建築としては云はゞ粗末な拙い建築の部類に入れらるべきものであるが、兩者共石の基壇上に建ち、金堂は法隆寺金堂を想起させる様な重層佛殿で、而もその屋蓋は錣葺の形式を有し、五重塔に於ては、極を使用せず、軒裏一帶は雲水文を彫り出した彫刻で覆はれ、これを受ける斗栱も通常の様式と大いに異り、極上大斗に雲水形の持送りと、龍や獅頭の尾極様のものを以てし、異様な中にも何處となく飛鳥時代の雲斗栱と云つたおもかげを傳へてゐた。普通に見れば唯だ奇異なものとしか感じない構造手法も、伽藍の歷史と併せて考へればそれぞれ深い意味が藏されてゐる様に思へたのであつた。

從來境内で出土した古瓦にも、飛鳥建立當初と推定されるものが種々あり、現在の四天王寺が當初の場所に、當初の配置のまゝに傳へられて來たものであることは、如何なる角度からも推察して疑ふ餘地はなかつた。故長谷川輝雄氏の四天王寺建築論には、尺度の上からもそのことが證明されてゐる。

今行はれんとする心礎下の發掘は、これ等百の論說に實物の證明を與へやうとするものである。ここに我々の關心が集中されてゐた。若しこの塔の位置が創立のまゝなら、下に何かあるに違ひない。多分何尺かの地底に大きな心礎があるだらう。當初の舍利か何かも奉藏されてゐたとも限らず、などと種々豫想された。果して何うだか、或は全く意外の結果が飛び出すかも知れぬといふ好奇心も多少はあつた。

かくて發掘は除々に進められて行つた。その間の詳細は四天王寺圖錄伽藍篇に採錄されてゐる。

その結果は、倒壞した塔の心柱の下に見えてゐた四角な礎石は文化再建時のもので、これにはその時の佛舍利が藏されてゐた。この心礎の下方に半圓筒2つ合せた石筒があつて、中から素燒の千體佛像が出てこれも文化のものと認定された。これから下の方に行くと、周圍が圓筒形の木炭層で取り圍まれ、その中に上方から12尺毎の間隔を置いて1つ、3つ、5つ、など組合せになつた組石がいく組か現れ、遂に最初の心礎上端から約12尺のところで待望の大盤石に突き當つた。直徑約7尺程もあり、表面は大體平らになつてゐて、中央部に直徑3尺6寸ばかりの圓形に細い溝が刻つてあり當初の心柱を示すものと考へられた。そして大盤石の上にも1尺から1尺5寸位の石が9箇並べられてあつた。

昔の舍利の類はなかつたが、金環が一對發見された。期待してゐた心礎は現れ、木炭層で圍まれた土中の組石もそれぞれ專門家の研究によつて意味が明かにされた。そしてこの發掘は四天王寺の歷史に千鈞の重きを加へる結果となつた。同時に伽藍復興は着々緒に就き、先づ金堂の修理が成り、次で中門が再建され、最後に五重塔が、倒壞してから6年目に遂に成り、この5月落慶供養が營まれた。

再建成る五重塔

新塔に就て四天王寺の說明によると次の如くある。

創建より第6回目の建立である。

平面の大さは初重方24尺5で、倒れた塔と同じ。

高さは地上104尺4。その中基壇高6尺7。塔身97尺7。相輪40尺0倒れた塔より全體で約2間低い。

各重遞減の割合を多くし、屋根勾配を遙に緩にして安定感を增さしめ、相輪を長大にして塔身との釣合を良好ならしめた。

建築樣式は奈良時代を主とし、飛鳥より鎌倉頃迄の建築の細部を適當に取入れた。

初重內部の唐草は奈良より平安に到る裝飾文樣を斟酌し、これに創意を加へたものである。

極めて淡々と記されてゐる。併し本塔の意匠や創意の內容はこの說明に於ける様な單純な性質のものではないであらう。第3者の立場からその內容に少々立ち入つて見たい。

倒壞した塔の初重平面の大さをそのまゝ踏襲して新塔の形を作れば、何分文化年間などに出來た塔は屋根の勾配が急で且つ各重遞減の度が少いから、自然新塔の高さはそれより減らざるを得な

い。而も相輪は長大を加へ、それだけ塔身は減じそこに著しい遞減による安定を求めて、これによつて長大な相輪を捧げて堂々たる均整を保ち、莊重華麗な外形が得られたのである。今塔下に立つて全景を仰ぐとき、先づこの形に我が古代塔婆の生命の呼吸が感じられる。下は基壇の蓮花紋から上は相輪の請花寶珠に至るまで、細部の1つ1つに巧みな意匠と深い造詣とはうかがはれる。

三手先斗栱、間斗束、軒天井軒支輪を以てする軒廻りの制式、支掛制に從はぬ棰の布置等は、說明にあるところの奈良時代に則つたものであらう。各重の遞減と緩い屋根深い軒、垂みなき眞反りの軒線のかもし出す悠々たる姿態は或は飛鳥と云はれるものから來てゐるのかも知れない。二重基壇、相輪、扉、連子窓、勾欄、風鐸、軒瓦紋、鬼瓦、降棟の部分部分に就てその源を求めれば、或ものは飛鳥に、或ものは奈良に、或ものは平安に鎌倉に歸し得るものもあらう。併し自分は、この建築の細部手法がかくの如く單純に、各時代の要素に分解し得るものとは考へない。逆に云ひ換れば、かく單純に時代時代の要素を、寄せ集めて此塔は出來たと考へないのである。全體を構成する細部の1つ1つが全體に對して深い關聯をもつて意匠されてゐること、その箇々の細部が或る1つの時代の形態を以て現はされてゐても、この形態に歸着する迄に、他の全體に對して、あらゆる時代の實例が樣式が檢討し盡されてゐるものであることを自分は知つてゐるからである。1つの格狹間、1つの唐草、1つの蓮花紋が決定される迄には、各時代の總ての種類の格狹間、唐草、蓮花紋が探求せられ、配列せられ、置き變へられ、變形せられ、便化せられ、更に箇々相互の關係や全體に對する調和、統一、變化の種々相が比較研究せられてゐる。その範圍は日本內地にとどまらず、朝鮮、支那、印度の、凡そ我が佛教美術佛教文化の源泉であり擴がりであるかぎり、普く涉獵せられてゐるのである。

二重基壇の羽目にある蓮花紋の浮彫、相輪の請花の部分、初重內部須彌壇格狹間等の形式は、創意に成ると云へば創意であるが、その中には、朝鮮の、支那の、印度の遠い時代に遡る或る種の要素が吸收せられてゐる。初重四方8枚の扉が押し開かれたときに見た、あの森嚴莊重極まる二王諸天部の生氣躍動する蔭には、これを彫刻した人の精靈が捧げられてゐるのであるが、その彫刻手法には遠くエヂプトの技法が掬まれてゐる。更に此の塔を遠く望み、又近く仰ぐとき、自分は何處となくネパールのかほりを微かに感ずる。何故だかこれは判らない。

棰先の裝飾、水煙の唐草、勾欄、斗栱、須彌壇裝飾文樣何れにしても、創意と云へば皆創意であり、何時代と云へば皆何時代と云へるであらう。併しそれ等の箇々の形、箇々の意匠の何であるかを問はず、この寶塔全體が1箇の創作であることを強調したい。綜合的意圖を持たずに、寄せ集めた樣式細部手法や、創意の片々を混合して築いた建築は、如何にそれが立派に見えても、我々はこれに優れた建築的價値を認めることは出來ぬ。本塔に於て、構造として裝飾として織り出された建築要素は、數百數千の樣相をもつて表現されつゝ、相互に深い關聯と調和を保ち、全體として貫く一軸の下に、整然たる建築美を展開してゐる。

今の日本の時代は、飛鳥時代、奈良時代、平安時代とは異り、もはや法隆寺や藥師寺や東大寺や平等院に造營せられた樣な、深い信仰と熱情とを以てする國家的美術建築は出來難い時代である。如何に優秀な建築家でも、その人の意志の自由に行はれ得る範圍は甚だ限られ、最高責任者が、建築細部や裝飾の隅々まで、自ら筆をとり、鑿をとつて實地に指導するといふことは、甚だ困難といふよりはむしろ不可能に近いであらう。これを成し遂げることに依つて本塔は出來た。この意味で四天王寺五重塔は、今の日本文化の築いたところの世紀の記念建築として永久に傳へられるものであらう。

四天王寺再建五重塔について

吉村孝義

まへがき

昨年本誌5月號に「四天王寺五重塔に就いて」といふ表題の下に、主として過去の塔婆を中心に拙筆を弄した事があり、今回四天王寺特輯號を發刊されるに當り、當の天沼先生が御執筆になる由を承はり、更にその上私如きが「又何をか云はんや」であるが、折角編輯のM氏より丁重な御依頼を受けた事でもあり、成るべく前記二文と重復しない範圍内に於いて、竣工寫眞の説明を主に再建五重塔の概要を述べて前文の結末をつけて置きたいと思ふ。

設計の大要

今回の復興工事が寺の直營事業として、天沼博士設計監督の下に、伽藍復興工事事務所がその實施に當つた事は既に世間周知の事であり、隨つて設計の方針も、先生の御意向を正確に伺つた上で記すべきであるが、目下その暇がない爲便宜筆者の愚見による事にした。萬一先生の御意志に添はぬ點ありとすれば、一に筆者の不敏の致す處と豫め御詫び申上げて置きたい。

扨設計の大要として、その方針特徴といつた様な事項を列記して見様う。

1. 伽藍内建物の調和統一を計り、文様裝飾等も努めて相互關聯統一あるものを用ふる事

2. 四天王寺は塔中心の伽藍配置を有し、塔は尤も重要な建築なれば、その外觀裝飾共荘重端正美麗なるものたらしめる事。

3. 特にその外觀は安定感をもつた古式の表現に努める事。

4. 文化再建塔が暴風雨で倒壊したのに鑑み、構造的にも充分堅固なものたらしめる事。

5. 塔の生命たる相輪は立派なものとし、その長さと塔身との釣合に重きをおく事。

6. 基壇・須彌壇・相輪・裝飾等其他隨處に獨特の意匠を用ひ、徒らに他の古塔を模さぬ事。

7. 舍利は丁重に安置し、塔下發掘の主要な舊遺構は存保に努める事。

大體以上の様な事で、その**第1項**に關しては、今度復興工事の目的が伽藍内の金堂（大修理）中門・五重塔（再建）に限られて居た爲（中門に接した南側廻廊の修理再建も含む）、附近に現存する講堂、西重門、廻廊（大部分）といつた江戸時代の諸建築を全く無視して復興計畫をたてるわけにはゆかなかつた。併しこれ等舊建物としつくり調和する爲には、矢張り江戸時代の様式を以て再現せねばならず、そんなつまらない眞似の出來ない事は自明の理であるとして、されば一部の人々の主張した如き（主として建築家でない素人）飛鳥式には、幾多無理と困難があつて實現不可能な事であるし、この點設計者たる天沼博士は愼重熟慮された上、結局昭和の復古建築として奈良式を主に、細部は飛鳥より鎌倉時代頃迄の様式を然るべく取入れる事に方針を決められたのであつた。併し乍ら、出來るだけ伽藍内の調和統一は計る様に中門五重塔は同一形式手法により、又修理の金堂や廻廊にそれ等の手法を混じて江戸様式との聯關を保たせる事にしたのである。これ等の主な點をわかり易く列記してみれば、

1,	銅瓦・鬼板・風鐸	金堂・五重塔・中門共通
2,	軒瓦文様	金堂・五重塔・中門・廻廊の一部（南廻廊）共通
3,	鴟　尾	金堂・中門　共通
4,	六様形式	金堂・中門・五重塔共通
5,	直線式折上天井	金堂・中門・五重塔略同形式
6,	勾欄・斗栱等	中門・五重塔略同形式
7,	廻　廊	新舊同規模なれども虹梁上構架・連子窓等細部を古式に直し中門・塔等との調和を計れり
8,	其他金具類	中門・五重塔略同形式

の如くであつて、伽藍内の調和を計ると共に一方五重塔自體としても、その意匠模様の關聯統一に深甚の注意を拂つてある事は、天沼博士も强調し

★ 筆者は滿洲國立大學教授（五重塔建設當時四天王寺建築技師）

て居られる處である。その一端を示せば、

イ。單辨蓮花文

鑄瓦の瓦當に用ひたものを二重基壇の羽目石彫刻・初重扉の引手及海老錠の座金・三具足の脚部等にも應用した。

又別種のものを風鐸吊金具の座金・三具足の上部・須彌壇下蓮辨彫刻・寶珠や龍車の蓮辨・九輪の透し（輪廓のみ）等に、更に覆鉢の表面にも單辨蓮花文を用ひた。

ロ。忍冬文

海老錠の表面と香爐の蓋の透しに用ひたのが同種類のもの、他に海老錠の角・須彌壇格狹間飾り・三具足の取手・請花や水煙の透模様等にも忍冬を用ひ、又これの便化したと思はれるものを棰、尾棰、隅木等の端飾りの文様に使つてみた。

ハ。初層內部裝飾

線條文・連珠文・蓮花寶相華唐草等の文様を何れも繧繝彩色によつて畫いた（連珠文は白一色）

の様な事が擧げられるが、これ等は皆建築事務所關係のもので、他に初層內部佛畫・四天王彫刻・四面器・華鬘・幡等は夫々斯界の大家の作になるもので別個に考慮された事は云ふ迄もない。

次に**第2項**に就いては、先づ基壇を高くして（二重基壇）塔中心、塔尊重の念を强調し、他面徒らに彫刻・彩色を用ひて華美に陷す事無き様、木割の太い材と丹・綠青・黃土・白の如き古來慣用せる單純な色彩を以て莊重な外觀の表現に努め、裝飾としては、金色の相輪・風鐸・擬寶珠・扉其他に用ひし金銅金具・初層內部極彩色・扉繪彫刻・須彌壇等を以てし全體の莊嚴に努めた。

第3項に就いては、倒壞せる舊塔の如き不安定極まる外觀は一蹴し、古來我國に發達せる塔婆形式によつて安定な形となし、奈良時代を中心に前述の如く飛鳥より鎌倉に至る時代の細部を適宜採用して、徒らに重厚に陷さず、輕佻に流れぬ様、純和様の穩健な風格の表現に努めた。

第4項に就いては、木造層塔として耐震、耐風耐久といつた點に就き充分の安全感を保たせるべく、舊塔の缺點は出來るだけ之を補正して、構造的にも昭和の建築らしき新鮮味を加へた。その主な點を述べれば、總て用材（野物・化粧材を問はず）は內地產の檜（大部分營林署より特賣を受け、初層柱・扉板・其他化粧良材は帝室林野局より尾州材の拂下を受けた）に一定して他材は用ひず、（勾欄組子を一枚板で刳抜きその堅固を期す爲と各層大斗のみは欅材とした）且構造材は成るべく太く大きなものを用ひ、材自體を傷めぬ様に心掛けた。例へば前方へ出る肘木を二方（東西とか南北の如き）1本で通したり、頭貫を蟻落しにして柱の缺取りを少くしたり、棰等も大材を用ひて奥迄通し、或ひは野物も桔木を除きすべて角材を用ふる等、從來の塔に比し構造材の材積は非常に大量を要した。又金物もボールト・釘其他適當に用ひたけれども、これ等は組立の便宜上と補助的な補强の意味で、主構造物は全部木自體の組合せにより堅固を期してある。（數百千年の壽命を保たせる場合、木造建築に於いては鐵金物に期待する事が出來ない。この事は高溫多濕の我國に於いて殊に顯著な事實である。）又構造的に木造堂宇の缺點の一たる土瓦に代つて銅瓦葺を採用したり、ボーリングによつて堅固な地盤を確め、地下約8尺の處より鐵筋コンクーリトの頑丈な基礎工事を施す等、或ひは構造的に無理のない（木造高層建築の重量による「締り」と木材の收縮と云ふ點等より）擦懸垂式を採用した事共、皆構造の强固を計つた結果に他ならない。

第5項に就いては、相輪が塔の形式上の生命であり、最重要部分である處から、その意匠には特別の注意を拂ひ、その大きさに於いても、從來兎角時代の下るにつれて、相輪の長さが短くなる傾向（塔身長に對して）があつたのに鑑み、古式に倣つて相當長大なものとし、塔身との釣合を適當ならしめ、全體の形態美の醸成に努めた。因みに相輪／塔身＝1/2.45であり、相輪の長は40尺である。

第6項に就いては、昭和の再建といふ見地から相當新機軸を出す様、構造外觀共その細部の手法表現には深甚の注意を拂ひ、舍利容器を始め、基壇羽目石彫刻・須彌壇格狹間・3具足・初重內部極彩色模様・相輪の意匠等、天沼博士獨特の創意に出た處が少くないのである。其他細部の比例に於いても從來の古塔を模する事なく、様式の混用を認めたのも、要は昭和再建の意義あらしめたい

趣旨に他ならぬのである。

第7項に就いては、塔婆本來の信仰中心が舍利にある事は今更多言を俟たず、而して四天王寺の場合、塔を一名六道利救塔と稱し、聖德太子御親ら六粒の舍利を納められたと傳へられ、舊塔下よりも丁重に奉安された舍利が發見されたのである。そこで今回も新らしく金銅の舍利容器を設計し、水晶・銀・玻璃（硝子）の容器と併用して、恭しく擦礎中央四所に納入したのである。尙塔下發掘によつて種々發見された遺構中、尤も重要な舊擦礎下出現の數々は、幸ひ創建當初と思はれる擦礎が確認されたので、これを中心にその周6尺角（內法）のコンクーリト地下室の如きものをその上に作り、この處に淨砂を以て元通り納め、（これ等遺構の他新らしく1字1石寫經石、百萬靈講銅塔婆等も納めた）丁重に保存を期したのである。この地下室は建物の基礎工事と密接な關係にありこれが實施には相當苦勞したのであつた。

大體以上7項目に分けて述べた様な意向の許に五重塔工事が進められたのである。

五重塔の規模

倒壞せる舊塔下發掘實測の結果、塔はこれ迄數回の罹災を經て居るものの、廻廊內に於ける當初の位置は少しも移動して居ない事を知り得たけれども、その規模に就いては精確な根據を得る事が出來なかつた。そこで一番無難な方法として初層平面の大きさは舊塔通り、その1邊を柱眞々で24尺5寸と決め（舊塔趾實測並びに江戸時代の記錄による京間3間5尺＝24.5尺を採用した）柱間の割付や上層平面並びに立面計畫は適當に設計したのである。今數字によつてその概要を示せば次の如くである。

總高		144'8	（避雷針突針を除く）
內譯	相輪	40.0	（露盤下より寶珠頂迄）
	塔身	97.7	（石口より露盤下迄）
	基壇	7.1	（地盤面より地覆石口迄）
	上壇	6.7……	地盤面より葛石上端迄
	下壇	2.5……	地盤面より葛石上端迄

平面			
基壇	上壇邊	46.0	（葛石上端外法）
	下壇邊	56.0	（〃）

	中の間	脇の間	一邊長
初層	9.0	7.75	24.5
二層	7.8	6.6	21.0
三層	7.2	5.9	19.0
四層	6.6	5.2	17.0
五層	6.0	4.5	15.0

この中總高に於いて舊塔（約158尺）より13尺許り低くなつて居る事實が、まるで塔の値打を低下さしたかの如く思はれ勝であるが（主として素人間に於いて）、これは申す迄もなく前の塔が必要以上に高過ぎた爲であつて、初層平面に比し塔身が矢鱈に高い事は、構造的に不安定な許りでなく見た形も頗る感心出來ない事は自明の理であらう。殊に今度は基壇を二重にしてその高を益し（舊塔は一重で高約3尺）、又相輪も2尺許り（舊相輪は長約38尺）長くしてあるから、これ等を勘定に入れると、舊塔はその塔身に於いて約20尺近く伸び過ぎて居た事がわかるであらう。又二重基壇を採用したのは、單に高くして立派に見せる爲のみではなく、塔婆尊崇の意味をもち、古式尊重にもなり（現存五重塔では法隆寺のみ二重基壇制をとる）、更に木造建築として耐久性をもたす利點（地盤より遠ざかる爲に濕氣が少くなる關係で白蟻其他による腐蝕を防ぐに役立つ）も考慮した結果である。

尙塔婆に於いては、初層のみ堂宇として用ひる爲、その內部を立派に裝飾するのが常であるが、二層以上は單に外觀を整へるだけで、內部は構造部分と考へられるから、初層とは全く違つた意味をもつものと云はれよう。隨つてその設計に當つても初層と二層以上とではその取扱ひに大分の相違が生じるわけであつて、例へば平面の遞減率にしても、初層と二層との間で特に大きくした如き又柱・大斗・枓栱の類を凡そ三種類に別け初層は特に大規模なものを用ひ、2•3層、4•5層と規模の小なる2組を計畫した如き、この意味に他ならぬのである。但し上に行くにつれての極端な減少感を起させぬ爲と全體の統一を考慮して椎（地椎飛簷椎共）は各層同部同一規模とし、勾欄は初層と2層以上と2つに別けて細かい區別はしなかつ

たのである。

かくて今回再建の塔は、その高さが多少舊塔より減じたけれども、我國に於ける現存五重塔中では第3位に位する規模を有し、頗る大きな塔婆に屬する事には變りないのであつて、木造層塔中の大建築と稱して少しも差支へないのである。

工事經過

四天王復興工事の眼目として、金堂大修理、中門再建に引續き、最後に塔婆の再建に掛り、今春竣工の運びに立至つたのであるが、その間の主な出來事を擧げれば次の如くである。

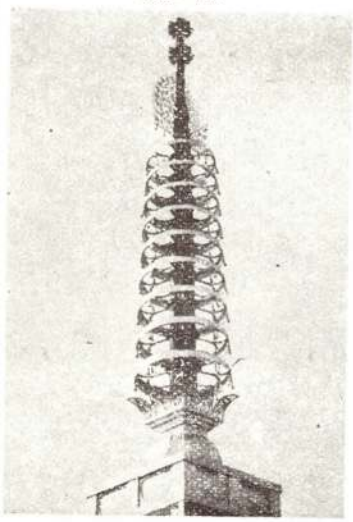
昭和11	10	13	地鎭大法會修行
〃	12	4—22	釿始式擧行
〃	13	5—22	立柱式擧行（佛舍利納入）
〃	13	9— 6	第二層立柱
〃	13	11—24	第三層立柱
〃	14	4—28	第四層立柱
〃	14	7—26	第五層立柱
〃	14	12—22	露盤据付
〃	15	2—22	相輪全部組立了
〃	15	4—15	足場取外了
〃	15	5—(22/26)	落慶大法會嚴修

この經過を見るに、頗る順調に工事が、進捗した如く思はれるのであるが、事實はなかなかさう簡單には行かず、相當難關に遭著したのであつた。例へば再建問題が具體化すると同時に「木造か鐵筋か」といふ根本的な難問が持上つて、約半歲に渡つて世間の視聽を集め、これがどうにか寺側の希望通り木造再建に決定して、愈工事に着手すると、間もなく支那事變勃發し、次々に諸統制の强化につれ、塔工事にも影響して銅瓦・相輪等の使用が問題になつて來た。併しこれも支障なく使へる事になつてどんどん工事が進捗して居た處、最後に避雷針の設計の設置方法に就き、議論が沸騰して容易に決定に至らず、又表面に現はれなかつた相輪の金箔使用問題等もあつて、內輪はなかなか大變であつた。併し遂に寺側の眞摯な熱意が認められて、大體希望通り解決して、避雷針も取付き、金色の相輪も擧り、ここに寶塔本來の尊嚴を保ち得たのであつた。然し乍ら初層內部の極彩色に於いては一切金を使用せず、又棰・尾棰・隅木等の端飾りとして、金銅の透金具を取付け、る豫定は、代用品たる陶器製に變更する等、時局の影響は少からず、殊に費用の點に於いては、自發的勸募の中止や物價高工賃の値上り等によつて寄附金の豫定額減少や豫算超過を來し、寺院當局の苦心は並々ならぬものがあつた樣である。かくて非常時寶塔建立の苦勞は各方面に及んだのであつた。

結　　尾

今回の四天王寺復興工事は、その豫算（100萬圓）規模よりみれば決して大とは云はれないし木造工事としても左程大きなものではない。併し乍ら四天王寺の由緒並びにその寶塔の意義を考へて見れば、誠に千載一遇の大事業であつた。殊に創建當初　聖德太子が非常難局の御時勢にあつて、護國の寶塔として御建立になつた事を思ひ、今日偶々未曾有の大非常時局に當り、再び護國の寶塔（擦の周に日支事變戰沒將士の英靈名を記し、菩提を弔ふと共に、文字通り護國寶塔の意義をもたせた）として、社會的信仰を集め、これを再建するに至つた事を考へる時、一層の重大性を加へたのであつた。幸ひ幾多難關にぶつかり乍らも、よく世間百萬の合力により、官民兩方面の絶大なる御後援を得て、茅出度く落慶の運びに立至つた事は、寺院當局は固より、大大阪にとり、ひいては邦家としても誠に慶賀に絶えない處であらう。陰に陽に幾多御支援を賜つた各方面の方々に萬腔の謝意を表すると共に、寶塔建築に一異彩を添へる大扉彫刻を完成され乍ら晴の落慶式を俟たず、卒然として他界された明珍恒男先生の靈に對し衷心より哀悼の意を表し、永遠の御冥福を祈つて止まない次第である。

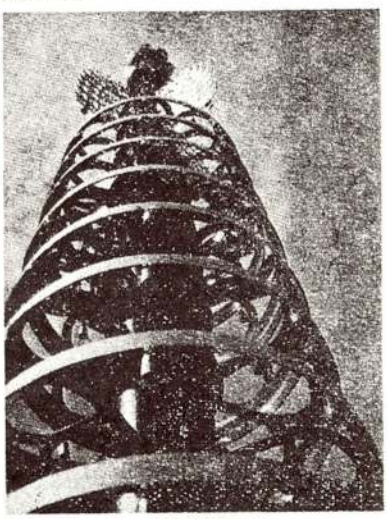
（第1圖）



次に四天王寺關係寫眞を一括して簡單に說明する事にする。第1圖相輪全景東南隅より望ん

だ處。中心の擦のみは色付で青黒い外觀をして居るが、露盤・覆鉢・請花・九輪・水煙・龍車・寶珠等總て金箔押しである。相輪は塔の尤も肝要な部分であるから、それを鍍金する事は莊嚴の意味に他ならず、往昔は何れもさうするのが原則であつたし、今日でもネパール國の塔は左樣であると伺つて居る。されば金色の相輪は古式に復した迄で、贅澤でもなければ、今回の創案でもないのである。但し各部の意匠には相當苦心が拂はれて居る事は本文で述べた通りである。この相輪の長さ40尺、九輪だけの長さ17尺、九輪の第一輪の直經5.8尺、第九輪の直經5.0尺、露盤の一邊7.76尺である。

第2圖　相輪見上げ



（第2圖）

九輪の周には8個づつの風鈴を下げ各輪の上面はY字型の繋ぎによつて單瓣蓮花文を透しで現はして居る。

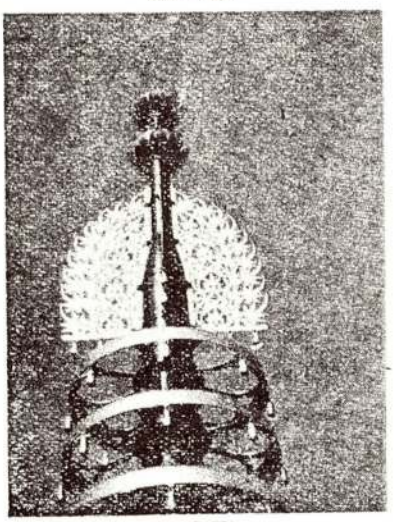
第3圖　相輪上部

寶珠・龍車には八葉の單瓣蓮花が付き、水煙の意匠は忍冬文である。水煙の高7尺その巾2枚組立てて6尺である。

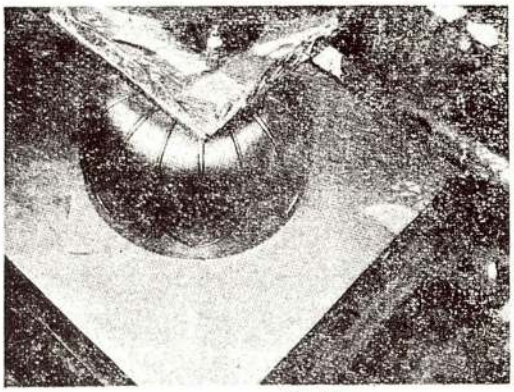
第4圖　相輪下部

第5圖覆鉢・平頭請花

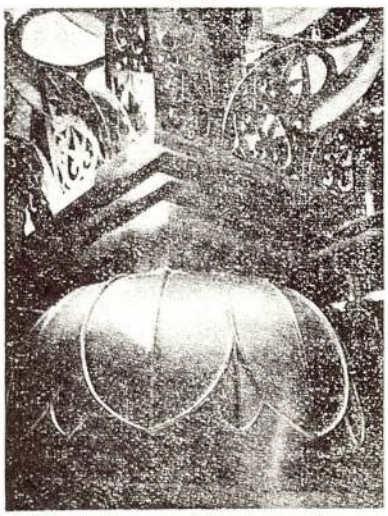
第4・5兩圖で覆鉢表面蓮花文や、平頭の形、請花の忍冬文等の模樣がわかる。



（第3圖）



（第4圖）



（第5圖）

第6圖　塔震動調査の那須博士一行

3月初旬塔の主要部分が完成した頃、東大地震研究所より那須博士、荻原理學士等一行4人塔の震動調査に來場され、連續五百間に渡つて詳細塔の震動測定を實施された。その結果從來その比を見ない程堅固な構造で、普通の風位では塔は微動もせず、擦中心柱は塔の主構造には無關係な事が實證され、平素我々の考へて居た事が明かに

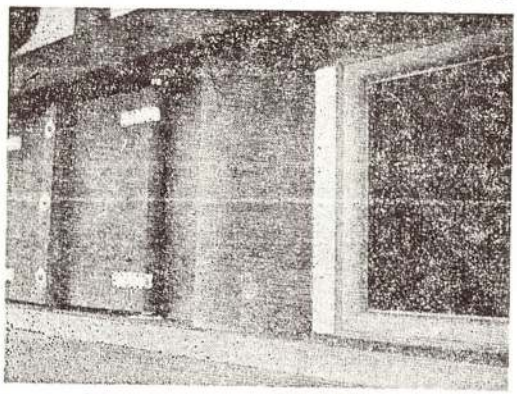


（第6圖）

なり、關係者一同を喜ばしたのであつた。寫眞は荷造りの出來た機械類と共に引上直前の記念撮影で、中央が那須博士、その右後ろが荻原氏である。研究所御一行の御厚意に對し紙上厚く御禮を申上げて置きたい。

第7圖　第二層軸部

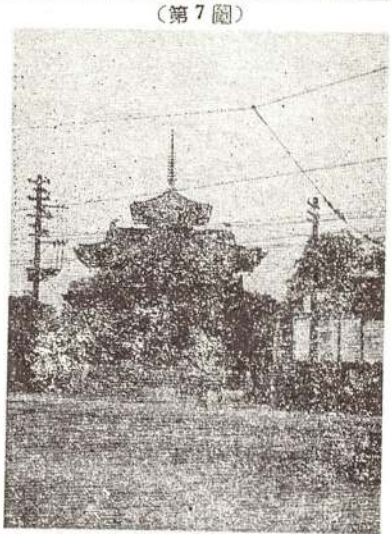
板扉には金銅の八双・四葉金具がつき、窓の連子は荒く、その隙間よりは空氣が流通出來る樣にしてある。



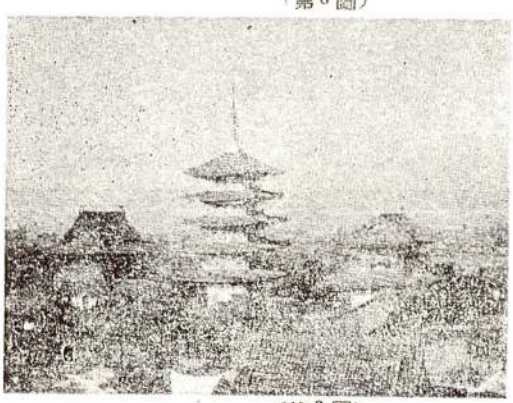
（第7圖）

第8圖　塔婆遠望

南方境內外より見た寫眞で南北一直線上に主要堂宇の並ぶ四天王寺式伽藍配置の一端を窺ふ事が出來る。



（第8圖）



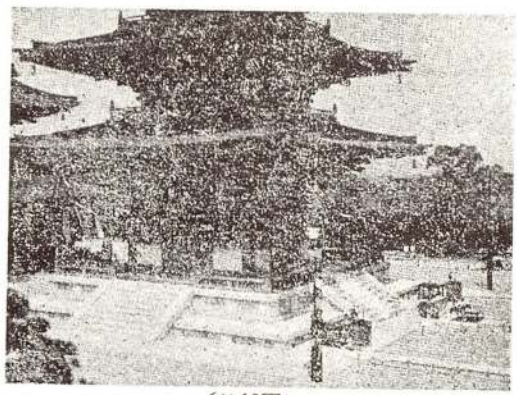
（第9圖）

第9圖　伽藍全景

左より金堂・塔婆・中門と並び、塔婆中心の伽藍配置を示して居る。

第10圖　五重塔基部

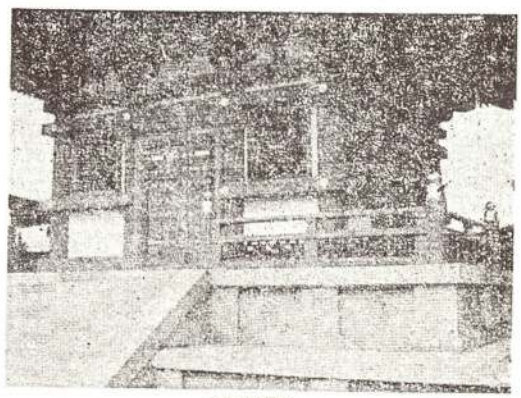
主として二重基壇の模樣を示す爲で、5月22日の撮影なので落慶式の飾付が見られる。基壇四方に（二方しか見えないが）巾廣の階段がつき、壇上には擬寶珠勾欄が廻つて居る。



（第10圖）

第11圖　基壇及び初層軸部

基壇と初層との關係がよくわかる。



（第11圖）

第12圖　基壇隅詳細

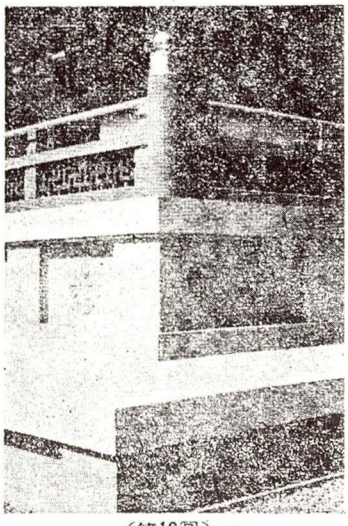
二重基壇及び勾欄の詳細を示す爲で、蕨花文彫刻の直徑は2尺で基壇高（地上より二重目葛石上端迄）6•7尺である。

第13圖　初層隅見上げ

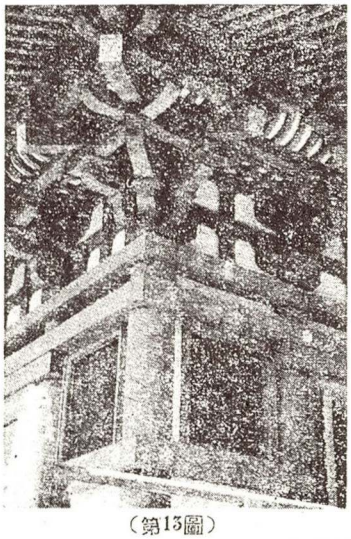
三手先供供で平安期以前の樣式をもち、棰・尾棰等の端には黄色陶器製の端飾りがついて居る。勾欄の擬寶珠や長押の六葉は何れも金銅製である

第14圖　初層扉

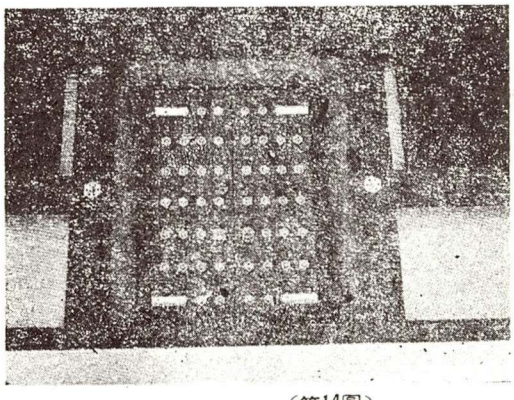
初層扉板8枚は何れも檜の1枚板でその大きさは長8.17尺（軸廻しの突起を除く）巾2.75尺厚0.35尺あり帝室林野局營林署よりの特賣材で漸くとれたものである。裏面に7列4行づつ金銅の6葉乳金物と上下に8双を打つた。尙東西兩側の扉には鎧瓦と同樣形式の座をもつた取手を1個づつ取付け（南北兩側にはこの代り海老錠が用ひてある）上部蕖座は幣軸の曲線



（第12圖）



（第13圖）



（第14圖）

部へ造り出しの4葉形式を採用した。

第15圖　仁王扉彫刻

現場へ取付前撮影したもので、南正面へ嵌まる二面である。初層扉8枚は奈良美術院長たりし故明珍恒男氏に依囑し肉合彫と稱する方法で佛像を彫刻し極彩色を施したのであつて、かかる式の扉彫刻は我國には未曾有であり、今回の塔に一異彩を添へたものである。

第16圖　東側扉一面

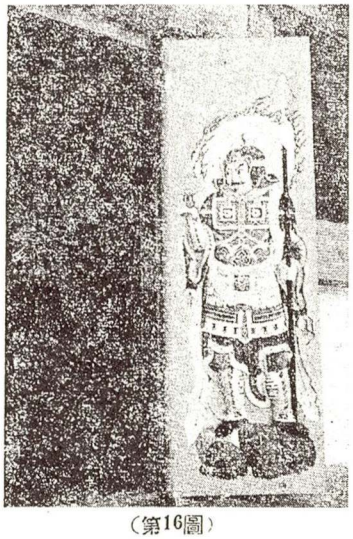
取付後の初層扉を開いた處でこれは東側の一面（東西兩側の4枚には四天王像を一軀づつ彫つた）多聞天像である。短かい8双や上下の蕖座もこの寫眞で明瞭である。



（第15圖）

第17圖　北側扉內部

梵天帝釋の二天像であるが扉を締めて中から見ると二像が互に外を向くので一小變である。（開いて外から見るべきだから）傍の側柱・長押・幣軸等極彩色の模樣もわかる。



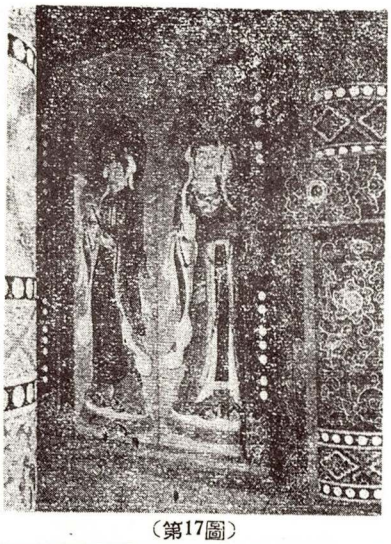
（第16圖）

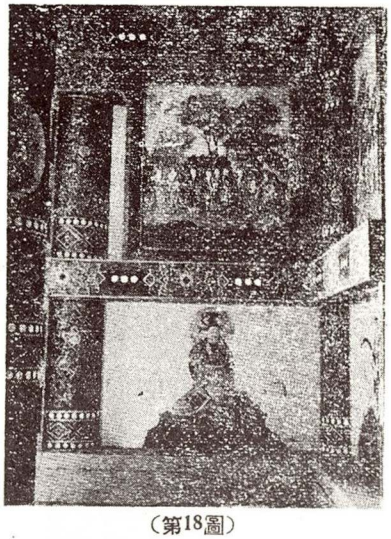
第18圖　初層內部の1

南側の西端の間を內部より望んだ寫眞で、壁と下の地長押を除き、他の木部には全部極彩色を施こし、四天柱（1本に3體づつ合計12天像）の1部と四方の隅壁面上下に佛畫を畫いたのである。この圖で上の額緣入りの分は南方釋伽淨土畫の半面であり、下には八部衆中の龍を、又柱には水天が圓形輪廓內に畫かれてある。

第19圖　初層內部の2

南方正面内陣を見た寫眞で、擦の四方を板（檜の1枚板で大きさ約11尺×3尺×0.13尺）で圍み、これに四方四佛を畵いた中の南方釋伽三尊像が見られる。前記外陣の壁畵・四天柱十二天像と共に佛畵は總て堂本印象氏の作になるものである。又須彌壇上に四天王像の中の二體が置かれてあるが、これ等は新納忠之介氏の作である。尙下方の三具足並びに佛畵佛像以外の極彩色は總て建築事務所の監督設計になる事は云ふ迄もない。

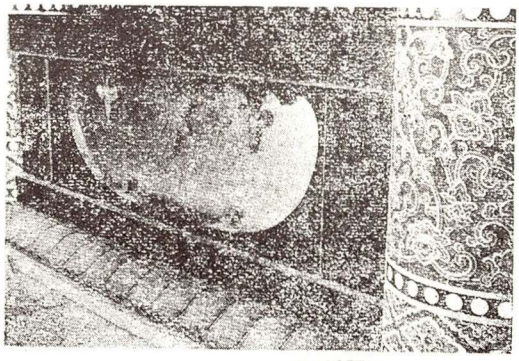

（第17圖）


（第18圖）


（第19圖）

第20圖　須彌壇

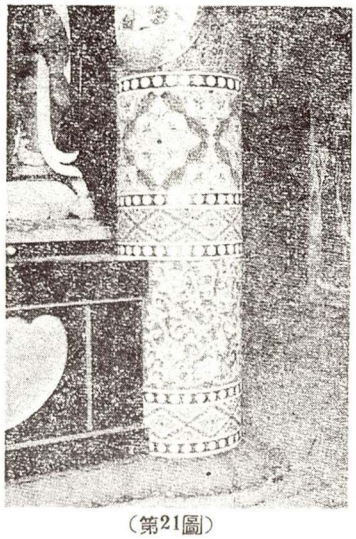
須彌壇は四天柱の間に取付け、黑漆、面朱仕上げで、格狹間の底面は漆箔、忍冬文の表面は綠青、側面は朱漆になつて居る。格狹間の模樣は今回の創案であり、須彌壇の下部には單瓣


（第20圖）

の蓮瓣彫刻（表面綠青、側面朱）が四方を向つて居る。

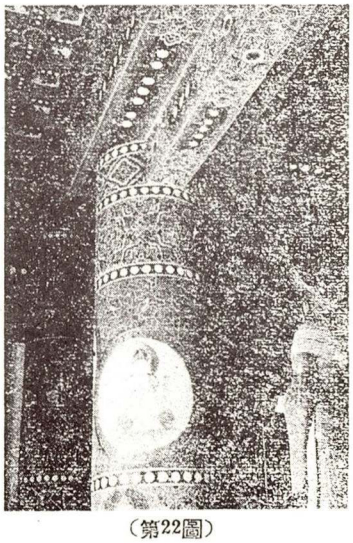
第12圖　四天柱下部

東北隅の1本を撮したもので四天柱下部の極彩色模樣や須彌壇の取付工合や又下の蓮座が四天柱の下部迄及んで居る狀態等がみられる。


（第21圖）

第22圖　四天柱上部

西北隅のもので、圓形內の佛像は地天である。柱と共に上部楣、長押等の極彩色文樣の大體を知る事が出來る。


（第22圖）

第23圖　外陣天井見上げ

組入天井で、その辻に落肉中

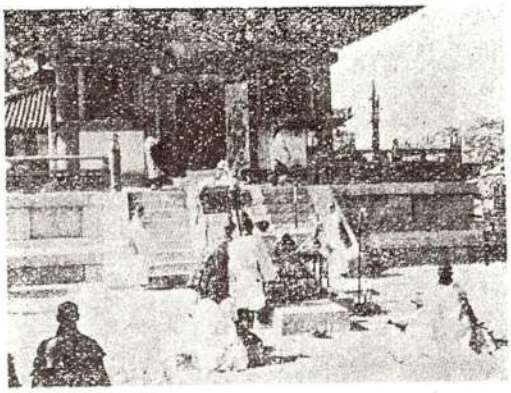
高の四葉飾りを付け裝飾と實用（組子の隙間を防ぐ）を兼ねしめた。格間は四區一花式の蓮花寶相華唐草模様の極彩色を施してある。



（第23圖）

第24圖　落慶法要の1

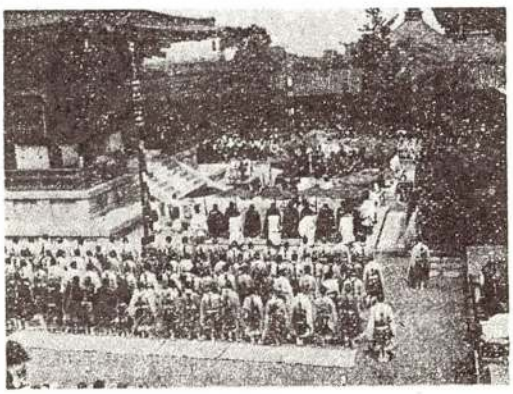
5月22日第一日の狀況で、寶塔入佛開眼大供養會が嚴修された。



（第24圖）

第25圖　落慶法要の2

第二日目鎭護國家大祈願會が修行された狀況で數百の山伏が參列して居る。かくて第三日の中日を經て第五日の結願に至る迄、連日盛大な落慶大法會の數々が嚴修され、數千數百の參會者をして法悅の極樂境に隨喜せしめた事は、神佛の加護もさる事乍ら、一に聖恩の有難さと感泣せざるを得ない。



（第25圖）

昭和十五年初版

昭和十五年七月中旬發行

木綴・菊裁判

建築關係法規抄纂

日本建築協會版

☆定價未定

日本建築協會發行

大阪市北區朝日ビル4階

振替口座大阪39975

賣捌

丸善本支店

柳々堂書店

訪歐の會長より會員諸君へ！



5月26日の葉書



5月19日の葉書



4月24日の葉書

6月17日協會受付短信3つ：——

5月26日

ローマにて　　片岡　安

去ル十九日上陸以來國賓ノ待遇ヲ受ケ多忙ト嚴
肅ニ緊張シテ居リマス
遙カニ皆サンノ御健康ヲオ祈リシマス

5月19日

（ナポリ・グランドホテルにて）

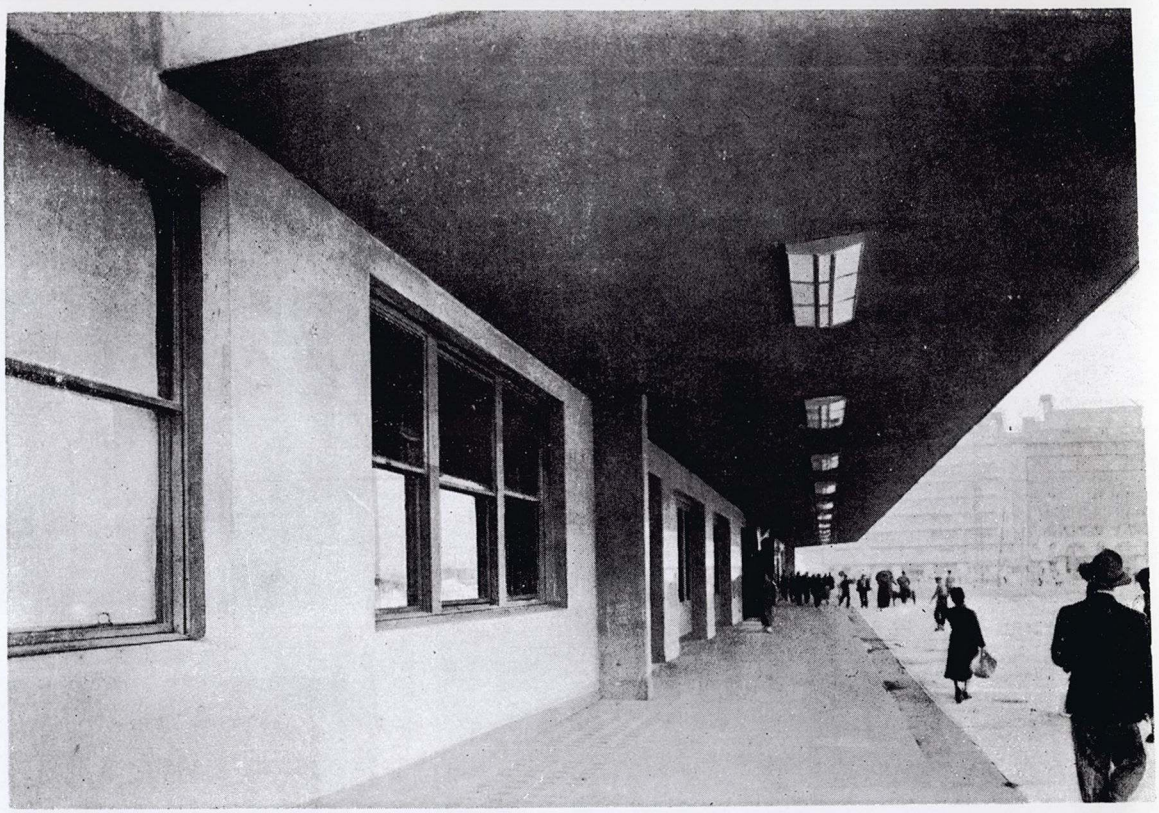
片岡　安

日本建築協會役員諸賢
イヨイヨ本日ヨリ國賓待遇ヲ受ケ伊太利各地ヲ
巡遊スルコトヽナリマシタ
遙カニ御一同ノ御健勝ヲ祈ル

4月24日

渡歐中本日シンガポールニ寄港シマシタ熱帶建
築ノ集團ガ相當ニ美シサヲ見セテ居マス

片岡　安



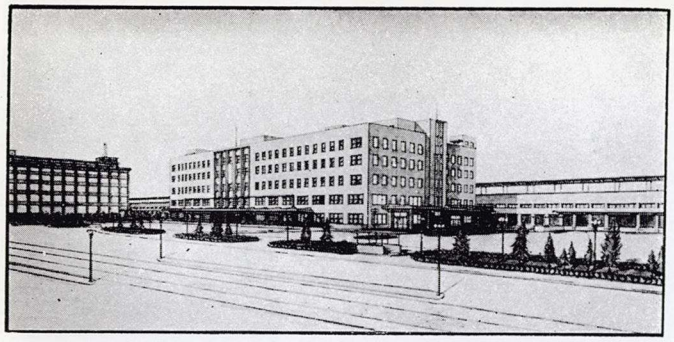
驛車寄せ



出札廣間及中央「コンコース」を望む

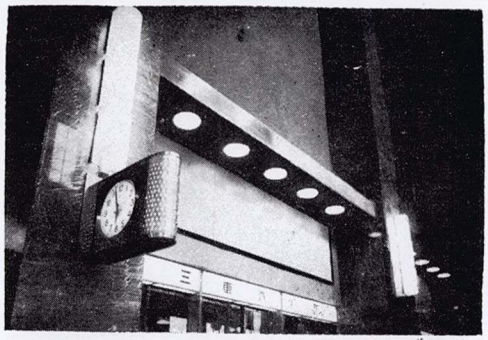
新大阪驛

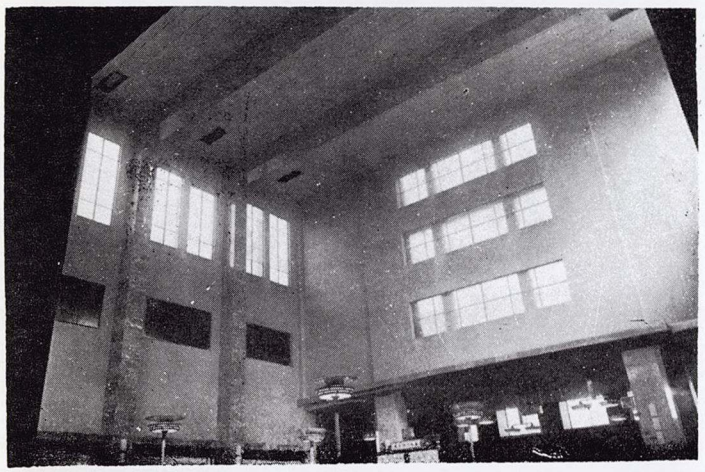
設計 鐵道省
施工 大林組



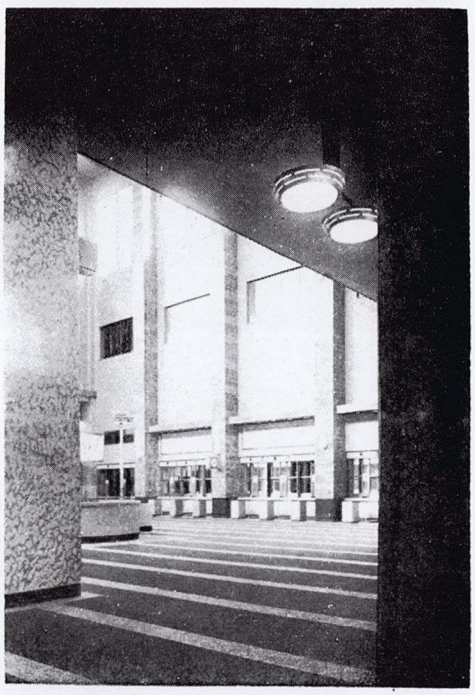
大 阪 驛 姿 圖

出札廣間 1 部壁面

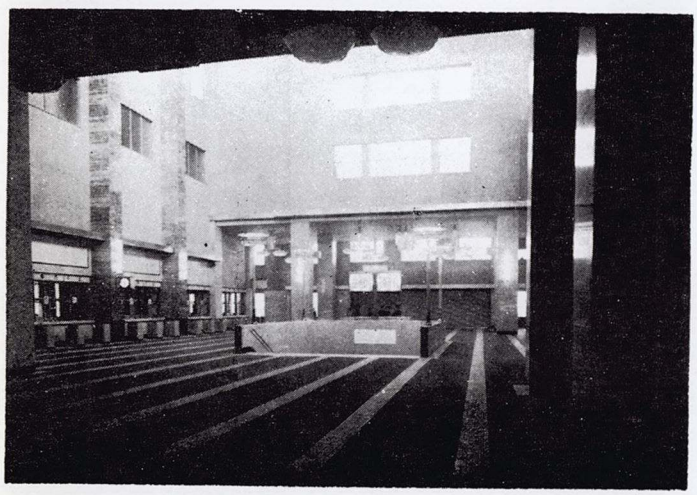




出札廣間吹拔部天井廻リ



出 札 廣 間



出 札 廣 間

床　磁器タイル及アスファルト・ブロック
巾木　花崗石
腰　花崗石及大理石
壁　ペイント・ステップル仕上
天井　纖維板ペイント塗及纖維板裏冷紗貼りペイント仕上

設計　鐵道省
施工　大林組

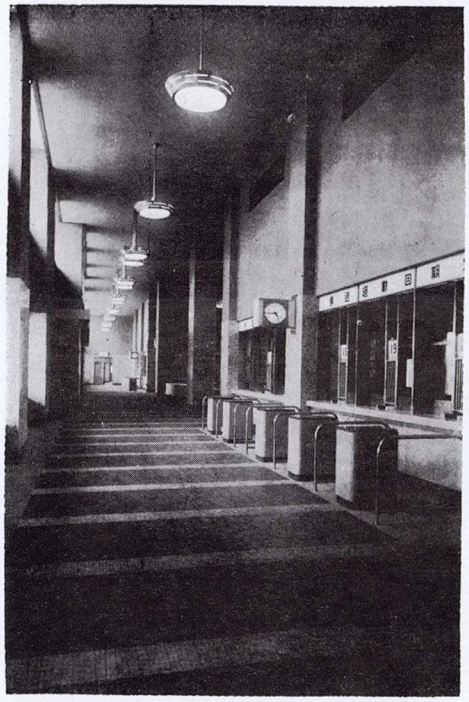
出札廣間中央階段

段石　花崗石
周壁　テラゾー
手摺　ステインレス・パイプ

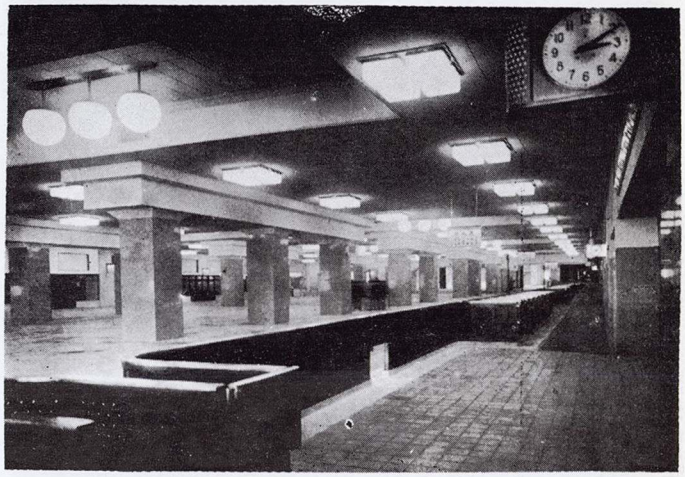


入口廣間

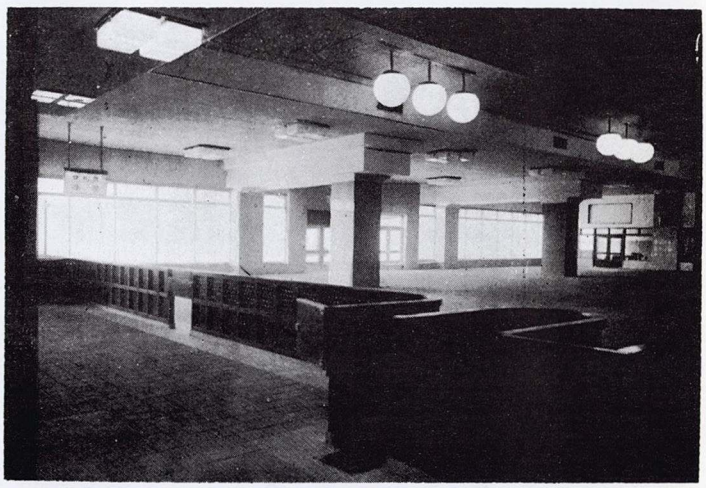
床　磁器タイル及アスファルト・ブロツ
巾木　花崗石
腰　花崗石及大理石
壁　ペイント・ステツプル仕上
天井　纖維板寒冷紗貼りペイント仕上



改集札廣間より中央コンコースを望む

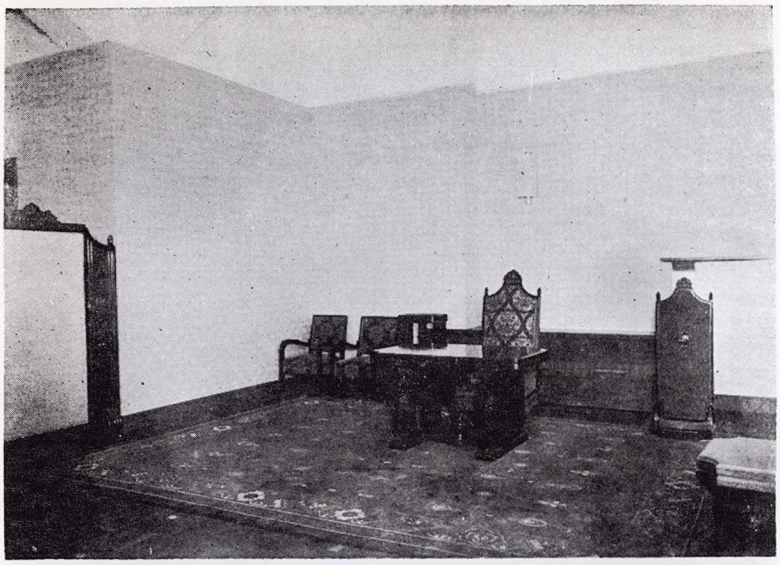


改集札柵　ボーター　人造石研出し／花崗石
軸　組　櫻ラツカー仕上
巾　木　人造石研出し
羽目板　チツソライト板（上部模様打抜）
天端金物　ステンレス・スチール
金　具　鐵製クローム鍍金
扉　チツソライト板／カバー　ステンレス・スチール



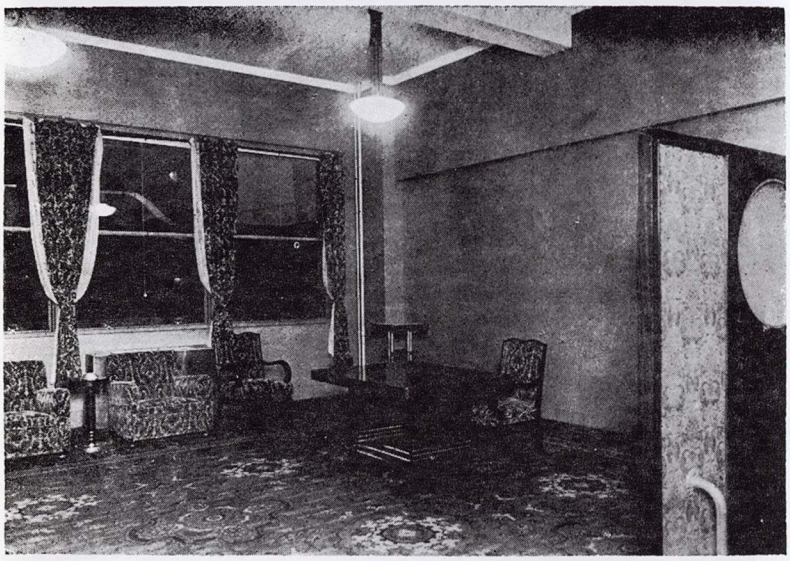
中央コンコース北出入口附近

北出入口スチール・ドアー及鐵製欄間
巾板アルマイト板
壁　硝子煉瓦積及鐵製欄間



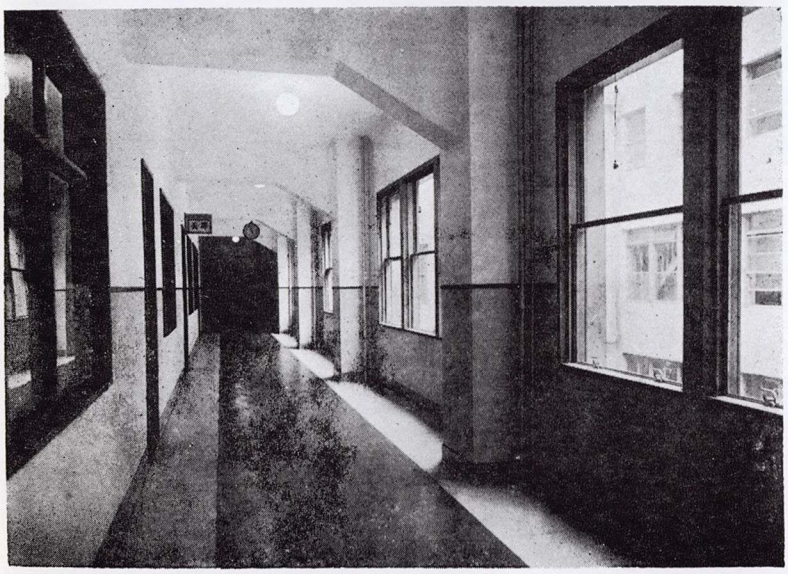
假貴賓室

床　　檜フローリング・ブロツク
巾木　杉ペイント塗
壁　　壁紙貼り
壁上部及天井　プラスター
飾り棚　ウオールナツト製



應接室兼貴賓室

床　檜フローリング・ブロツク
巾木　鹽　地
壁　壁紙貼り
天井　プラスター



驛　廊　下

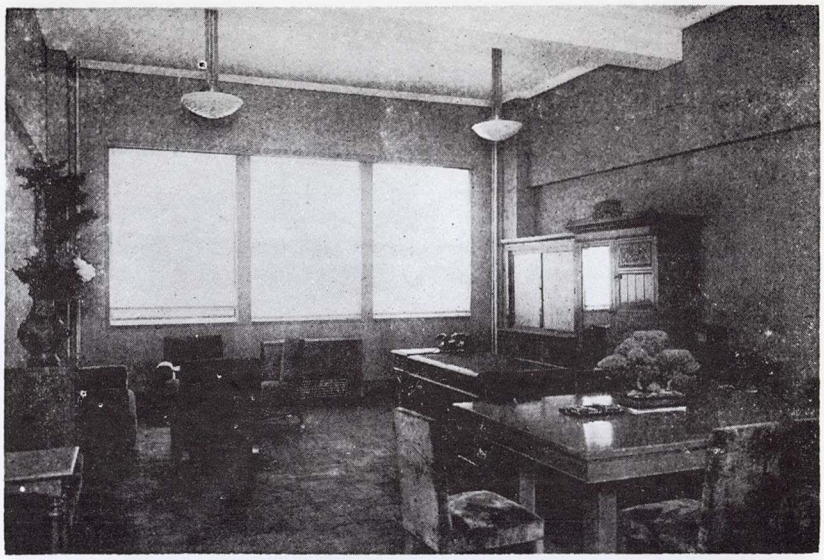
床　中央リノリューム敷　側テラゾー
巾木　テラゾー
腰　着色セメント艶出し
壁　プラスター
天井　プラスター

新大阪驛

設計　鐵道省
施工　大林組

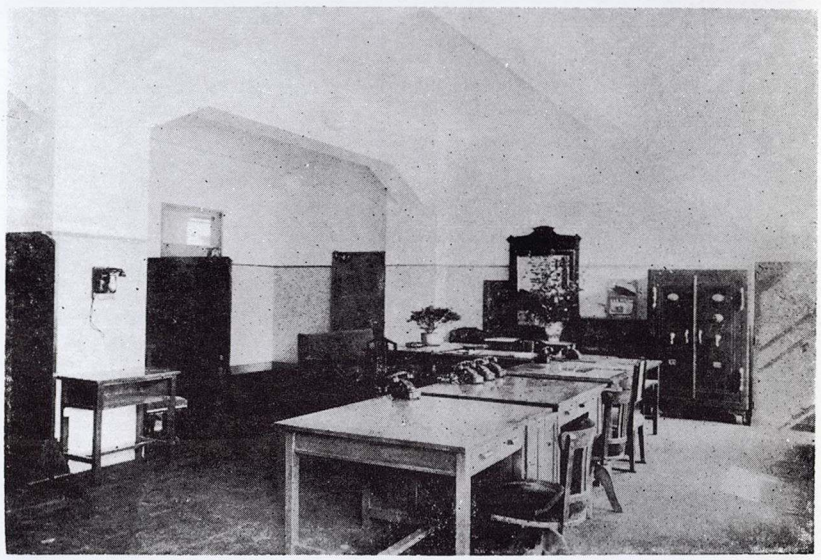
驛　長　室

床　檜フローリング・ブロツク
巾木　鐚　地
壁　壁紙貼り
天井　プラスター
外部側窓上ゲ下ゲ　スチール・サツシユ
廊下側入口窓　木製建具



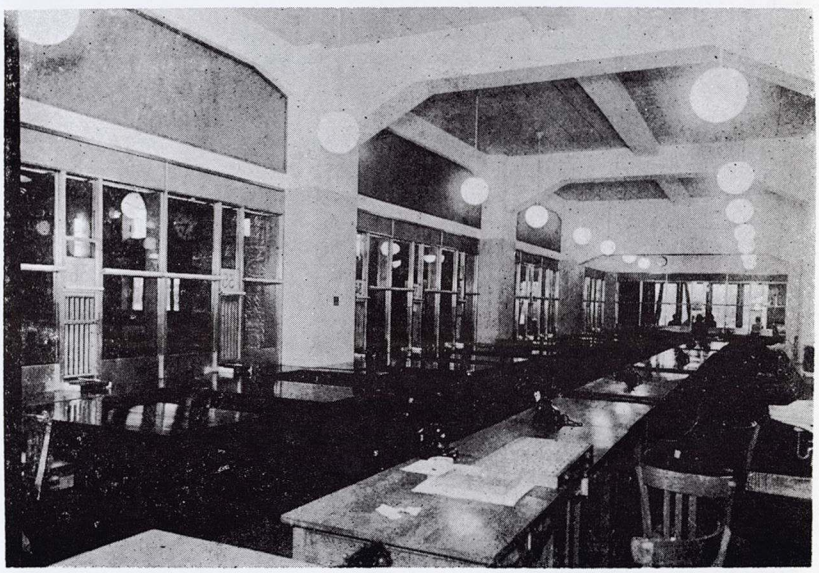
助　役　室

床　檜フローリング・ブロツク
巾木　杉ペイント塗
腰　着色セメント艶出し
壁 } プラスター
天井 }



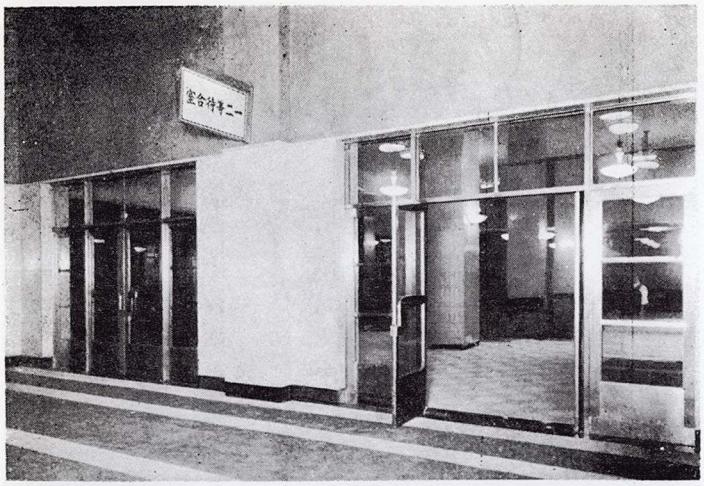
西　出　札　室

床　檜縁甲板貼り
巾木　テラゾー
腰　着色セメント艶出し
壁　プラスター
天井　纖維板ペイント塗



新　大　阪　驛

設計　鐵道省
施工　大林組





1．2等待合室内部

床　磁器タイル　　壁　ペイント・ステップル仕上
巾木　花崗石　　天井　纖維板裏冷紗貼りペイント仕上
腰　甎地



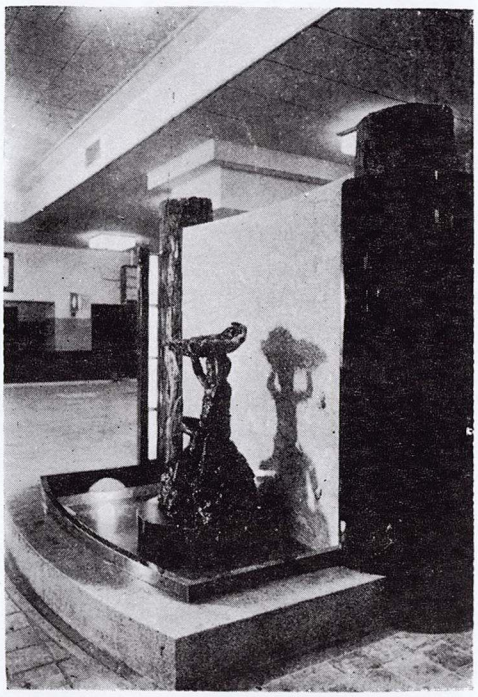
出札廣間より
手荷物室を望む

1．2等待合室入口廻り

巾　木　花崗石
柱及袖壁　大理石（黄龍）
　　ペイント・ステップル仕上
建　具　鋼製ホワイト・ブロンズ鍍金

噴水小僧

排水溝　花崗石（鬼赤）
縁石　外側　花崗石（鬼赤）
　　内側　花崗石（黒谷）トラバーチン
内部　床タイル（1部滴子タイル）
丸柱　外側　大理石（遠目鏡）
　　内側　和歌山石
壁　トラバーチン
壁付貝殻　大理石（本山）
縁石付貝殻　トラバーチン
銅製噴水小僧　（舊大阪驛にて使用せるものなり）
同石台　花崗石
電燈枠　鐵製ホワイト・ブロンヂング



設計　鐵道省
施工　大林組

3等待合室

床　タイル
巾木　テラゾー・ブロック
柱　タイル
腰　タイル
壁　プラスター
天井　{漆喰水性ペンキ塗 / ベニヤ板ペンキ塗}

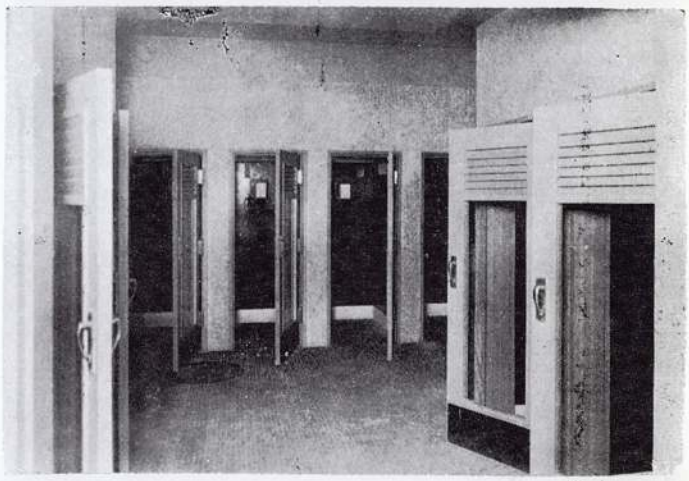


壁付腰掛

巾木　テラゾー・ブロック
パンチングメタル
鐵製ホワイト・ブロンチング
腰掛　{櫻材ラツカー仕上 / チツソライト板}
肘木　櫻材ラツカー仕上

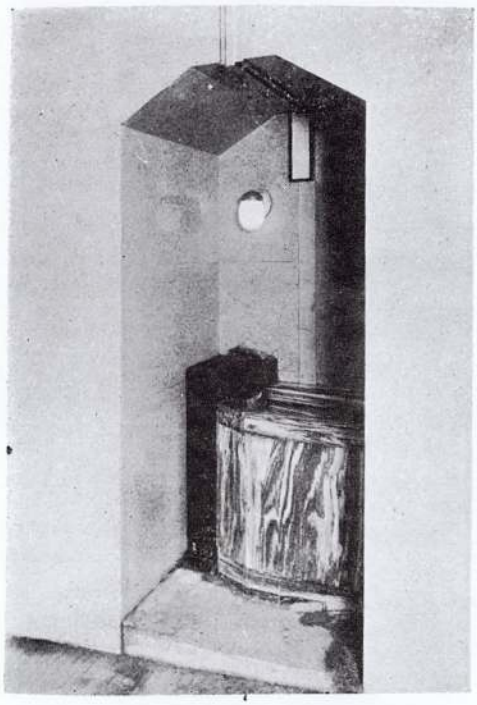
公衆電話室

床　タイル
腰　タイル
壁　プラスター
天井　漆喰ペンキ塗
ボツクス
床　タイル
巾木　人造石研出し
腰　チツソライト板貼り
壁　プラスター
天井　漆喰塗
ドアー
檜製ペンキ塗
蹴板　チツソライト板



水呑所

床　花崗石
壁　テラゾー・ブロック
水呑　大理石
裝飾金物　ステンレス・スチール





男子便所

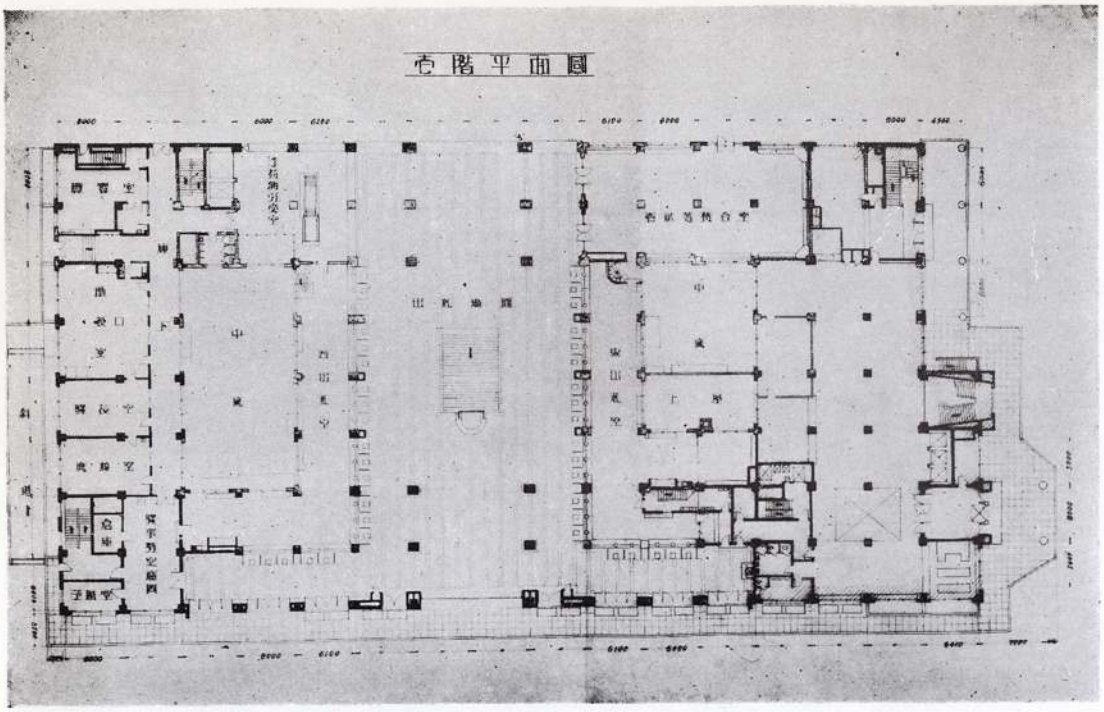
床　タイル
腰　タイル
壁　プラスター
天井　漆喰塗
緣石　花崗石
荷物台　テラゾー・ブロック

大便所

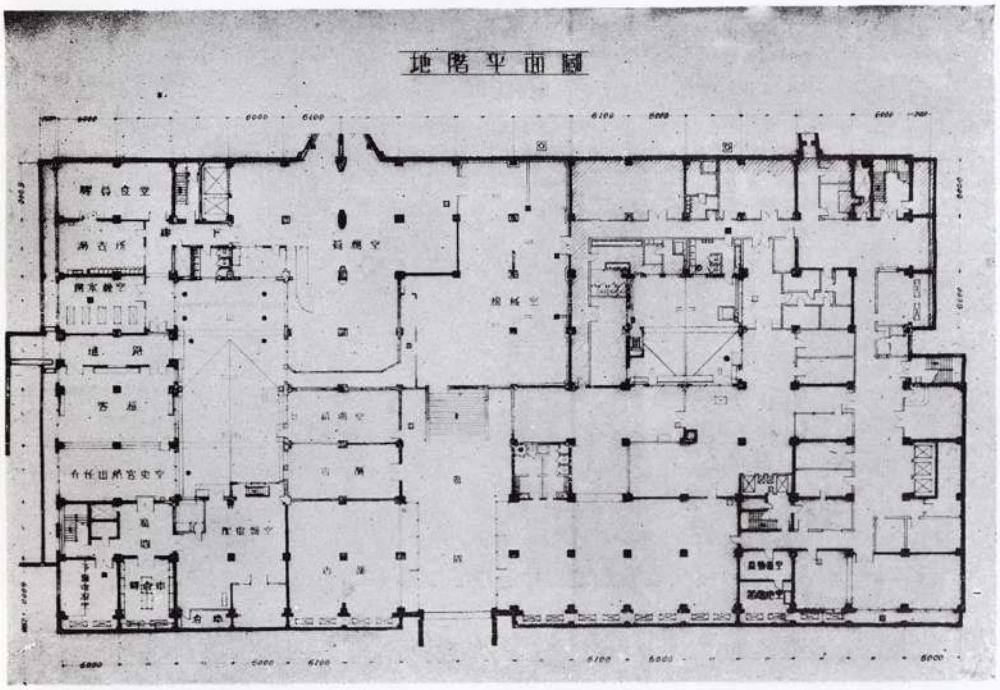
枠　檜製ペンキ塗
床　タイル
壁　タイル
扉　{フラツシユ・ドアー　チツソライト板貼り　緣金物　鐵板ラツカー塗}

新大阪驛

設計　鐵道省
施工　大林組

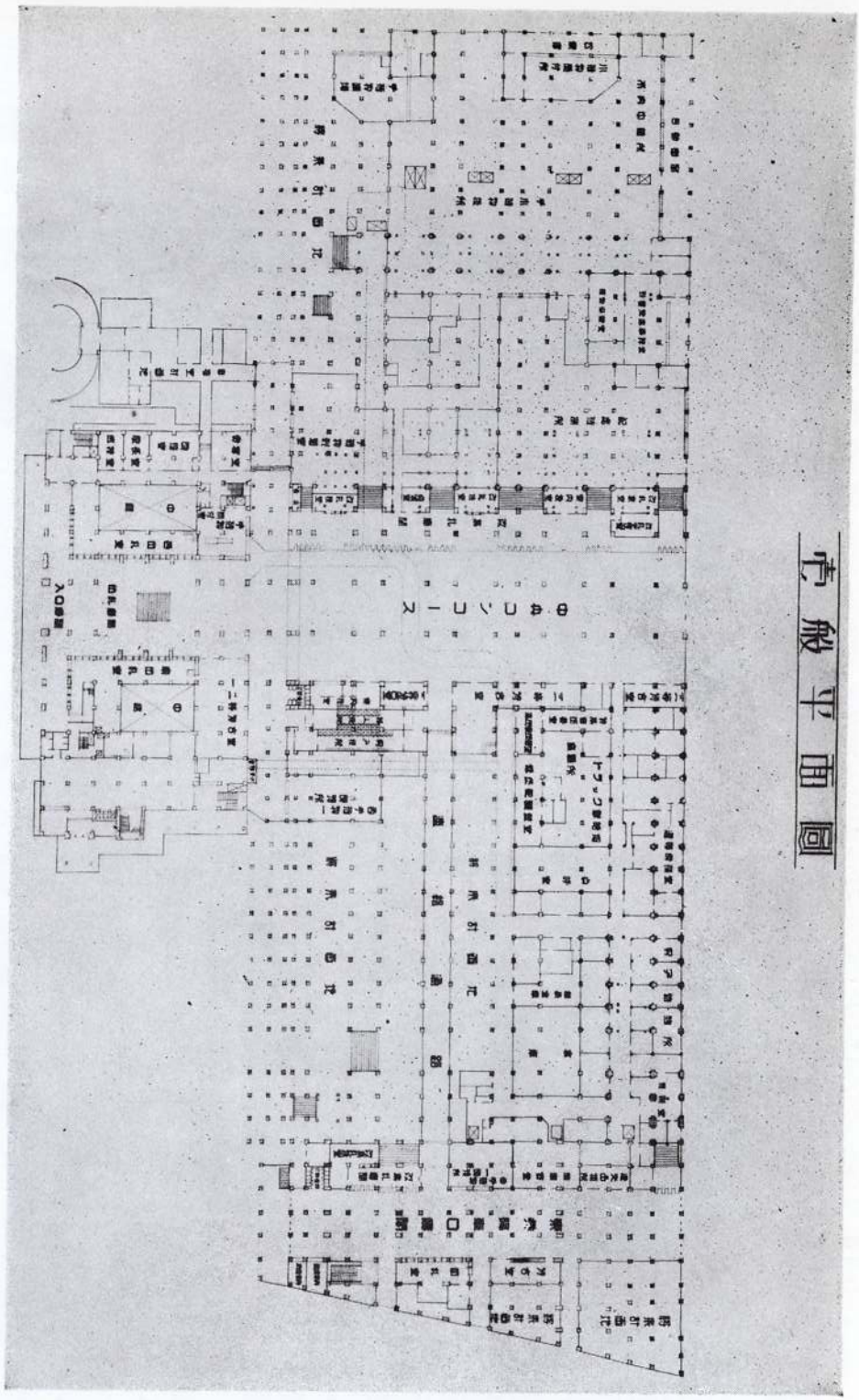


1 階 平 面 圖



地 階 平 面 圖

設計 鐵道省
施工 大林組



一般平面図

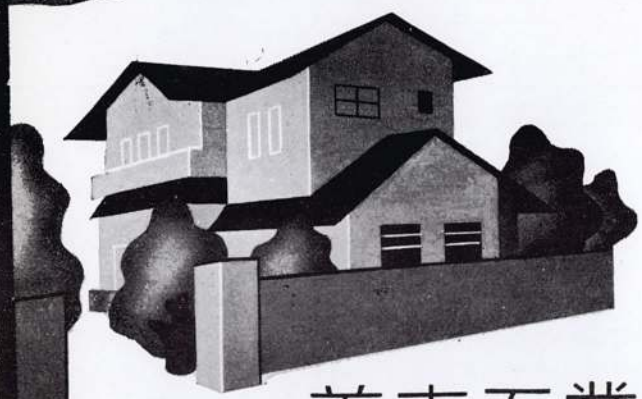
新大阪驛

設計　鐵道省
施工　大林組

美素

新築住宅にお手入のいらぬ！
古い住宅も新築同様となる！

〔カタログ贈呈〕



新築家屋美素加工
新築落成と同時に本所獨特のビソ液にて洗淨し木材變色の原因となる樹液を取り、其の上をビソにて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり、優美な艶を有しフキコミの勞を省き頗る經濟的です。

古家屋新裝美素加工
古家もビソ液で洗淨すると新築同樣となり其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。
（特種技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

美素工業所

大阪市天王寺區東平野町四丁目二一
電話天王寺(77)四〇〇三番

ノボ アルミナセメント

超高級　耐鹹 耐寒 耐火

六時間コンクリート



大阪窯業セメント株式會社

6 HOURS CONCRETE

1:2:4 水比 65 6時間 217㎏/㎠ 28日 410㎏/㎠
1:2:4 水比 45 6時間 300㎏/㎠ 28日 580㎏/㎠

施工6時間後
完全使用が
出來ます

第3回全國都市美協議會に出席して

去る5月31日、6月1日の2日間京都市並に都市美協會主催の下に都市美に關する協議會が開催された。既に以前より當協會に對し主催者より協議會への出席を招請して來て居つたので、都市計畫委員會の仕事として、當協會の意見の取纒めその他諸般の準備を整へ、當日は龜井、錦田兩幹事、稗田、森口の二委員出席し、主として龜井幹事より意見の具陳、論文の說明等を行ひ、大いに本協會の眞價を發揮して來たのである。

以下簡單に協議會の模樣を皆樣に報告して當協會代表として出席させて戴いた諸委員の責を果す事とさせて戴き度い。

錦　田　直　一

第3回全國都市美協議會要領

第1日　5月31日

1. 協議會

（1）會　　場　京都市岡崎公會堂

（2）開　　會　午前9時

（3）會議次第

1. 開會

1. 宮城遙拜、默禱

1. 挨拶　京都市長　市村慶三

1. 祝辭　內務大臣、厚生大臣、京都府知事

1. 講　　演　「京都市の歷史的發達に就て」魚澄惣五郎

1. 研究討議

第1議題　都市に於ける新舊文化を調和せしむる方策

第2議題　美觀審査委員會設置並連絡統制に關する方策

1. 都市環境の整備に關する報告並建議

（1）街路照明統制に關する件

（2）喀痰の取締に關する件（都市美協會常務理事東京市技師石原憲治）

（3）電柱整理に關する件（名古屋市土木局長花井又太郎）

（4）河川淨化に關する件（大阪市保健部長藤原九十郎）

（5）煤煙火止に關する件（同上）

（6）都市綠化に關する件（神奈川縣都市計畫課長野坂相如）

（7）神社境內地附近の美觀的取締に關する件（京都市產業部長小泉烝）

（8）共同建築法制定に關する件（警視廳保安部建築課長小林隆德）

（9）殷賑產業勞働者住宅整備に關する件（都市美協會常務理事都市計畫東京地方委員會技師石川榮耀）

（10）官公廳前庭美化に關する件（同右）

1. 協議事項

（1）次回開催地に關する件

（2）地方都市美運動團體相互の連絡に關する件

1. 閉會の辭　都市美協會副會長　近新三郎

1. 市長招待園遊會

以上出席會員　約300名

第2日　6月1日

各地視察

猶京都大丸に於て都市美に關する展覽會が開かれた。

以下第1日に於ける協議會の模樣を極く簡單に御報告申し上げて置く。

先づ「都市に於ける新舊文化を調和せしむる方策」に就ての研究討議は發壇者は左記の7氏であつたが、問題が大きくて漠然としてゐた爲であらふ。具體的意見は餘り無く主として抽象論であつて無難なものであつた。新舊文化がたとへ眞正面に向ひあつてゐてもそこに緣があれば兩者を中和して融合せしめるから樹木を出來る丈植へろ、と云ふ都市綠化の高唱があり、新舊文化の融合を企圖して建築される似而非日本的建築は舊文化の冒瀆であり返つて調和を破るものであるとする論が復習せられ、新舊文化の調合を破壞する主なるものは工場であると云ふ觀點から都市計畫の地域指定に都市美的な考慮の拂はるべき事が强調されたその他何れも御尤な說として拜聽して來た。登壇者は次の諸氏であつた。

都市計畫東京地方委員會技師　太田謙吉

東京市政調査會研究員　參事　弓家七郎

日本建築協會員　龜井幸次郎

神奈川縣都市計畫課長　野坂相如
神戸市都市計畫課長　奥中喜代一
吳市土木部長　長崎敏音
都市美協會常務理事　板垣鷹穗

次に「美觀審査委員會設置並連絡統制に關する方策」に就ては次の諸氏より意見の開陳があつた。

警視廳保安部建築課長　小林隆德
日本建築協會員　龜井幸次郎
京都市産業部長　小泉烝

次の「都市環境の整備に關する報告並建議」に於ては前揭各項目別に擔當者より研究報告あり、關係官公廳宛の建築案が提案されたが何れも滿場一致可決された。各項目の說明者は前揭協議會要領の處に括弧內に書いて置いた。これらの建議案の內我々建築家に關係の深いと思はれるものを揭載して諸兄の御參考に供し度い。

（6） 都市綠化ニ關スル建議案

輓近我國都市發展ノ狀勢ニ鑑ミルニ、都市ノ整備上綠地ノ維持、保存ト造成トハ最モ重要ナル問題ナリ

仍テ速カニ之ニ即應スベキ特別法規ヲ制定セラレ、都市ノ綠化ニ最善ナル方途ヲ講セラレムコトヲ望ム、

右第3回全國都市美協議會ノ決議ニ依リ建議候也

昭和15年　月　日

第3回全國都市美協議會主催者
京都市長　市村慶三
都市美協會々長　男爵　阪谷芳郎

關係官公廳宛

（7） 神社境內附近地ノ美觀的取締ニ關スル建議案

社寺ハ國民尊崇ノ對象トナルモノナルガ其ノ境域ノ森嚴ト美觀ノ保持增進ヲ圖ルハ衆庶ヲシテ愈々敬虔ノ念ヲ深カラシムル所以ナリトス

殊ニ市街地ニ於ケル社寺境內地ノ嚴肅淸淨ナル環境ハ唯ニ敬神崇祖ノ念ヲ篤クスルノミナラズ都塵ニ疲レタル市民ニ爽快ノ氣ヲ與ヘ情操ヲ養ハシメ且又都市美ニ加フル所頗ル大ナルモノアリトナス而シテ近來國體明徵日本精神ノ昂揚ニ伴ヒ此等神域或ハ境內ノ擴張、整備セラルヽモノ多キヲ加ヘツヽアルハ欣快ニ堪ヘザルトコロナルモ境內地ト一體ヲナシ其ノ森嚴性ヲ構成スベキ境內附近地ノ美觀的取締ニ付テハ從來何等ノ策ノ施サルヽナク都市ノ自然的膨脹發展ノマヽニ委セラレ漫然放置セラレアルタメ或ハ社寺境內地ノ神聖ヲ害シ或ハ其ノ美觀ヲ傷ツクルモノアルハ遺憾ニ堪ヘザルトコロナリ

仍ツテ速ニ社寺境內附近地ヲモ包含スル一團ノ土地ニ對シテハ都市計畫法並ニ市街地建築物法ニヨリ風致地區或ハ美觀地區ニ指定シ或ハ警察取締等ノ方法ニ依リ其ノ地區內ニアル土地建物ニ對シ都市美ニ調和スベキ樣相當ノ制限ヲ加フルト共ニ之レガ維持管理ニ關シ國家又ハ公共團體ヲシテ必要ナル補償ヲナスト共ニ境內維持ノ助成監督ヲ爲サシメ以テ社寺境內地ノ尊嚴保持ト都市ノ美觀增進ニ努メラレタシ（以下同前）

（8） 共同建築法制定ニ關スル建議案

重要都市ニ於ケル中心部、商業街其ノ他ノ樞要區域（防火地區、美觀地區又ハ主要道路沿線等）ニ於テ建物ノ規模、構造等ニ一定ノ制限ヲ設ケ矮小且陋醜ナル建物ノ建築ヲ抑制シ共同建築ニ依リ建築物ノ齊整並ニ經濟的利用ヲ計ルハ都市美觀ノ保持增進上ハ勿論防空、防火等都市建築物ノ保安上ヨリ觀ルモ寔ニ喫緊ノ事ニ屬スル而シテ本制限ノ結果トシテ必然的ニ狹隘ナル若ハ甚ダシク不整形ナル敷地ニ於ケル個々ノ建築ガ阻止セラルルト共ニ一面共同建築ノ實現ニ障礙トナルベキ諸因ノ生起モ豫想セラルルヲ以テ之ガ對策トシテ新ニ共同建築ニ關スル法令ヲ制定シ大要左ノ如キ建築制限並共同建築助成ニ關スル必要事項ヲ規定シ依テ以テ共同建築ノ實現ヲ助成シ併セテ關係當事者ノ利害調整ニ資スルノ要アリト認メ其ヘ實現ヲ望ム

1. 建築制限ニ關スル事項

（1） 內務大臣ハ共同建築法ヲ適用スベキ區域ヲ指定シ得ルコト

（2） 內務大臣又ハ其ノ委任ヲ受ケタル地方長官ハ建築物最小限ノ容積制限（建築間口及建築面積ノ最小限、高ノ最低限ノ指定等）ヲ爲シ得ルコト

（3） 內務大臣又ハ其ノ委任ヲ受ケタル地方長官ハ建築物ノ構造ニ關スル制限（木造建物ノ禁示等）ヲ爲シ得ルコト

（4） 地方長官ハ建築物ノ意匠、設計ニ對シ關與指導シ得ル規定ヲ設クルコト

2. 共同建築助成ニ關スル事項

（1） 相隣接スル土地ヲ一團ノ建築敷地トシテ數人共同シテ建築セントスル場合國又ハ公共團體ニ於テ適當ナル補助金交付ヲ爲シ得ル途ヲ開クコト

（2） 法令ニ基キ共同建築ヲ爲シタル場合當該建物ニ對シ一定期間ヲ限リ諸稅輕減ノ途ヲ開クコト

（3） 第1項ノ土地建物關係者ガ共同建築ノ爲結成シタル建築組合ニ對シ適當ナル監督ヲ爲シ得ル規定ヲ設クルコト

（4） 前項ノ組合結成ニ付テハ當該土地建物關係者ニ對シ强制加入ヲ爲サシメ得ル法的根據ヲ設クルコト

（5） 土地、建物關係者間ノ利害調整上必要ナル調停機關ノ設置又ハ適當ナル調停方法ヲ確立スルコト

（6） 一團地ノ共同建築經營ヲ都市計畫事業ニ準シ執

行シ得ル途ヲ開クコト（以下同前）

（9） 殷賑産業勞務者住宅整備ニ關スル建議案

最近時局ノ急激ナル需要ニ依リ各地ニ大小工場ノ新設増設セラレツヽアルニ際シ憂慮セラルヽハ之ニ伴ヒ多數従業員ノ結集セラルヽ結果、工場ニ接近シテ勞務者住宅ノ集團的建築ノ行ハルヽコトナリ。其ノ實狀ヲ見ルニ總テ法ノ許ス範圍ニテ最低限度ノ建築ヲナシツヽアル狀態ニシテ保健衛生上ノ施設況ンヤ保安風致其他環境トノ關係等ニ就テハ殆ド考慮ヲ拂ハレサル狀態ナリ。

最近ノ產業、特ニ國力ヲ推進シツヽアル精密機械工業ノ如キハ其ノ成果ハ一ツニ勞務者ノ保健ト精神狀態ノ如何ニ依ルコト大ナリト稱セラル、然ルニ實狀斯ノ如キハ従業員ノ作業能率ヨリスルモ保健上ヨリスルモ寔ニ憂慮ニ堪ヘズ

宜シク當局ハ勞務者住宅施設ニ關スル法規ヲ設ケ其指導機關ヲ設置スルト共ニ休養慰安ト體力増强ノ緑地ヲ與ヘ一ハ其能率ヲ増進シ一ハ都市美ヲ構成スベキ住宅地ヲ建設ス可ク急速適當ナル處置ヲナサレンコトヲ望ム。（以下同前）

（3） 官公廳前庭美化ニ關スル建議案

我國ノ各都市ガ公館ヲ中心トスル廣場ヲ設ケ之ヲ核心トシテ街路其他ノ計畫ヲ見ルニ至ラザルハ近代式都市トシテヨリ缺陷多キノミナラズ都市ノ品位ト其美觀上ヨリスルモ洵ニ遺憾トスルトコロナリ。即チ我國ニ於テモ臺灣、朝鮮等ノ都市ハ既ニ近代的都心ヲ建設シテソノ目的ヲ達シツヽアルニ鑑ミルモ明確ナル事實ナリトス。

時局ハ益々國民的精神昂揚ト市民ノ協力ヲ要求シ總動員的體制ヲ確立セントスル時吾人ハ茲ニ都市公館並ニ重要公共建築ガ其ノ都市ノ美的構造ノ要素トナルト共ニ眞ニ敬仰ニ値スル偉觀ヲ有シ其ノ前庭ヲナス廣場緑地ハ市民ノ精神運動ヲ行フニ適切ナル地域タラシメ併セテ防空防災、保健、交通整理等ノ目的ニ副ハシメンコトヲ切望シ適切ナル企劃ト其實施ニ就テ格別ノ講究アランコトヲ望ム。（以下同前）

昭和15年4月發行

建築物强度計算用風壓基準

☆ 定價 35錢

送料 3錢

日本建築協會發行

大阪市北區中之島
朝日ビル 電(23)4501
振替口座大阪 39975

賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

撫養製鹽工場見學概記

倶樂部室主催

恒例の倶樂部室主催春季大會は幹事側にて種々熟議の結果本年は多少趣きを異にしたる催しとし見學をかねて會員相互の親睦を計る事に一決、四國路淡路經由歸阪の計畫を樹て左記プログラムにより檄を飛ばしたる處當日參加せしは29名職員を加へて一行32名6月8日土曜日の夜天保山を出發翌9日夜9時無事同棧橋に歸港近來稀なる亦珍らしき見學を了へて意義深き旅を終りたり。下に概要を記す。

次第

時	6月8土9日2日間　晴雨不論
集合所及時間	6月8日午後10時天保山棧橋
出發	同日午後10時乘船小松島に向ふ
見學先	撫養　本齊田合同製鹽工場（竹中工務店施工）
行程	9日午前5時小松島着德島を經て撫養着朝食後製鹽工場見學11時發鳴門公園に向ひ中食午後4時30分福良經由洲本より天女丸にて歸阪
會費	10圓也（汽船汽車2等食事費一切）
申込及締・切	ハガキにて折返し申込と同時に會費拂込みのこと

頃日來氣遣はれた天氣も持ち堪へて定刻迄には三々五々集合豫定の乘船を待つ內俄に豫約の船に故障が出來て變更となり出帆間際の德島丸に乘り込み小松島に向ふことゝなる。

遽しい代船乘り込みのこととて豫約の手筈であつた2等はおろか一船の缺航がたゝり滿員立錐の餘地なき狀況に一度は兵庫下船說も出でたるも幹事側と事務長と交涉の結果ともかくも參加各位にお詫して一部2等室割り込み上下甲板其他に分散し苦しき中にも座席を設け落ち付くことを得たので持乘の飮料菓菓などを饗し12時頃までには大體に於て眠りに付くことが出來た、海上は實に凪靜かで疊の上を行く如く平穩であつたのは何より幸ひであつた。各自明日のプログラムを微睡む內に早くもほのぼのと明けそめる。4時すぎ小松島港に着上陸後バスを待つ間に太陽の昇天を拜し一同珍らしき早起きに快味を覺へ必身壯快となる。德島迄約20分餘のバスは誠に有難からぬ光景であつたが德島からは豫定を代へて汽車路で撫養に向ふことゝし2等車貸切りの狀態で一同氣持をよくし6時50分發途中吉野川を渡る頃遙かかなたに十郎兵衛古跡を望みつゝ乘り替へ間もなく目的地撫養驛に安着直ちに驛前通りの播磨屋旅館に至りなつかしい疊に座し暫し寛ぐ。

豫てお願ひせし工場設計監督側の關係よりして黑瀨事務所の松浦基二氏種々斡旋されたるは有難いことであつた。朝食後8時30分宿を出發同氏の東道役により工場に向ふ途中往來の製鹽狀況や最新式の傾斜屋根天日乾燥法の實況などを見學しつゝ9時すぎ愈々目的の工場に着く。

保證責任本齊田鹽業信用販賣購買利用組合と云ふとても先の關白以上の長い名稱の門を潛り事務所樓上に通され技師長の說明を聽きたる後製鹽工場內の見學に移る。

鹹水取り入れより汽罐室配電、製鹽、荷造工場に至るまで見るものすべて最新設備にて一同驚嘆久しく大いに製鹽に關する知識を得參考となる點多くなかなかに去り難き光景なりしが先の行程を急ぐため10時30分此處を辭し用意のポンポン船に移乘鳴門公園に向ふ。

天氣將に晴朗にして風なく青海原を一直線に小鳴門に向ひ左右の風光亦佳にして名物のワカメ菜取の小舟數多情緖豊かにして一幅の繪物卷の感あり、小鳴門を過ぎて內海に出でる頃は鏡の如きおだやかな中をポンポンの音は眠りを誘ひ夜來の疲れと諸共に虛生の夢を貪る者漸く多く又一面雜談と勸賞の內11時すぎ鳴門公園下着上陸後小徑を登れば吾等のために待ち設けられたる水野支店あり一同階上に通れば名にし負ふ天下の奇勝阿波の鳴門は眼下に展じ壯觀譬ふるに物なき光景に一同忘はず快哉を叫び昨日來の疲勞を一度に還した心地せり、公園を散策する人、橫になる人圍碁將棋を樂む人等々しばし待つ間に配膳整ひ着席するや三浦幹事起立幹事長を代理して一場の挨拶をユーモア交りに名文句で拍手裡に終り高坂幹事は此催し及此席上の一切について竹中工務店より配慮ありしことを報告旁謝意を表し併せて懇々御案內役を願ひし同店員各位並に松浦氏に對し感謝して宴に入る。

撫養より渡船せる美人酒間を斡旋宴酣の頃池田實氏長老の故を以て參加者を代表して御挨拶あり夫れより自己紹介に入り一層の興を添へいつ果つべしとも覺へざりしが渡船の時間となりおしくも閉じて3時30分一同海岸に出で乘船汽船は激浪渦卷く所謂鳴門の渦中を乘切り一同アレヨアレヨと感嘆しつゝ壯絕快絕極まりなき壯觀を窓にして船は福良に向ひ一路突進す午後4時すぎ福良上陸直ちに州本行汽動車に飛び乘り漸く疲勞を覺ゆる午後5時30分州本港着

既に滿載の天女丸の2等室に陣取り6時10分出帆す此處にて神戸方面參加者5名は兵庫に直航のため一同と別れ一行27名は夕陽西に傾く頃船中の餘興後食堂にて交替食事を攝り昨日來の苦樂を物語る中にいつしか摩耶六甲の燈もキラホシと輝く頃三浦幹事着港と同時に解散の旨を挨拶し程もなく天保山に入港9時全く上陸し思ひ思ひの家路に就き最も意義深き見學會を終了したり。

出席者氏名下記の通り（略敬稱五十音順）

相川 雍一、池田 實、井上 一雄
伊東宗太郎、砂 尙一、岩井 泉
尾崎清四郎、奥村丈太郎、河津喜之助
小林 誠三、佐々木俊朗、志保井正夫
島岡義太郎、鈴木 强、伊達 正信
高木 太作、天滿 勇、中島 勝喜
原田 千歳、福井 薫、保園 源三
前田 憲彦、宮川 豐藏、宮後 光三
呼子 正、米田 眞一、高坂信次郎
濱田 利世、三浦 茂、大和書記長
戸川 書記、近藤 助手、

大阪都市計畫防火地區圖を頒布す

今回下記內務省告示に依つて大阪の防火地區が廣範圍に渉つて追加指示されましたに就いて、同防火地區圖を次の通り實費にて頒布しますから御入用の方は至急お申込下さい

大阪都市計畫防火地區圖（二萬分ノ一）1部

- **實　　費　15錢　（外に送料3錢）**
- **送金方法　振替（振替口座大阪39975）**

內務省告示

大阪都市計畫防火地區追加變更ノ件

昭和十年十月二十八日附議　議事第一一九號　第六〇四

內務省告示　第百八十八號

大正十二年七月十三日內務省告示第二百二十七號大阪都市計畫防火地區追加變更ノ件昭和十一年四月四日內閣ノ認可ヲ受ケ昭和十一年四月二十九日ヨリ之ヲ施行ス其ノ係關圖面ハ大阪府廳及大阪市役所ニ備へ置キ從覽ニ供ス

昭和十一年四月九日

內務大臣　潮　惠之輔

申込所　社團法人 日本建築協會



地下鐵内に於ける防毒實驗の一感想

增井敏克

本春3月上旬に地下鐵本町停留場に於て防毒に關する數種の實驗が行はれた。之等の實驗の目的は現存の如き構造及設備を有する地下交通機關の防毒といふ問題に對しての安全性を見たもので、即ち路面出入口等の開口部に侵入せんとする毒瓦斯の防止裝置の効果試驗、及び之を突破して場内に侵入した瓦斯、若しくは場内に發生した有毒瓦斯の排除等の實際的處置の研究試驗を行つて、以て萬一の際に於てのこの種の機關の分擔すべき任務に遺憾無からしめるべく計畫されたのであつた。

實驗結果の詳細に就いては夫々の關係者に於て調査研討されて居る事であらうから、こゝでは觸れないで居くが、その内特に路面出入口に於て行はれた假設の木造間仕切りに依る瓦斯侵入防止の實驗狀況は一般建築物の防護室内至は假設的の防毒施設に取つて相當關係の深い事と思はれるから、筆者の見たまゝ、思ひ付いたまゝの二三を記して何かの參考として見たい。

この實驗の一つは出入口附近の通路に防毒裝置の仕切りを二重に設けてその中間を防護室の所謂前室とし外部仕切りの外側で發煙筒を燃して實際の場合に毒瓦斯が路面より流れ込みたる場合に近い狀態を造り、發煙筒の白煙の仕切りよりする侵入狀況、及び内外の兩仕切りに附した潜扉を經て煙の充滿した外部より人が前室内に入る場合の影響を觀測したのであつた。尙この際停留場附屬の換氣裝置を用ひて停留場内に送風して氣壓を外部より幾分高めた場合と送氣を中止して氣壓を減じた場合の二狀態について比較して見た。

今一つは前記に準じた防毒仕切りを一重のみ設けた場合につき内部の壓力の有無の二狀態の下に侵入狀況の比較試驗を行つたのであつた。之等の實驗に用ひた防毒仕切りは各出入口通路の既設の構造（鐵筋「コンクリート」構築の上に天井及び側壁上部は塗仕上、側壁下部及び床面は「タイル」張仕上）の内法一杯に木造の枠組みを嵌め込んで固定し之に防毒幕を押へ縁にて取付け周圍に板と目張りを廻して氣密を計つた。

この設備に當つては筆者も多少の關係があつたのであるが、防毒幕と目張り材料の適當なものが分らなかつた。之は筆者等の不勉强の爲の認識不足の結果かも知れないが現在では市場で一寸手に入らない事が分つた。防毒幕の方は場所が何分外部より風の吹込みの强い事が豫想されるので充分强度のあるものでなければならないから「カンバス」に「ゴム」を引いたのを張る事にして間に合はせたが、一方の目張材料には少々困つた。平滑な「タイル」面にも「セメント」塗の様な仕上面にも、又木材の普通の削り面にも良く接合が効きしかも外壓を受け乍ら良く氣密を保つものが即々見當らない。勿論仕上面にかなりの小凹凸があり、木材も假設工事であつた爲削りが充分でなかつたから密接が面倒であつたのではあるが、この様な狀態は一般建築物に於ける場合にも普通有りふれた事である上、平常より完全な防護室を用意した建物は別として、一般の建築物に於ては非常の際に及んでから臨時に防毒裝備を施す事も多からうと思はれ、その簡木骨の假設的仕切りを開口部に嵌め込む事も考へられるから、簡易防毒設備の工夫と同時に防毒幕と目張り材料の研究に今後一段と注意が拂はれ、簡單に工作し得てしかも効果の良い材料の出現を急ぐ必要がある事が痛感された。尙目張材料及び張付け方法に就いては震動に耐して强固である事も重要な條件であらう。今度の實驗の場合にでも近くでの發煙筒の點火の際の小爆發の爲に目張りの一部分が外れた處があつたのであるが實際の場合にも振動或は爆風の如き衝撃を受ける事が考へられるから、間仕切り自體の堅固な取付は勿論、目張りも近くに落下した爆彈の影響で一溜りもなく破損するといふ事の無い様にありたい。更に實の研究と並んで市場製品となつた場合の入手の容易、價格の低廉化に力を注ぎ、苟くも一小局部には在り乍ら、一般には入手が困難といふ狀態には置きたくないものと考へる。

この實驗に於ては發煙筒を以て毒瓦斯に代用せしめたのでその白煙は實際の瓦斯よりも比重が幾分輕く且その點火場所が非常に間仕切りに接近して居つたので路面よりの自然流

入の場合に比して多少條件が異つたのであるが點火の際の噴出壓に風壓が加つて仕切りの面に可成の壓が感つた。その爲か煙の侵入が豫想以上に多かつた。侵入個所は思はぬ所にあつた微細な隙間が多く、例へば「タイル」貼の目地に依つて生ずる目張りの細隙、同じく「タイル」貼の裏側の貼付用の「モルタル」の空隙を潜つて、或は排水溝を經るもの等があり、殊に實驗の爲に臨時に設置した電話線が防毒仕切りを貫通する孔の部分などは密封に念を入れたに關はらず功を奏せず煙の侵入が著しかつた。之等の微細な隙間は一般建築物の場合でも多數にあり又人の注意の程度にも限度がある故到底絶無を期し得ない事ではあり、又外部との連絡用の配線等を假設する事もあらうから、この種の防毒仕切りの氣密性を高める事は相當厄介と思はれる。殊にこの實驗に於ては停留場内の壓が高く、從つて前室内も幾分外部より氣壓が高くなつて居つた場合の結果といふ事に鑑みれば、直接外氣に連絡する場所に設ける假設防毒仕切りは餘程入念に施工しなければ機能を果し得ないのではないかと思はれる。前室を通過して更に場内に侵入する煙は豫想通り比較的少かつた。之等から綜合せば間仕切りは何重にも重ねる程効果が多い事となる。

防毒仕切りよりの瓦斯侵入狀況觀測に引續いて潜り扉を開いて人が外部より入り込む時の狀況を見たが之の場合にも豫想通り可成量の煙が開扉の度毎に渦狀をなして侵入し數人の通過の後には前室内の侵入瓦斯濃度は僅か數米で物の姿を識別し得ない迄になつた。勿論前室内の觀測に當つた人々は防毒「マスク」無しには居れなかつた。

我が國に於て現在採られつゝある防護室特に前室の計畫方針が外部に瓦斯の存在するときにも扉を開閉して差支へない様になつて居るのか或は然らずであるが筆者には不明確であるがもし前者であるとせばこの結果より見れば相當重大な事では無いだらうか。開扉に依る瓦斯の侵入は扉が假設的の仕切りに附された場合であらうが防護室に於ける様な高度の防毒性能のある扉であらうが變らないと見なされるから、外部に瓦斯があるとき數回も扉を開閉せば内部氣壓が相當高くない限り前室内は防護室の一部としては恐らく使用に耐えなくなるのでは無からうか。この事は一つの防護室が救護者を搬入し得る様に計畫される場合には特に重大問題で擔架の如き開扉時間を多く要するものが通過するときは瓦斯侵入量も豫想以上に多くなる事が有り得ると思はれる故、前室に於ける作業は餘程制肘されこの點を愼重に考慮されなければ不測の災を多數の收容者にも及す事になりはすまいかと恐れる。設備に餘裕があるときは普通の收容者と救護者の出入口系統を別にして前者の方は危險時間中の出入を禁すべきでは無いだらうか。

以上斷片的で甚だ要を得ない文となつたが防毒問題が種々論議される折柄愚見を述べて見たに過ぎない。

（昭和15年4月上旬）

建築てふもの

尾龜清四郎

その才能を惜しまれつゝ夭折した日本工業新聞の建築記者阪井則夫君が曾つて〝建築と社會〟の建築隨想欄に、文壇人や女流作家の建築觀や建築知識について面白く書いてゐた事がある。あちこちの本を手當り次第に——と云つても暇と金の都合でその數も知れてゐるが——讀んでゐると中には隨分間違つた建築が出てくるものである。朝日會館の機關誌〝會館藝術〟5月號に美川きよ女史が〝わが家の庭〟と云ふ隨筆を書いて居られるが、仲々文壇秀作家だけあつてその表現の細やかさには感心させられるがその中に隣家の壁がとたんのなまこ板で包まれて云々と云ふのが出てくる。〝とたん〟と云ひ〝なまこ板〟と云ひ〝ぶりき〟と云ふ。夫々違ふもので〝とたんのなまこ板〟はちとどうかと思ふ。

森田たま女史がその著〝隨筆竹〟の中の味と云ふ處で、或る老宗匠が建築の圖面を引くのに鳥口と云ふものを一切使はず、全部墨で書かれるのだそうだ云々と書いて居られるが鳥口は原則として墨を入れて書くのだから、この云ひまわしは一寸おかしいのではないだらうか。筆だつたら筆らしくもう少し何とか書けそうである。ついでにこれは建築とは違ふがその〝隨筆竹〟の中で吉野すしの事を書いて、ちめたいまゝでもおいしい云々と書いて居られるが、私は冷たい事をちみたいと云ふ大阪辯も知つてゐる。ちめたいとは各地から集つて大阪の人となつた人達がつめたいとちみたいの間をとつて作つた所謂標準化された大阪辯ではないだらうかとも思つたりしてゐるが大阪辯も仲々むづかしい。

吉屋信子女史がその小説の中に盛んに建築の表現をされる。いつもそのまゝに讀んでしまふのだがあの文章を實際の圖面に引いて見たら素人の——と云つては失禮だつたら女流作家の——建築觀と云はうか好みと云はうか、面白いものが出來るんぢやないかと思つたりしてゐる。勿論二笑亭の様な傑作は出來ないだらうが。

話は古くなるが昨年もおしせまつたある日、南座の顔見世を見せてもらつたが、その中に食滿南北原作の〝本朝烈女鑑〟があつた。能狂言を

やる處があつて舞臺に能舞臺をしつらへ下手の方から橋掛りがついてゐるのだが、問題はその橋掛りの手摺りである。御承知の通り勾欄は上から架木、平桁、地覆と三つの横材が通るわけだが、元來能舞臺の橋掛りは演者の細かな足の動きを見せるためにその地覆をつけない事になつてゐる。處が南座の臺舞裝置には、はつきりと地覆がついてゐるではないか。おかしいとは思つたが劇に出てくるのが織田信長の頃信方となつてゐるから能の歴史からいつて或はこれでよいのかなとも思つたりして見てゐた。歸つて早速劇場史を調べて見たが手元にある資料だけではどうも判然しないがやはりついてないのがほんとうらしい。

若しこの舞臺裝置が間違つてゐるとすれば、建築に相當接近してゐる筈の舞臺裝置家がこれであるから、文壇人の建築に對する間違ひなど當然なのかも知れぬ。勿論これ位の間違ひにてその作品なり芝居の價値がどうのと云ふ譯ではないが、間違ひと云ふものは氣持のよいものではない。

間違ひと云へば昨年終り頃の〝建築と社會〟の誤植は少々ひどかつた。今頃こんな事を云ふと新聞の訂正か取消廣告の様に、廣告を見て始めてそんな事が載つてゐたかなと云ふ様なものだが、11月號など一寸見ただけでも30ケ位はあつた様だ。それに災害强度委員會の正誤表を加へるとまるで校正をやつてない様な實に素晴らしき間違ひ振であつた。協會の權威にかけては勿論の事、讀者の不快、も少しは考へて校正に勵むべきである。

話は間違つて横道へ——始めから本筋なんてないけれど——それたがとにかく衣食住とは一口に云ふものの仲々以て建築とはむづかしいものである。先日行はれた協會の京都見學會のとき、本職の建築家でも勉强を怠ると、このむづかしい建築てふものゝために、とんだ失態を演じねばならない事を切實に感じさせられた。待望の孤蓬庵を見せて戴いて主催者側に感謝してゐる次第だが、彼の有名な忘筌席へ入つて行くと先から入つてゐる人達が、何と驚いた事にはあの有名な襖のない障子を開け放して立つたまゝ庭を眺めてゐるではないか。これが建築を專門にやつてゐる人達の見學會なのだから恐れ入つた譯である。幸ひ心ある人達によつて間もなく障子が閉められそうして疊の上に坐つて心行くまで庭と建築を鑑賞し遠州公の偉大なる藝術境にひたる事が出來たのは感激そのものであつた。

藤原商工大臣が西下しての公開市民實問會の席上、都計委員として池田先生が、得意の都市武裝の見地からセメント增產について實問を試みられ商相より增產に努力するとの言質をとられた事は先刻御承知の通りである。これで又防空建築實施に拍車をかける事だらうか、あのヒビの入つた尨大なる妻壁を見るとき、雨水の浸入による木材のムレを心配したり、さては間近かに迫つた日本の夏を思つては〝家のつくりやうな夏をむねとすべし〟と云つてくれた兼好法師をしのんでみたりしてゐる。

餘り人の事ばかり云つてゐると手もとに火がついて來そうである。電車内での喫煙が禁じられたので、この紫烟室を一寸拜借した迄で消えてなくなる紫烟の如きはかない話ではある。（昭和15.5.1.）

過渡期の感想

新名種夫

1

阪急百貨店が派手な服裝の禁止を店員に申渡した。違反するものは首にするといふのである。時局柄一見結構な企ての様に見える。

だが、店頭にはマネキン人形に益々華麗な洋裝、和裝をさせて顧客の目を牽き、陳列臺には目も綾なる布地を繰擴げて、殷賑産業利得者の購買欲を嬾が上にも唆つてゐる。買つた人々は街頭に出でて目を瞠る様な强烈な流行色がそこに作り出される。

阪急百貨店にして、眞に國策に順應する心構へがあるならば、先づ以て販賣品目中より生活必要品以外の贅澤品を除外し、時局利得者の浪費とその社會的惡影響とを防止すべきである。

貧しい實子達の華美——これは店が禁止する迄もなく夫々の收入によつて、問題視すべく餘りにも低い程度に、可憐にも自ら制限せられてゐる——の禁止を以て百貨店の非非常時局的性格をカモフラージュしやうとは、餘りにも虫がよ過ぎる話である。

だが、何と多數のこの種の欺瞞行爲が公然と行はれてゐることよ。精動の徹底せざる原因の一が茲にある。

2

樂聖シュトラウスの手によつて、我皇紀2600年記念の作曲が最近完成し、6月11日ベルリンに於て獻納式が擧行せられることになつた旨、ベルリン2日發同盟は報じてゐる。

この記事を讀んで先づ胸に來たものは、我悠久2600年の歴史は、それが血となり肉となつて軀一杯に脈打ちつゝある我々日本人にして初めて染々と理解し得るものであつて、如何に音樂の巨星でありとは言へ、一外國人の完全に理解する所であるか何うかといふ疑問であつた。

だが、シュトラウスはこの曲に、日本藝術に對する憧れを籠め、皇道武士道崇拜の精神を盛り、

天皇陛下に對する歡喜と忠誠の情とを表現したいと語つた旨、新聞は傳へてゐる。

僕は上述の疑問にも關らず、この老ひたる樂聖の情熱に瞼の熱くなるのを覺えたものである。

同時に、この生涯に再び廻り遭ひ難き、我々の記念の年を讃えるに足るべき偉大なる曲が、未だ日本人の手で完成されたことを聞かない事を此上なく淋しく感じざるを得なかつたのである。

同日の同じ新聞に、米國が今日まで既に行ひ來つた。錫、ゴム、クローム、フエロマンガン、屑鐵等の對日輸出制限と、モリブデン、アルミニウム、飛行機用ガソリン精製機等の禁輸に加へるに、更に機械工作機械、飛行機エンヂン及びその部分品發動機等の輸出禁止を行ひ、對日壓迫を一層強化するに至つた爲、我生産擴充計畫の上に重大なる影響が生じた旨の記事が載つてゐた。

前者は我國の藝術貧困の證左であり、後者は技術貧困の結果である。

同一紙面のこの2つの方面の記事を見て、我國の外國依存が、單に政治的な理由ばかりからではなく、もつと根本的な所に已まれぬ原因の存することを、今更の様に感じて慄然とした。

精神文化としての藝術と、物質文化としての技術の獨立こそ、我新秩序建設事業の出發點である。

3

雜草の食料としての營養價値が問題となりつゝある。

先日の新聞に、『自分はまだ喰つたことはないが、タンポポを喰つてでも生きて行けるんだ。外米位で不平を言ふな』と、吉田厚相が言つたとかの記事が出てゐた。自らタンポポを喰つた上で言つて貰ひ度かつた。

が、それは兎も角、雜草の食料としての利用價値が問題になりつゝあることは事實である。これは米穀問題を契機とする。「食」に對する不安から派生した1つの現象でもあらうが、貨幣價値に依存する都會生活への疑問が、田園へ、延いては自然への關心を高めた結果でもある様だ。

物資は今日田舍に豐富で、都會では益々缺乏を告げつゝある。田舍では白米が喰へ、まともな酒が飲めるが、大都會では外米7割入の飯を喰ひ、割當量の水割酒を名殘を惜みつゝ飲まざるを得ないのである。

『家族を養ふに足るだけの田畑を購ひ、少くとも食料の自給自足の上に立つ生活より外に、この激流の様な時代に處する絕對安全な道はない』と、ある經濟學の先生は言つた。

府縣單位の自給自足主義が、或は一時的であるにせよ。この時代に對處する1つの道であるとすれば、一歩を進めて、1家族單位の自給自足主義も亦、時代適應の方法として許さるべき1つの道でもあらうか。

文化の、封建時代への一時的逆轉である。產業革命以來の自由商業主義の破綻が、自由商業主義の所產であつた所の人口の都市集中に對して既に障碍的作用を生じ始めたのである。食料難饑、住宅難、交通地獄等。

地方計畫、國土計畫等により、都市の分散がやがて統制經濟の下に最も合理的に行はれるであらう。
大都市の現狀は既に緊急にそれを要求する所にまで來てゐる。

4

先日或座談會の席上、久しぶりに本野精吉先生にお目にかかつた。その歸途、昨年アメリカへ行かれた時の感想として、次の様な示唆に富む話を聞いた。

『人間生活の快適といふことを目標とする、アメリカに於ける諸施設はあらゆる方面でその極致にまで到達しやうとしてゐる。建築は勿論、汽車、汽船等の交通機關の設備など全く驚嘆に値する所まで行つてゐる。併し、これのみが文化の最後の目的であつていゝのか。この方向で窮極まで到達するといふことが、人類にとつて一體何であるのか』と。

本野先生の話はもつと深い意味を含んでゐた様に思ふのであるが、僕はこの話によつて、建築の目的が、その保安、衛生及び經濟の自然科學的な解決にのみありとした從來の建築學に、1大變革の時期が到來してゐるといふ僕の考へに、一つの裏書が與へられた様に感じたのである。

建築は元來、人類が自然の恐威から自らを保護する爲に發達したものであることは、說明を要しない所であらう。

だが、建築の極端な——或は不自然な——發達によつて、建築自體が却つて人類生活を蝕みつゝある如き現狀に對して、人類は更に高度の人工を以てこれに對應しやうとしてゐる。

例へば、夏季大建築物内の不自然な蒸暑さに對しては、冷房裝置によつて一應の解決が見出された様に見えだが、この冷房裝置に原因を持つ特殊な疾病の發生は、今日更に一層高度の施設を要求するに立至つてゐる有様ではないか。この調子でこの窮極に一體何が來るのか。

肉體の苦痛を超えて、精神と自然との直接の接觸の中に、人類生活の最後の解決點があるのではないか。生活の快的の彼方に、人世の高い目的が存在するのではないか。『行』の生活が唱導せられる所以である。

だがこの場合、建築家の爲すべき仕事は一體何んなことになるのであるか。大方の御教示を得度いと思ふ。

投稿規定

☆原稿用紙は横書の16字詰にお願ひします。
☆締切は毎月1日。
☆編輯の都合で締切以内に到着の分でも翌月に廻すことがありますから御承知下さい。

會報

本協會員中軍務公用者氏名

前號發表後に於ける本協會員中軍務公用者下記の通りであります。（受付順）

特別賛助員　染田藤繁君　岩佐重光君　山中英男君

常務會（第11回）

時　6月3日午後5時30分—8時30分
所　陳列場別室
出席者　理事　今林副會長、坂副會長
　監事　井上監事
　常務　北垣主記、玉置主記、中西主記、三浦主記、藪中主記、岩尾主計、桐本主計、龜井編輯、政岡編輯
議事
1. 都市計畫委員會より經費要求の件
2. 記念事業委員會より經費要求の件
3. 建築に關する非常時法規解說刊行に關する件
4. 圖書刊行費に關する件
5. 職員上半期賞與並に昇給の件
6. 會員詮衡

報告
1. 5月例會終了報告
2. 職員健康保險法實施要項報告
3. 建築學會新京支部より圖書寄附報告
4. 除隊者報告　以上

常務會（第12回）

時　6月17日午後6時20分—7時30分
所　陳列場別室
出席者　理事　今村副會長、坂副會長
　監事　井上監事
　常務　玉置主記、中西主記、桐本主計、龜井編輯、政岡編輯
議事
1. 請負規程定價引上げに關する件
2. 給仕解傭に關する件

報告
1. 會勢幹事會主催見學終了報告
2. 6月例會終了報告
3. 5月分會計報告
4. 片岡會長音信報告
5. 出征除隊者報告
6. 委員長、幹事長、經過報告

材料委員會（第8回）

時　6月6日午後7時—9時40分
所　陳列場西室
出席者　委員長　松久保
　幹事　楠瀬
　委員　中島、島田、蘭部、道田、
協議事項
1. 木材規格中寸法に關する研究の件

材料委員會（第9回）

時　6月20日午後7時—9時
所　陳列場別室
出席者　委員長　松久保
　委員　榊、道田
協議事項
1. 木材寸法規格に關する道田委員案を檢討

住宅委員會（第5回）

時　6月6日午後6時30分—8時15分
所　陳列場別室
出席者　委員長　石川
　委員　岩尾、小林、中野、矢田、
協議事項
1. 住宅讀本原稿締切に關する件
2. 古代民家見學に關する件
3. 住宅紀念史發行に關する件

設備委員會（第5回）

時　6月11日午後6時30分—8時10分
所　倶樂部室
出席者　幹事　大原
　委員　伊藤、增井
協議事項
1. 建築設備に用ゐる代用品の研究に關する件

法制委員會（第5回）

時　6月13日午後6時—8時25分
所　倶樂部室
出席者　委員長　池田
　幹事　池田谷、玉置、
　委員　高木、竹中、本田、中村、横見
協議事項
1. 建築關係法規抄纂の體裁其他に關する件
2. 建築關係法規（殊に時局的法規）の解說に關する講演會開催の件
3. 建築代書士制度の確立に關する件

陳列場小委員會（第3回）

時　5月25日午後5時—6時

所　陳列場別室
出席者　池田幹事長、小林、瀧、松久保各幹事
協議事項
1. 建築材料集成に關する件
2. 6月2日會講演會開催の件

陳列場二日會幹事會（第6回）

時　6月15日午後5時30分—6時30分
所　陳列場別室
出席者　幹事長　池田
常任幹事　小林
幹事　北垣、松久保
二日會　落合（大阪窯業株式會社）
協議事項
1. 建築材料集成に關する件

滿洲建材界の事情を聽く會

時　6月15日午後6時40分—9時
所　倶樂部室
出席者　池田實氏外44名
1. 午後6時40分池田陳列場幹事長より今般上阪ありし滿洲高岡組内田氏に同地に於ける建材界の實情を拜聽するため本會を催したる旨の挨拶あり下記の通り高岡氏を紹介す
株式會社滿洲高岡組
取締役建築部長　内田銈司氏
1. 内田氏は滿洲土建界の現狀統制による材料配給の著しき遲延のための作業遲滯狀況、木材、セメント、鐵鋼、石炭等の入手難事情、今後材料入手の見通し等につき詳細なる講演あり最後に日本内地の援助を切望して結ぶ
1. 講演後金田龍二氏の好意により下記教育紙芝居を公開多大の感銘を與ふ
國策順應教育紙芝居
神武天皇御東遷
今こそ我等も
心の花束
演者　大阪府教化團體評議員
大日本皇風會會長
金田龍二氏
1. 午後9時池田幹事長より講演者に對し謝辭を述べ一同拍手を以て之に和し盛會裡に無事終了解散す

都市武裝促進幹事會（第4回）

時　6月20日午後6時—8時30分
所　倶樂部室
出席者　幹事長　池田
常任幹事　宮田
幹事　淺野、瀧、塚本
協議事項
1. 空襲に關する講演會開催の件
2. 防空に關する意見を聽取する會開催の件

會勢幹事會（長老に物を聽く會）

時　6月4日午後5時30分—9時30分
所　平和樓
出席者　池田實、鈴木末尾、谷民藏、津田敏雄、坪井誠一、松本幹事長、北垣幹事
1. 松本幹事長より本夕會合の趣旨を述べて挨拶あり前記出席の各長老より會に對する意見、希望等開陳あり種々懇談の後散會す

會勢幹事會（會員募集幹事會）

時　6月20日午後5時—6時
所　倶樂部室
出席者　幹事長　松本
幹事　大下、坂口
協議事項
1. 今後會員募集方法に關する件

紀念事業學校分科委員會（第3回）

時　5月28日午後6時15分—9時30分
所　陳列場別室
出席者　主査　池田
幹事　北垣、酒井
委員　飯田、久貝知
篠原、鈴木
高木、永瀬
野中、增山
協議事項
1. 徒弟養成所に關する件
2. 學校建設に關する件

紀念事業學校分科委員會（第4回）

時　6月3日午後6時—8時20分
所　倶樂部室
出席者　主査　池田
幹事　北垣、酒井
委員　飯田、野中
協議事項
1. 學校建設に關する草案決定の件

紀念事業アパート分科委員會（第2回）

時　5月27日午後2時—8時30分
所　甲子園見學並大毎食堂
出席者　主査　藪中
幹事　石井
委員　荒川、石原、岩尾
岡田、小林、野中
1. 午後2時設營アパート見學のため阪神甲子園前住友寄宿舍猫與寮に集合下記場所を順次見學す1. 住友猫與寮、2. 住友謙和寮、3. 甲子園パンシヨン、4. 甲子園アパート、5. オハラアパート、6. 三井銀行三泉寮、
1. 午後8時より大毎食堂にて協議に入り6月7日頃第2次見學を催すことに決定散會す

紀念事業アパート分科委員會（第3回）

時　6月7日午後1時—8時30分
所　旭區方面見學並倶樂部室
出席者　主査　藪中
幹事　石井
委員　荒川、岩尾、石原
矢田
1. 午後1時協會出發下記アパートを順次見學す
1. 江南莊、2. 翠松園、3. 城北園、4. 濱速園
1. 午後6時陳列場に於て委員會開會各自意見の交換を行ひ次回までに

自案を作成持ち寄ることとし散會す

五月例會（見學會）

時　5月25日午後2時—4時
所　グリコ株式會社
出席者　池田寛氏外43名
1. 午後2時一同グリコ株式會社待合所に集合茶菓の接待を受け休憩す
1. 同2時20分同社支配人吉武顯氏より工場並に青年學校等に付大略の說明あり松本幹事長より一同を代表して謝辭を述ぶ
1. 夫れより社員の案內により先づ青年學校の校舍、諸設備等を順次に見學をなし次で製菓工場に向ふ
1. グリコ製菓工場に於て製菓の工程を順次見學
1. 午後4時盛會裡に興味ある本見學を終了一同土產物を受け隨意解散す

高島屋工場見學會（會勢幹事會主催）

時　6月6日午前10時30—正午
所　高島屋天下茶屋工場
出席者　池田寛氏外51名
1. 本日天氣晴朗午前10時頃より三々五々見學場所に集合定刻10時半までに約45名來集一同待合所に於て茶菓の饗應を受けつゝ休憩
1. 午前10時40分全員を3班に分ち各班共同工場係員の案內により各製品工場（製菓、食料品、アイスクリーム、製氷等）の說明を聽取しつゝ順次見學
1. 午前11時40分一同見學終了待合所に集合（アイスクリームの接待あり）田所同工場主任より挨拶と共に工場の概況に付說明あり次で設計者たる株式會社竹中工務店岩本基氏より設計の概要に付說明を聽取
1. 正午北垣常務より工場主臘者に對し謝辭を述べ一同拍手工場より各自に對し土產物の配付あり一同食料品大量製產の工程に關する認識を深め有意義なる本見學會を無事終了解散す

六月例會（講演會）

時　6月12日午後6時40分—8時
所　倶樂部室
出席者　石井富司氏外35名
1. 午後6時40分藪中主記常務開會の挨拶を述べ講師淺野新一氏を紹介す

建築物强度計算用風壓規準に就て

關西高等工業學校教授
本會災害强度委員會幹事
淺野新一氏

1. 淺野講師は前記演題の下に各自携帶の「パンフレツト」に依り詳細に說明し且研究の結果に基き懇切なる解說あり出席者一同又熱心に傾聽す
1. 午後8時講演終了藪中主記常務より講師に對し謝辭を述べ一同拍手を以て之に和し解散す

吉田家見學會（會勢幹事會主催）

時　6月16日午後0時30分—1時30分
所　新町吉田家
出席者　淺野繁氏外28名
1. 午後零時40分一同休憩室に集合吉田家主人木村喜次氏より簡單なる說明を聽取後同氏の案內により座敷各室、庭園、台所を見學し1時20分夕霧遺品展覽
1. 午後1時30分松本幹事長一同を代表して感謝の辭を述べ散會す

入會者

會員入會者

非上　實君　堺市賑町2ノ25（河村建築事務所）
伊藤　義治君　府下泉南郡春木町箕土路389（株式會社大林組）
生田種治郎君　普通贊助員ヨリ轉格
岩佐　覺二君　神戸市須磨區東須磨南町2丁目112番屋敷（岩佐建築事務所自營）
魚田　常治君　東淀川區下新庄町608（株式會社大林組住宅部）
扇　源助君　旭區北清水町944（同）
奥田　孝作君　普通贊助員ヨリ轉格
岡田　博次君　西成區潮路通4ノ15（內外木材工藝株式會社）
岡田幾太郎君　北區東梅田町9（株式會社大林組梅田出張所）
神尾　愼吾君　普通贊助員ヨリ轉格
鬼川　久君　豐中市新免18（株式會社大林組住宅部）
河淵元三郎君　普通贊助員ヨリ轉格
京極　行雄君　兵庫縣武庫郡鳴尾村小松鳥居前5（內外木材工藝株式會社）
菊池庄太郎君　府下北河內郡枚方町茄子作2,465（大阪府警察部建築課）
北川　憲君　普通贊助員ヨリ轉格
熊倉　順吉君　普通贊助員ヨリ轉格
肥海　皖君　西區靭南通3ノ25大林組宿舍內（內外木材工藝株式會社）
小中　正男君　東區京橋3ノ75大林組內（株式會社大林組）
更永　勝洋君　兵庫縣武庫郡大庄村濱田字崇德院276ノ1（尼崎市役所都市計畫課）
柳原　茂君　旭區南島町28（合資會社青木組）
白川　剛二君　府下豐能郡箕面村牧落483ノ14（內外木材工藝株式會社）
濱川　英一君　港區東田中町2ノ137（內外木材工藝株式會社）
白川　雅英君　大正區千島町6（同）
高野瀨藤太君　西淀川區塚本町754（同）
高木　茂雄君　堺市北向陽町1ノ48（同）

鵜本正太郎君　普通贊助員ヨリ轉格
岩野　新治君　兵庫縣明石郡舞子2.099(神戶市役所)
富吉　貞之君　普通贊助員ヨリ轉格
東方　祇道君　普通贊助員ヨリ轉格
土井　淳三君　西淀川區海老江上1ノ59ノ1(株式會社梅田映畵劇場)
中村儀右衛門君　普通贊助員ヨリ轉格
中川　脩造君　堺市出島町617(內外木材工藝株式會社)
播　八郎君　普通贊助員ヨリ轉格
島中　秀吉君　住吉區天下茶屋尙美園內(內外木材工藝株式會社)
羽樣　勝君　府下中河內郡主川村岩田(同)
平木　壽一君　普通贊助員ヨリ轉格
平岩　將雄君　兵庫縣武庫郡御影町石屋字八龜岡20(株式會社神戶製鋼所建築係)
藤井　春三君　西宮市今浦風町84建築事務所自營)
古川　茂君　明石市太寺1ノ2622ノ1(明石市役所庶務課)
堀江　悟郎君　京都市右京區北白川久保田町32(京大工學部講師)
前田　辰雄君　普通贊助員ヨリ轉格
三島　清三君　普通贊助員ヨリ轉格
森村　正義君　普通贊助員ヨリ轉格
山田　貞次君　普通贊助員ヨリ轉格
由佐榮三郎君　港區千代見町1ノ9(內外木材工藝株式會社)
吉村　政治君　普通贊助員ヨリ轉格
四十宮正雄君　兵庫縣武庫郡本山村田中219(日本石綿盤株式會社)
龍　常一君　住吉區天王寺町3.359(中央鐵工所)
武田四十治君　東區佐官町826(內外木材工藝株式會社)
石倉　千滿君　東淀川區三國町740(第四師團經理部工務科)
稻川　春雄君　東成區林寺町4ノ173(合資會社大阪橋本組)
石倉　千滿君　普通贊助員ヨリ轉格
石原　靖介君　豐中市大字廣田1.233清林舍內(東畑謙三建築事務所)
上野　一三君　府下豐能郡庄內村大字洲到止222(自營)
大國　賢市君　普通贊助員ヨリ轉格
木村　善助君　京都市伏見區瀨戶物町738(第十六師團工務科)
小林　善弘君　旭區放出町6ノ35(株式會社大林組)
小林　敏郎君　普通贊助員ヨリ轉格
耕守　正七君　神戶市林田區刈藻通4ノ68(川崎車輛木工課
杉浦　文雄君　普通贊助員ヨリ轉格
曾我部壽男君　住吉區田邊東ノ町5ノ38織田方(大阪鐵道局工務科建築課)
田淵　芳雄君　神戶市須磨區若宮町4ノ66ノ2(合資會社旗永組)
高原健二郎君　京都市伏見區深草西出町63辻龜次郎方(第十六師團經理部工務科)
福田　朝生君　京都市左京區淨土寺馬場町27(京大工學部建築學教室講師)
細田太久史君　北區東野田町9ノ41(神戶中島組)
松尾　博之君　普通贊助員ヨリ轉格
前田　大二君　兵庫縣武庫郡住吉村字古寺(大阪市教育部防護課)
三宅嘉三郎君　尼崎市南城內24(自營)
山岡　長次君　普通贊助員ヨリ轉格
八尾　正次君　普通贊助員ヨリ轉格

地方會員

足立　正雄君　普通贊助員ヨリ轉格
伊木　憲一君　普通贊助員ヨリ轉格
今津福太郎君　兵庫縣尖栗郡山崎町(新堂專門建築事務所)
小倉　政義君　姬路市西材木町29(姬路市役所土木課)
大石　正君　一宮市八幡通5ノ2(東洋紡績株式會社一宮工場津島工場營繕係)
大野　鬼作君　普通贊助員ヨリ轉格
梶川　清君　普通贊助員ヨリ轉格
加藤鐵之介君　長崎市家野町大林組大橋出張所內(株式會社大林組)
久保　正吉君　普通贊助員ヨリ轉格
熊野　茂君　普通贊助員ヨリ轉格
神野　一雄君　北京市中南海公園居仁堂華北電業內(東亞電力株式會社)
曾　繁樹君　奉天市鐵西區嘉工街一段26號(內外木材工藝株式會社奉天支店)
曾我部幸雄君　普通贊助員ヨリ轉格
多田政次郎君　普通贊助員ヨリ轉格
堤　四郎君　滿洲國通化省長官房會計科營繕股內
堤奈　貞吉君　奉天市加茂町61滿洲大林組內(滿洲大林組)
槌野　繁司君　新京特別市關東軍司令部けい8
富岡　工君　兵庫縣加古郡神野村字西之山第十六師團經理部野口派出所內(第十六師團經理部)
內藤　克雄君　兵庫縣加東郡福田村(建築設計監督事務所自營)
平尾　恒一君　金澤市白山町119(株式會社大林組)
村上菊一郎君　普通贊助員ヨリ轉格

山下源太郎君　普通贊助員ヨリ轉格
米田　胤之君　德島市常之島町字常之島305ノ1（福島紡績株式會社德島工場建築係）
若林　秀雄君　普通贊助員ヨリ轉格
明石　早苗君　津市三重町（東洋紡績株式會社）
伊東　一郎君　吉林市外哈達灣福昌公司出張所內（株式會社福昌公司）
生駒　忠孝君　奉天市大和區加茂町16（滿洲大林組）
北岡　俊次君　普通贊助員ヨリ轉格
小林辰五郎君　吉林市外哈達灣福昌公司出張所內（株式會社福昌公司）
根田　容充君　漢口市民生路240號興亞土木工務內（自營）
高橋　好勝君　天津市特二區壽安街5號福昌公司天津出張所內（株式會社福昌公司）
谷村　定雄君　普通贊助員ヨリ轉格
瀧石　一夫君　滿洲國連京線瓦房店青葉街9ノ2（自營）
張西　清吉君　愛媛縣新居郡角野町字立川山654ノ第3住友別子鑛業所土木課東京土木課派出員詰所內（住友別子鑛業所土木課）
細川松太郎君　吉林市朝陽區陽明町31東洋精麻加工株式會社々宅內（東洋紡績株式會社營繕課）
吉見　英治君　京城府大島町41大島寮內（朝鮮軍經理部工務科）

修身贊助員

春本　利作君　大正區鶴町1ノ23（春本鐵工所春本組自營）

特別贊助員

岩佐　重光君　東區京橋3ノ75大林組內（株式會社大林組）
伊藤　義雄君　普通贊助員ヨリ轉格
岡本　金男君　普通贊助員ヨリ轉格
梶田　國次君　普通贊助員ヨリ轉格
佐藤　正好君　此花區大開町1.119（內外木材工藝株式會社設計部）
須濱壽太郎君　東區京橋3ノ75大林組（株式會社大林組）
染田　藤繁君　普通贊助員ヨリ轉格
濱　芳雄君　東區京橋3ノ75大林組內（株式會社大林組）
南口　清彦君　（同）
室谷　山水君　普通贊助員ヨリ轉格
末吉　俊郎君　奈良縣南葛城郡上田鄉村大字名柄（大阪電氣軌道株式會社改良課營繕係）
毛利庄太郎君　大正區千島町135（木材請負業）
山田忠次郎君　普通贊助員ヨリ轉格
山中　英男君　京都市下京區猪熊通四條下ル（株式會社大林組）
奥　清君　住吉區田邊東之町4ノ24（大阪電氣軌道株式會社土木部改良課）
小泉　雄君　普通贊助員ヨリ轉格
錦織　尚嗣君　普通贊助員ヨリ轉格
栗岡　豐夫君　普通贊助員ヨリ轉格
中田　忠孝君　普通贊助員ヨリ轉格
旗手　儀一君　神戶市神戶區下山手通8ノ33（合資會社旗手組）
中村　正秋君　池田市字今在家471（日刊工業新聞社）
植松　久一君　南區瓦屋町7（三陽商會主）

普通贊助員

今井　研治君　京都市右京區山端大城田町31（京都府社寺課）
佐藤　保信君　布施市足代北1ノ31（天王寺區役所會計係）
上田　進君　西成區旭南通3ノ4（株式會社竹中工務店）
清水　勝弘君　池田市今在家13（合資會社大阪橋本組）
水野　茂一君　東區安土町2ノ30大日本紡績內（大日本紡績株式會社研究課）
桑野敬太郎君　京都市下京區八條源町21（第十六師團工務科）

會員退會屆

安藤隆正君、奈良幸次郎君、平野英一君

地方會員

久松富治君、富士原宗行君

特別贊助員

吉川春義君、菊池二郎君、平井希雄君

普通贊助員

芝田武君、上野信三君、小山和助君、永菅進太郎君、三宅保男君、山田貞夫君、岡村安三君、奥野敏男君、中村貫治君、奥村定夫君、旗手榮三郎君

會員轉居・轉勤

小杉　憲一君　神戶市灘區高羽字與松137ノ1
福島　增三君　青島市館陶路取引ビル一階竹中工務店青島出張所內
城生　勝君　東京市中野區野方町2ノ1.165
丹藤　良雄君　北區都島本通6ノ6
中垣　楠一君　株式會社淺沼組
服部　浩君　豐中市新免1.196豐之莊內
井上　正男君　堺市東之町1丁10ノ1小野方
今西　茂雄君　住吉區山阪町5ノ18
木本　政一君　神戶市林田區三石通2ノ4栗田方
久保　清盛君　大阪特殊製鋼株式會社吹田工場
板倉　達君　神戶市神戶區下山手通4丁目（兵庫縣警察部建築課）

甲木　秀治君　兵庫縣加古郡尾上村字長田
菅原　徹郎君　神戸市神戸區下山手通8ノ23
仲　忠博君　住吉區山阪町2ノ83
北川　正次君　住吉區北加賀屋町63
岡部　巖君　山口縣原狹郡小野田町新沖ノ山（日本發送電小野田火力發電所新築工事場大倉土木作業所內）
杉浦　文雄君　西淀川區御幣島町291（米村建築事務所內）
實崎　靖君　靜岡市淺間町1ノ8三島方（靜岡市臨時復興局移轉課兼資材課）
伊東　進一君　堺市三國ケ丘551宮下方
青山　正義君　兵庫縣武庫郡瓦木町高木字中ノ坪490
梶山　莵夫君　堺市六條通3ノ24
栗田　正一君　神戸市林田區三石通2ノ4
今井元一郎君　東京市芝區高輪北町30
中島　敎喜君　中支派遣登部隊本部工務
鄉田　庄次君　上海四川路1.089狹恩威路アパート內
大津　利雄君　兵庫縣武庫郡精道村芦屋八田860

地方會員

石原　政三君　住吉區田邊東ノ町6ノ13
荒木　正利君　奉天市朝日街四段282ノ4
垂水　馨君　奉天市瀋東軍修理部奉天派出所內
八尾　實君　東京市目黑區下目黑1ノ27西村方
高橋叡太郎君　東京市本鄉區林町93
山浦　智海君　兵庫縣加古郡荒井村清水組出張所內
村上　保君　新京特別市富吉町2丁目東邊道開發株式會社工務部建設課
草野　正男君　神戸市灘區中鄉町4ノ6
重築　源市君　米子市末廣町鴻池組詰所內
田上　善吉君　和歌山縣西牟婁郡田邊町福路町2
前田　善博君　東京府西多摩郡福生村フセ第1號工事場深澤組出張所內
谷川勝次郎君　奉天市大和區江北街協和住宅59ノ6
近藤　鐵次君　兵庫縣武庫郡瓦木村高木字石澤43
山本　和夫君　京都市左京區若王子町28

特別賛助員

木下　昌次君　豐中市上野142ノ24
河合　好吉君　兵庫縣武庫郡魚崎町橫屋495
平井廣一郎君　西區靱上通一丁目辻惣商店建物部內
田中　榮一君　北區堂島船大工町20
山鷹　一喜君　兵庫縣川邊郡小濱村字川面20

普通賛助員

島井　洋三君　滿洲派遣軍孫吳橫山部隊本部
繁岡　鑛君　東京市足立區千住旭町專賣局足立工場工事場
立田　秀夫君　岐阜縣吉城郡船津町日本發送電株式會社牧工事出張所內
中園　誠一君　旭區新森小路中3ノ61
上田　虎男君　奉天市瀾生町14長村組奉天出張所內
山里　長次君　旭區左專道町856出口彌三郎方
中垣　武彥君　鞍山市北一條町46滿洲大倉土木株式會社營業所內
長谷川齊雄君　東區清水谷東ノ町422出口方
小杉義雄男君　旭區嶋野町97

昭和十五年改訂第十版

昭和十五年三月下旬發行
本綴・菊　截　判

市街地建築物法令

日本建築協會版

●定價65錢　送料6錢●

日本建築協會發行

大阪市北區朝日ビル4階
振替口座大阪 39975

賣捌　丸善本支店
　　柳々堂書店

編輯後記

★昭和建築史の1頁を燦然と飾る四天王寺五重塔が茲出度竣工した。明治の末から、大正・昭和と3時代に跨つて日本建築界が得た技術の最高峰が偶々この様な尊い、意義深い建物を通じて現された事は誠に慶賀に堪へない。扉内部の彫刻亦建物に相應しい見事なものが出來上つた事は、誠に悦ばしい極みである。往年の關西大風水害は、此處ではこの上ない幸の因になつたのであつて、禍が轉じてこれ位福となつた事は稀であらう。

★御繁忙の中を、無理な申出に對して、快く筆を御執り下さつた恩師天沼博士に對しては、感謝と云ふ氣持を通り越して寧ろ恐縮と云ふ氣持で1杯である。村田先生をはじめ諸大家の玉稿を賜り、錦上尚は花を添へ得た事は讀者と共に慶び度い。御執筆の各位に對し深甚の謝意を表する次第である。

★近き將來の國寶を取扱ふと云ふ千載一遇のこの輝しい課題と、豊富な資料を前にし乍ら、編輯技術の拙劣と時局による諸種の困難からこの程度のものにしか纒め得なかつた事は唯々汗顔の至りである。

★拝借した圖面の中、平面圖は未完成であつたので、その後の詳細圖と照合し乍ら編者の方で仕上げをした。從つて其の手際の悪い事と、不正確な所は一切此方の罪である。又挿入豫定であつた塔の斷面圖が、豫期しない突發的事故のために掲載出來なかつた事は、返す返すも殘念であつた。

★尚今回の五重塔に關して更に求められる方へは曩に四天王寺事務局から發行された「四天王寺圖錄・伽藍編」、雜誌「四天王寺」第4卷第10號以下の十數號及び目下編纂準備中の「四天王寺圖錄・復興編」を參照される事を御勸めする。

★將來何時かは極めて貴重な文獻資料となるであらう内容を收錄したこの小冊子を3,000名に垂とする本協會員の座右に贈り得る事は局に當る我々としては無上の喜びである。この種のものはなる可く多く、又總ゆる層の人の手によつて保存される事が望ましい。この様な意味から今回は餘部を例月より多く刷つて、逼く希望者へ頒つ事にした。友人知己の方々へ精々御吹聽願へれば幸である。

★竣工目近の現場に特有の極めて繁雜な中を、寫眞の撮影其他に種々の便宜を與へられ、又圖面や工事寫眞の整理に思はぬ御手數を煩した現場主任大浦氏に對し、又貴重な寫眞の轉載を特に御許し下さつた四天王寺御當局に對し、此處に厚く御禮を申し上げる次第である。（昭和15年6月7日　政岡基次）

▲6月號所載の池長美術館設計監督者小川安一郎氏に對し無届にて且つ氏名も明記せず掲載せし事は協會雜誌編輯者の不用意に依り訂正す。（編輯事務石田）

建築と社會

第23輯　第7號

毎月1回1日發行　定價　1册　50錢（郵稅3錢）　12册　6圓（〃　36錢）

本號に限り　定價　80錢

昭和15年6月25日印刷　昭和15年7月1日發行

發行・編輯　戸川弘

印刷人　大阪市北區朝日ビル日本建築協會内

印刷所　プラトン印刷社　大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　社團法人　日本建築協會　大阪市北區中之島3ノ3　朝日ビル　**電話長北濱(23)4501番(9)**　**振替口座大阪39975番**

特約販賣店　柳々堂書店　大阪市西區京町堀羽子板橋西　**電話土佐堀2440番**　**振替口座大阪2084番**

禁轉載

本號に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の復製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15,00
普通	½頁	1回	8,00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45,00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40,00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25,00
アート（中挿）	½頁	1回	20,00
表紙2	1頁	1回	60,00
表紙3	1頁	1回	45,00
表紙4	1頁	1回	80,00
建築事務所錄	1欄	1回	1,50
（建築關係業者案内）	1欄	1回	5,00

廣告掲載御申込は本會へ直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割増、代金引換はお斷り致します。

"建築と社會" 第23輯 第7號　廣告索引

ア　旭硝子株式會社……12
　　淺野スレート株式會社……14
　　阿部鐵工所……25
エ　榮進社……15
オ　大阪窯業セメント株式會社……中揷
　　大阪伊丹商店……4
　　大野製作所……表紙 4
　　奥村重兵衛商店……23
　　大阪田島應用化工株式會社……表紙 2
　　オリエンタルメタル製造所……1
キ　桐田商會……18
ク　久保商店……19
ケ　建盛商會……6
サ　佐久間工業株式會社……17
　　坂田ベンチレーター製作所……6
　　三英電機製作所……26
　　三正商會……19
セ　政正合資會社……9
　　清光社……3
タ　田中タイリング商會……4
　　田中昌司商店……9
　　大洋組……5
　　田村商會……27
ト　東京芝浦電氣株式會社マツダ支社……24
　　東洋リノリユーム株式會社……2
　　巴商會……21
ナ　學樂屋家具裝飾店……表紙 3
　　名古屋製陶株式會社……25
　　南滿纖業建材株式會社……15
ニ　日本建築紙工株式會社……13
　　日本陶機株式會社……11
　　西原衛生工業所……10
　　西孫南店建築金物部……20
ノ　野澤幸三郎商店……22
ヒ　美素工業所……中揷
マ　松井商店……11
　　松下電熱株式會社……7
ミ　三井物産株式會社……8
ム　村田商會……前附 1
ヤ　矢橋大理石商店……20
ヨ　横河橋梁製作所……6